



彼女たちに



文風 冴月

登場人物

上城光（かみしろ ひかり）：主人公。内気な性格で、周りからはあまり良く思われていない。

神代闇（かみしろ あん）：光のクラスにやってきた転校生。光と仲が良い。

成本朝美（なるもと あさみ）：光と同じ小学校出身。長い髪をひとつに結んでいる。

岡崎遥（おかざき はるか）：朝美と仲の良い少女。肩口で撥ねた髪が印象的。

白鳥慧子（しらとり えこ）：いつもやる気のない少女。千百合と同じ小学校出身。

万乗千百合（まんじょう ちゆり）：お金持ちの家に住むお嬢様。慧子と同じ小学校出身。

長谷川琴理（はせがわ ことり）：ふたつに髪を縛っている。亜月と仲が良い。

戸塚亜月（とづか あづき）：クールな少女。ふわふわな髪が特徴的。琴理と仲が良い。

木下茜（きのした あかね）：短い髪の、背の小さな少女。桜と仲が良い。

北条桜（ほうじょう さくら）：明るい性格の少女。茜と仲が良い。

及川小乃未（おいかわ このみ）：成績も容姿も良い少女。光とは二年間同じクラス。

岸辺栄子（きしべ えいこ）：小乃未と同じく、成績、容姿ともに良い少女で、光とは二年間同じクラス。

金森優花（かなもり ゆうか）：光のクラスメート。ひとつ前の席に座っている。

福永美咲（ふくなが みさき）：光のクラスメート。活発な少女。

大島三葉（おおしま みつば）：光のクラスメート。あだ名は『ミツ』。

水鳴瞳（みずなり ひとみ）：図書委員会に入っている少女。大人しい性格。

草巻桃片（くさまき ももひら）：三年生。給食委員会委員長。

倉木小夜子（くらき さよこ）：三年生。図書委員会委員長。

巡来未（めぐり くるみ）：髪の長い少女。落ち着いた性格。

『光』

いつも通りの教室。四十一人分の机と椅子。チョークの線が消え去った黒板。うっすら砂埃に汚れた窓ガラス。「いじめをなくそう！」と書かれた壁の掲示物。

いつも通りの教室。息の詰まる教室。私は必死に呼吸をする。

去年とは違う教室。でも、一年生の時となんら変わらない。教室なんてみんな同じだ。全てがいつも通り。

ここに私の居場所はない。周囲の喧騒から身を隠すように、担任の先生から渡されたプリントに視線を落とす。今日の予定が書かれていて、朝のSHRのあとに体育館で始業式があるらしい。先程から六回も目を通したのでいい加減に飽きてしまった。上級生としての誇りを持とう、という文章が少しだけ薄く印刷されていてしまっているのが気になる。今年から私も二年生だ。去年一年とはまた違った生活が始まる。続々と教室に入ってくる生徒の顔を見るとその実感が沸く。

ああ、私はここで、独りぼっちなんだ。知らない顔。知ってはいるけれど、話したことのない顔。

溜息が漏れる。

時間が経つにつれて席が埋まっていく。自分自身の居場所とはまた違う。決められた位置。先生たちから見た、私たちの座標。本当の私たちの「席」はこんなふうに目で見えるものじゃない。目では見えないけれど、確かに存在していて、だからそれは私を悩ませる。生徒が轟くこの狭い教室の中で、私は何処に座れば良いのだろう。

判らない。

ちっとも、判らない。

周囲にはとりとめのない会話が溢れている。「知ってる？ 三組の北原が——」「英語の長岡ってさあ——」「——屋上の鍵が壊れてるんだって」「昨日のテレビで——」「見てみてー、新しいケータイ買って貰えたんだ——」溢れる。溢れすぎて、私の鼓膜はもう限界。疲れたって言っている。噂にもならない他愛のない会話。社交辞令。そういったもので溢れている。小さな教室の中はもう歩く隙間もない。

チャイムが鳴ってSHRが始まる。担任の川嶋先生は去年、この学校にやってきた英語の先生だ。今年で二十五歳になる先生は、化粧っ気がなく明るい。教壇に立つ川嶋先生は昨年度よりも落ち着いていて、ちゃんとした「先生」だった。見えて安心できる。先生が出席を確認していく。

「上城さん」

名前を呼ばれて、ぼんやりと顔を上げて返事をする。今日初めて声を出したのでおかしい具合になって恥ずかしかった。川嶋先生は構わず出席を取る。

頭を上げて気がついた。私のひとつ前の席に誰も座っていない。

いったい誰だろう。ふたつ前に座る髪の長い女の子は、確か金森さんだ。去年同じクラスだった。話したことはないけれど、席が近かったので憶えている。金森と上城の間に入る名字の子か……。なんという名字の子だろうか。学校では両手で数えられる人数しか話したことはない。そんな私が考えたところで答えが出る筈もなかった。

そんなことをぼんやりと考えていると、川嶋先生はにこにこしながら、

「もう知っている人もいるかも知れませんが、このクラスには新しく転校生が来ます！」

そう言った。その転校生は登校するのが少し遅れてしまっているらしい。そんな説明を先生がしていると、教室の扉を控えめにノックする音が聞こえた。きっと転校生だ。入ってきて、と先生が呼ぶ。どんな子だろう。その子は私の前の席に座るわけだから、仲良くなれたら良いな。そう思った。

数分後、黒板に書かれた文字を見て、私は少し驚いた。

それは勿論、ただの偶然であるかも知れないのだけれど。それでもなんだか運命的なものに感じてしまったのだ。

女の子の名は神代闇。神様の神に時代の代、そして真つ暗闇の闇で、と書いてカミシロ アンと読むらしい。肩まで伸ばした、濡れているように黒い髪。大きく、そして深淵の暗さを湛えている、黒い双眸。すっきりとした顔立ちで、どこかで見覚えのあるような顔だった。凡庸で有り触れた感じではなく、懐かしい感じがする。

「えと……神代闇です。ど、どうぞ、これから宜しくお願いします」

短い挨拶。それが、転校生カミシロ アン最初の言葉だった。さらさらと砂浜に風が吹いた時みたいな音。ゆっくりと鼓膜を震わせる声。神代さんの座る席は、予想通り私の前の席になった。びしっと着込んだ黒を基調とした制服がこちらに近づいてくる。膝のお皿を隠すくらいの長さのスカートがゆらゆら揺れる。自分の席に辿り着くと神代さんが口を開いた。

「よろしく、お願いします……ええと」

少し戸惑ったような声でそう言った。黒く光る瞳が可愛い。

「カミシロ ヒカリです。よろしく」

「ああ、よろしく……カミシロさん」

私の名字は、漢字こそ違うけれど、読み方は神代さんと同じカミシロだ。

上という字に城、そして太陽とかの光で、上城光と書いてカミシロ ヒカリと読む。光という名前は、私には重い。周りの人々を照らせる存在にはきつとなれない。自分自身の足元さえ、真っ暗で見えないと言うのに。

神代さんはぎこちなく私に笑いかけると、自分の席にすんと腰を下ろした。肩まで伸ばした髪が揺れて、ほんのり懐かしい匂いがした。

私の通う市立泉ヶ丘中学校では、一年生から二年生に進級する際にクラス替えが行われる。そのクラス替えの所為で、一年生の頃にいた数少ない私の友人たちはこのクラスにはいない。新学期の何処か浮かれた空気は、吸い込むと肺の奥底にでっぴりと溜まり、吐き出すことはできないみたいだった。気分が重い。

「クラスが変わって、また、転校生の神代さんを迎え、新しい生活の始まりです。その生活に慣れることができるか、友達と仲良くやっていけるか……心配な人もいるでしょう。でも、安心して。今、みんなが同じスタート地点に立っているんです。みんなが同じように不安で、同じように新しい生活に期待しているんです。このクラスのみんなが早く仲良くなれることを、先生は願ってます」

言い切った川嶋先生は、自分の言葉に浸っていた。周りを見れば何人かの生徒はしきりに先生の言葉に頷いていた。綺麗な言葉に酔っているのだ。

勿論、先生の言葉通りになれば、私だって嬉しい。でも、先生の言うような『みんな仲良く』というのはなかなか難しい。それは先生という立場の人が目指すものなのだろう。永遠に設定され続ける、究極目標。叶うことのない、理想……。

「さて、クラス全員が揃ったところで、出席番号の一番早い、浅黄さんに号令をして貰いましょうか」

そう言われた浅黄さんはしぶしぶ、きり一つ、きょうつけ一、れ一、というおざなりな号令がかかる。周りのみんながそれに倣う。目の前の神代さんも、慌てて礼をする。私もそれに遅れないように礼。身体に染みついた習慣は、どんなにそれが不完全でも律儀に反応する。だらっとした挨拶に川嶋先生は少しか眉をひそめたけれど、何も言おうとはしなかった。

「おはようございます」

きちっと揃わない朝の挨拶はこうして終わった。新学期が始まる。

時間が経つにつれてクラスは打ち解け合っていたけれど、私はどうもクラスの人たちとは上手く馴染めないでいた。それはアンも同じのようで、彼女も馴染めていないようだった。その為、私は休み時間にはアンと話すことが多かった。いや、正確にはアンと話すか、次の授業の準備をしてぼうとして過ごすかのどちらかしかなかったのだけれど。溜め息が知らず知らずの内に出る。

はあ……。

一年生の時は、同じ小学校出身の人がクラスにいたのでその子と行動を共にしていた。成本朝美という名前の、私の友達。朝美は快活明朗な子だから、いつも彼女の周りには友達がたくさんいた。人一倍思いやりがあって、一緒にいて安心する存在だった。朝美の周りの子たちといると、私もその友達の内の一人なのだ、と思えて、とても嬉しかったのだ。朝美のお陰で私にも幾人かの友達ができたけれど、今のクラスにはいない。ひどく気分が沈む。

朝美なら……。

あの子なら、また一年前のようにたくさんの友達に囲まれているのだろう。

羨ましい。そう思った。

私の周りには何もない。あるのは教室の喧騒と、周囲からのちくちくと刺さる視線だけ。いつそのこと見ないでくれれば助かるのに。私など空気のように扱ってくれればそれで済むじゃないか。勿論、そんなことは思っただけで言えず、私はただただ息苦しい教室の中で小さくなるしかなかった。

そんなふうに一人で塞ぎこんでいると、前の席のアンがくると振り向いて、私に話しかけてきた。

「何かあったの、ヒカリ？　元気ないけど」

いつしかアンは私のことをヒカリと呼ぶようになった。私も彼女のことをアン、と呼ぶ。アンは私以外の人は必ず名字で呼んでいるみたいだった。つまり、彼女が下の名前で呼ぶのは私だけ。なんだかそれはとてもくすぐったくて、と同時にとても嬉しいことだった。アンは、私にとってのかけがえのない友達なのだ。

「ううん、大丈夫。ちょっと寝不足なだけっ」

私は努めて明るい口調で言った。久しぶりに声を出すから、調子がおかしくなっては堪らないので、ばれないようにしたのだ。

「そう、なら良かった」

アンは安堵の表情を浮かべて、胸を撫で下ろした。

声のおかしな調子が、気づかれた様子はない。

私たちは授業中には勿論お喋りなんかはしないし、休み時間になっても会話をすることは一日の内にそれ程あることでもないから、学校では殆ど声を発さない。周りの女の子たちは如何してあんなに大きな声で話すのだろうか。私にはよく解らない。大きな声で廊下の端から端まで、自分の思いを届かせることができたなら、私にももっと多くの友達ができるのだろうか。

でも。

でも、私にはアンがいる。いつもそばにいてくれる。私とアンとの間にある距離は言葉など要らないくらいに、近いものになっていた。距離が遠ければ遠い程、大きな声を出さないと相手には伝わらないけれど、今の私たちにはそんな離れた距離なんてない。

言葉なんて必要ないんだ。そう、思った。

ある日、英語の授業で長岡先生に問題を当てられた。長岡先生は五十歳を目前とした男の先生で、影で髪が薄いことを馬鹿にされているのをよく耳にする。私はこの先生をあまり好きになれない。人を見てくれで判断するところが好きにはなれなかった。人それぞれの個性をもう少し認めて欲しい、なんてことを思う。

黒板に踊る異国の文字が、私の前に立ちはだかる。白く武装した凶器。必死に頭の中で答えを探っても、一向に正解が浮かぶ兆しはなくて、

「……解りま、せん」

と私は正直に小さな声で答えた。

私は英語と社会が苦手だった。何故かは解らないけれど、苦手なのだから仕様がな。得意なのは国語だ。物語を読むのは楽しい。ここにはないもうひとつの現実が、本の中にはあるから。物語の中では私は私であって私でなくなる。それが、ひどく心地良いものだったのだ。

ぼんやりとそんなことを考えていると、長岡先生はいつものように厭味ったらしくねちねちと、
「まったく、こんな簡単なことも解らないで如何するんだ？ 一年からまたやり直すか」

教室中がどっと笑い出した。私は顔が真っ赤になって、汗だくになった。悪意のない笑いもあるのかも知れない。でも、今の私には何もかもが耐えられない。みんなの視線を感じる。氷でできた矢のように、その視線は四方八方から私の身体に容赦なく突き刺さる。肩やお腹にぴりぴりとした痛みが走る。呼吸がし難い。突然水の中に放り込まれた小動物のように、私は必死に酸素を吸った。不可視の海、溺れる。厭だ。

「もう良い、座りなさい」

先生は呆れた声でそう言うと、他の人を指した。その子はすらすらと淀みなく答える。長岡先生は満足して笑顔になった。

私は堪らなくなり、じっと教科書を読む振りをした。動くことさえ儘ならない。一挙手一投足がクラス中の視線を浴びるみたいで、怖かった。羞恥で耳の先まで真っ赤だっただろう。授業は私の気持ちを無視してどんどん先に進んでいく。黒板の上を這う白チョークの不規則な音が聴こえる。

視線は上げられない。

もう指されたくない。

厭だ。

厭だ厭だ。

教科書に印刷されているアルファベットたちが淡く、滲んだ。

授業が終わった後、及川さんと岸部さんが私の席の前までやって来た。ちょうどその時、アンはトイレに立っていていなかったの、この場には私と及川さんと岸部さんの三人きり。

胸がドキドキした。

この二人はクラス的女子の中でもトップクラスに頭の良い子たちである。

二人とも髪は黒く長く、毛先まで手入れが行き届いている。端麗な容貌に、頭脳明晰。及川さんの知的に光る眼鏡が格好良い。私のような人間などが、なろうと思ってなれるような人種ではない。

多分、私のことなど空気とすら認識していないだろう。でも、でもである。そんな二人がわざわざ私のような人間の席まで話に来てくれたのである。どんな話をされるのだろうか。もし、万が一、ううん、億が一にも……友達になろう、とか言われてしまった暁には私は冷静でいられるだろうか。休み時間を一緒に過ごしたり、授業中に他愛無い内容のメモが回ってきたりするのだろうか。そうしたら是非、アンとも仲良くなって欲しい。この幸せをアンにも分けてあげたい。

そんなことを想像すると、私はとても嬉しく、

「邪魔だから」

という及川さんの言葉が初め、理解できなかった。脳が麻痺してしまったみたいで。

「…………え」

私は漸くそれだけを絞り出した。

「だから、授業の邪魔なのよ、あんた。あんたみたいな馬鹿がいるとね、授業の進度が遅くなって、クラスのみんなに迷惑がかかるの」

邪魔。

「解る？ 解るよね？ 貴女はこのクラスでは邪魔者なの」

邪魔者。

邪魔…………私が、邪魔…………。

「なんとか言ったら如何なのよ。謝ることもしないの？」

岸辺さんの口が音を紡ぐ。

ぎちぎちと錆びついた首を廻す。教室を見渡す。

みんなの、視線が。

視線、が。

その時、始業のチャイムが鳴り響いた。

「行こう、栄子」

及川さんが岸部さんを連れて、席に戻った。他のみんなも慌てて席に着く。

数学の担当の林先生が来る数秒前に、アンは戻って来た。

「大丈夫？ 顔色、悪いよ」

アンは心配そうに私の顔を覗き込んだ。

「うん、大丈夫、だよ…………」

不安げなアンをよそに、数学の授業が始まった。

幸い、数学では教師に当てられることはなかった。

放課後、アンと一緒に帰ろうと提案してきた。

二人で教室を出る。後ろでこそこそと話す声が聞こえた気がした。

学校は丘の上にある。その為、帰るには校門前の坂を下りなくてはならない。その坂は丘を囲むようにぐるっと渦を巻く形になっている。両側には歩道があって、最近工事をしたばかりらしく、綺麗に舗装されていて歩きやすい。私はアンと違って自転車で登校している。彼女と歩幅を合わせるように、自転車を押しながら歩く。からからと車輪が回る。その音がやけに寂しく聞こえた。

地球は太陽の周りを回りながら、自身も回転しているらしい。その音も、こんなふうにかからかと寂しげな音なのだろうか。それを他の星たちはいつも聴いているのだろうか。遠くの空に耳を澄ましてみても、残念ながら何も聞こえなかった。青い空に飛行機が一機走っていた。

街が一望できる丘を、私とアンは無言で歩く。辺りには誰もいない。この時間は部活動のある時間だ。帰宅部の子ども、友達と校内に残っているのかも知れない。

知らず知らずの内に溜息が出てしまう。今日の出来事を思い出す。厭な気分だ。英語の授業に始まり、その後のクラス全体の視線。明日からどんな顔をして教室に行けば良いのだろう。

隣を歩くアンもいつも以上に口数が少ない。いけない。アンにまで辛い思いをさせたくない。でも、如何すれば良いのだろうか。まずは私から何か話題を……ああ、でも元々口数の少ない私に何ができるだろう……。

クラスにいる明るい子たちはいつも会話を止めない。何をそんなに話すことがあるのだろう、と昔から不思議に思っていた。私には会話する能力がない。何を話したら良いのか、さっぱり判らない。昨日見たテレビの話題やアクセサリーの話をする女の子たちを見て、とうてい私にはついていけないと思った。小学校の頃は一生懸命テレビドラマを見たり、流行の曲を聴いたりして話題に乗り遅れないようにと思っていた。でも、途中からそういった生活に嫌気がさして。必死に縋りつこうとする自分がどうにも厭になった。中学校に上がる時には、もう周りの話題になんて一切ついていけなくなった。

アンがふと口を開いた。

「ねえ、ヒカリ。本当のことを言って。如何して貴女は、そんなに苦しそうな？」

じっと私を見つめるアン。

全部解っていたのだろう。私が何かを隠していること。

もう迷いはなかった。本当はアンを巻き込みたくなかったけれど、切実な目で見つめてくるアンに嘘はつけない。つきたくない。

「実はね……」

私は英語の授業の後に起きたことについて、アンに話した。自分で話していて、とても情けなくなった。アンは黙って私の話を全部聴いてくれた。話し終える頃には、私たちは寂れた公園まで来ていた。どちらが言い出した訳でもなく、ただ会話に夢中になっていたら自然と辿り着いていた。こうやって宛てもなく、アンと一緒に歩いていきたい。たとえ何処へ辿り着こうとも、アンと一緒になら私はそれで満足だ。

「そう、だったんだ……」

明らかにショックを受けたように、アンが溜息をつく。何もアンが傷つくことなどない。全部、全部私が悪いのだから。二人で腰を下ろしたベンチ。ペンキが所々剥がれている。

「でもね、アンに話せて少し楽になったよ。有難う、アン」

私はアンに明るく言った。

本心だった。

「私ね、アンと一緒にいると安心する。出逢ってからまだあんまり経ってないのに、如何してだろうね。なんだか、もつとずっと前から私とアンは一緒だった気がするよ」

普段の私なら絶対にこんなことは言わない。相手を困らせるだけだ。だって、意味が解らない。でも、今のアンにな

ら話しても良い気がしたのだ。

アンと出逢ったのは四月の始業式の日だ。なのに、なんだろうこの気持ちは。本当は遠い昔に彼女に出逢っていたのではないか、と思ってしまうのだ。

アンは泣きそうな顔だった。形の良い眉を歪めて。

「如何したの、アン？」

「ううん、なんでも、ないよ」

なんでもない、というようには見えない。アンは何かを隠している？

誰にだって秘密のひとつくらいあるだろうけれど。でも、なんでこんなにアンは泣きそうなんだろう。

「アン……」

私の声が虚しく空気に溶ける。アンには届いたのかな。彼女の鼓膜を震わせる前に、私の言葉は消えてしまったのかも知れないと不安になる。

「大丈夫。ほんとに、大丈夫だから」

自分に言い聞かせるようにアンは大丈夫と繰り返す。細い肩が少し震えている。アンも何かに怯えているんだ。揺れる黒い瞳と、肩までの黒い髪を見ていたら、ぐっと胸が締めつけられた。隣に座るアンがとても大切に思える。

アン……。

「アン」

もう一度彼女の名前を呼ぶと同時に、私はアンを身体を抱きしめていた。華奢な身体。強い風が吹いたら折れてしまいそうなくらい。

こんなにも、アンを身体は小さくて頼りない。そんなアンに、私は全てを委ねていたんだ。こんなのってない。悪いのは私だ。アンが不安に押し潰されそうになるのも当然だ。

ぎゅっと背中に回した腕に力を込める。目を閉じる。風が吹いて、私たちの髪の毛を弄ぶ。アンが今こうして私と一緒にいてくれることがとても嬉しい。背中にアンの手が回されて、彼女の体温を感じる。心の中に温かいものが溢れていく。

「……ヒカリ？」

当惑した声のアン。目を開けてアンを顔を見つめる。潤んだ黒い瞳。ずっと通った鼻梁。少しだけ朱が差した頬。

アン。

私の、私だけの、アン。

伝えたい。心の中にわだかまる色々な想いを。でも、言葉にした瞬間に価値を失ってしまいそうで。

だから、私は――

「アン」

再び彼女の名前を呟く。なに、と彼女がこちらを向く。私はアンを小さな唇に、自分のそれを重ねた。

初めてのキスは、私に安心をもたらした。彼女の柔らかい唇の感触を感じる。温かい。こんなにも人は温かいものだったんだ。女の子同士でキスをするだなんて、私はいよいよおかしくなってしまったのかも知れない。でも、止められなかった。アンを励ますのに最適な言葉を、私は知らないから。ただ、こうするしかなかった。

アンの手が私の頭を撫でる。時折当たる爪の硬い感触がまた気持ち良い。彼女の名前を呼ぶ。アンも私の名前を呼んでくれる。嬉しい。とても、とても。

ここが私の居場所。

アンを隣。私とアン、二人でひとつ。

私たちは今、ひとつになった。

アン……。

唇を放すと、私たちはおでこをくっつけて照れくさそうに笑い合った。アンを抱く腕に、力を入れる。放したくない。私はアンとずっと一緒にいたい。

「アン、ずっと。ずっと一緒にいよう」

アンは瞳の端っこに浮かんだ涙を拭いて、うん、と大きく頷いた。その笑顔がとても可愛くて、私はまたアンに口づけをした。私たちに言葉はいらなかった。ただ、こうして触れ合うだけで、想いは伝わるんだ。

次の日、いつも通りの時間、ホームルームの始まる十五分前に学校に着いた。

気分は沈んでいた。周りの人の視線が万力の如く私の心を締め付ける。

教室に着くとアンはすでに席に座っていた。私が声をかけると笑顔でおはよう、と返してくれる。昨日のあれを思い出して、私は少し赤くなった。勢いとはいえ、アンとキスをしたのだ。あの柔らかい感触は今も唇に残っている。

アンの笑顔を見るだけでさっきまでの暗い気持ちは和らいでいく。今日も一日、頑張ろうという気持ちになる。とても不思議だ。笑顔という魔法がこんなにも素晴らしいものだったなんて。

授業が始まって、相変わらず及川さんたちの視線が怖い。でも、目の前に座るアンの背中を見ているだけで、心の中にじんわりと温かいものが広がっていく。それだけで私は満足できる。黒板に書かれた文字を必死にノートに書き写す。周りの視線は、いつしか気にならなくなった。

有難う、アン……。

昼休み、トイレに行こうと廊下を歩いていると、目の前に朝美がいた。懐かしい。逢うのはクラス替えをしてからは初めてのことだった。一年生の頃は一緒に自転車で帰ったものだけれど、最近ではしなくなっていた。

なんだか、元気がなさそうにも見える。朝美も新しいクラスに馴染めていないのだろうか。

勇気を出して手を振ってみたけれど、それは朝美がちょうど教室に入っていくところで。彼女は気がつかない様子でそのまま教室に入って行ってしまった。振り翳した手が所在無げに揺れる。少し、恥ずかしくなった。

普通の子なら、大きな声で名前を呼んだり、自分から駆け寄ったりするのだろう。私には到底できない。自分の所為で誰かに迷惑をかけるのではないか、と思うとなかなか行動できない。昔からそうだった。思ったことも口にできず、そのままにしてしまうことがよくある。良くないことだとは思っているけど、できないものはできないのだ、と半分諦めてもいる。

朝美と話がしたい。上げていた手をだらりと下ろして、そんなことを考えた。

六時間目の授業が終わると、掃除の時間だ。

教室掃除は大変だ。非力な私には椅子が載った机を持ち上げるだけで腕がぶるぶる震えてしまう。教室掃除の人数は七人しかいないので、机を運ぶ係り、床を掃く係り、床に雑巾をかける係り、と分けられている。私はその中でも一番大変な机を運ぶ係り。中に教科書がたくさん入っている机はとても重くて、その重みに軋む指が痛い。歯を食いしばって机を教室の後ろへと運んでいく。

いつもなら誰かに手伝って貰って一緒に運ぶのだけど、今日はそうできなかった。アンは雑巾の係りだし、頼むことはできない。

机の脚を引きずらないように気をつけながら後ろへ下がっていると、何かに足がぶつかった。後ろを確認していなかった私が悪いのだ。それは水の入ったバケツで、ぶつかった拍子に倒れてしまった。私自身も咄嗟のことに反応できずにそのまま机ごと転んでしまう。

水が床に零れる音と、机と椅子が倒れる音とが混じり合った。バサバサッと音を立てて机の中身も散らばり、尻餅をついた私に降りかかった。

「ちょっと、あんたなにやってんのよ！」

大声で怒鳴ったのは金森さんだ。この机は彼女のものなのだ。机の中にあった教科書やノートが水で濡れた床に散乱してしまっている。

「ゆーちゃん大丈夫？ これびしょびしょ！」

「うわあ、ひどいねこれは！」

周りの子たちも悲鳴を上げる。そんな中、体の上ののしかかる机をどかして良いのかすら判らずに呆然とする私。ああ、如何したら良いのだろうか。零れた水で、制服はあちこちがびしょ濡れだ。

「ごめ……なさい……」

消え入るような声でそう言ったけれど、きっと彼女たちには聞こえていない。金森さんへの同情の視線。私への非難の視線。ちくちく、刺さる。

床には萎れた教科書。ページの開いたノートには、金森さんの整った文字が濡れて滲んでいる。

びしょびしょなのは私も同じで、とても惨めだ。床に打った身体も痛い。

「ヒカリ！」

アンが雑巾を投げ出して、遠くから駆けつけてくれる。ごめん、アン。もう心配をかけないようにしたかったのに。私って本当に駄目だ。

「神代さん、まさかその子のことかぼうの？」

「そうだよ、悪いのは上城さんじゃない！ バケツをひっくり返すわ、優花の教科書を駄目にするわ」

「まあでも、お二人さん仲良しだからねえ」

みんなの視線がアンに向かう。ニヤニヤと底冷えするような笑い。その中には及川さんと岸部さんのものも混ざって

いる。無秩序に混じり合っている。まるで、パレットの上で絵の具を全色混ぜ合わせたあのような、気味の悪い色が瞳に宿っている。

アンは倒れた机をどかし、私を抱き起こしてくれた。

「ごめん、アン……」

どうにかそれだけ言った。声が掠れて、気持ち悪い。

肩に置かれた掌から、アンの温もりを感じる。アンは無言で周囲の生徒たちを見渡した。

「なによ、その目……！」

金森さんがキッと睨み返してくる。

「わざとでしょ」

少し震えた声で、アンが言った。か細い、けれど芯のある声だ。

「はあ？」

「バケツなら私が片付けたもの。それがまた如何して水の入ったバケツがあるの？」

「それは……」

アンは何を言っているのだろうか。金森さんたちの表情が曇る。

「それに机も、わざと教科書を詰めて重くしておいたのでしょうか？」

「い、いつも入れてるわよ。だから重いのはいつもで……っ」

「いいえ、違うわ。いつもはきちんとロッカーへしまってた筈よ。私、後ろの席だからよく見えたのだから」

「……っ」

二の句が告げなくなった金森さんの代わりに及川さんの口が開く。

「たまたまでしょ。たまたま優花がロッカーにしまい忘れたっただけ。バケツだって、誰かが終わったことに気がつかないで用意してくれたに決まってるわ」

「そんなこと！」

すらすらと答える及川さんにアンが食って掛かる。でも、

「でも、どちらにせよ、上城さんが優花の教科書を台無しにしたのは事実よ」

その言葉にアンは何も言えなくなる。私はじっとみんなの視線に耐えるだけで、何かを言おうにもいったい何を言えば良いのか解らない。

確かに教室の真ん中にバケツを置いておいては危ないし、金森さんの机は異様に重かった。けれど、私がしてしまったことは事実だ。原因は私の不注意なのだから。

このままではアンまで悪者扱いされてしまう。それだけは厭だ。

「もう、なによこれ、どうしたの！」

突然、川嶋先生の甲高い声が聞こえた。今まで囃してていた子たちは途端に元気をなくして、いえ、あの、としどろもどろになっている。

「上城さんがバケツの水を零したんです」

岸辺さんがびしやりと言った。川嶋先生は教室を見回して、生徒一人一人の顔を見る。最後にその視線が私の濡れそぼった制服に注がれた。

「光さんは保健室で制服を乾かしてきなさい。床は教室掃除の人たちで拭いておくから」

先生の優しい声音に涙が出そうになった。代わりに安堵の溜息が出る。周りの子たちからは不満の声が上がる。

肩を預けていたアンに、囁くように告げる。

「……アン、もう良いよ。私、保健室に行ってくる」

「一人で、大丈夫？」

「うん、平気」

それに、一人じゃない。離れていても、私とアンはいつもそばにいるのだ。だから、怖くないし、寂しくもない。

むしろこの場にアンを一人に残していくことのほうが怖いけれど、川嶋先生がいることだし、大事にはならないだろう。

小走りで教室を出る。濡れた制服がひんやりと私を包む。倒れてきた机にぶつけたお腹がじくじく痛んだ。

保健室のドアをノックしてみても、中から返事はなかった。上の窓からは蛍光灯の光が漏れているのに、誰もいないのは変だな、と思いもう一度ノックしようとする、ドアがあちらから開いた。中から現れたのは保健の篠原先生でなく、戸塚さんだった。

戸塚亜月。一年生の時に同じクラスだったので何度か話したことがあるけれど、いつも怒っているみたいでなんだか怖い、という印象しかない。腰まで伸ばしたふわふわの長い髪が揺れている。

「……！」

戸塚さんはドアを開けたままの姿勢で固まっている。口を閉じたり開いたりを繰り返している。表情は硬い。まるで何かが来るのを待っていたけれど、それとは違う私が来たから驚いたかのような。

「帰って……」

漸く出てきた言葉はその一言だった。怒気を孕んだ戸塚さんの声。

「帰ってよ！」

そう言って彼女は勢いよくドアを閉めようとしたので、私はノブを掴んで声を張り上げた。

「と、戸塚さん、如何したの！」

何があったの？ と問いかけても、戸塚さんは答えない。ドアはすごい力で引っ張られて、今にも閉じてしまいそうだから。

「お願いだよ、戸塚さん……入れてよ」

然し、向こうから返ってきたのは無常にも、

「五月蠅い！ 帰れって言ってるでしょう！」

ドア越しに戸塚さんの荒い息遣いが聞こえる。そんなにも、厭なのか。私は何処にいても、嫌われる。嫌われ者の私。

アンと離れていても一緒だから、何も怖くないと思った。寂しくないと思った。でも、それはただの強がりではなかった。私の子供っぽいだけの幻想。そんなふうに考えなくてはやっていけないと思ったからなのだろうか。

濡れた制服が気持ち悪い。寒さで身体が震える。

保健室のドアは完全に閉じてしまった。中からは何の音も聞こえない。

誰かに、逢いたい。

――誰でも良い？

違う。

アンに逢いたい。

――本当に？

私の声が頭の中にこだまする。本当に、私はアンに逢いたいのだろうか。誰でも良いんじゃないのだろうか。

違う、と頭で否定しても、心の声が邪魔をする。

私は……。

チャイムが鳴って私は我に戻った。廊下の時計を見るともう帰りのSHRが終わった時間だった。仕方ないから今日はこのまま帰るしかない。少し身体は痛むけれど、ぶつただけだ。寝れば治る、と思う。

教室に戻ろう。SHRは終わっているから部活のある子はもう教室にはいないだろう。濡れた私を見て不審がられるだろうけれど、そこは耐えよう。

まずアンに謝って、それから……。

ばらばらに千切れたノートのページを繋ぎ合わせるように、思考の断片を頭の中で組み立てる。金森さんのことが浮かんだ。謝らなくてはいけない、と思うと気分が沈んでしまう。

私は嫌われ者。

私は、そんな私が嫌いだ。

私は嫌われ者なのだ。

教室に戻る為に、階段を上がっている時だった。階段の踊り場で朝美の声がした。

私は朝美の声に誘われるようにそちらに向かう。一段一段上がらなくてはいけないのが煩わしい。朝美までの距離。一步一步、踏みしめて。タン、タン、タンと踊り場へ。

朝美と話がしたかった。ここ数日の居心地の悪さを、朝美なら吹き飛ばしてくれるような、そんな気がしたのだ。ふいに瞼の奥にアンの顔が浮かんた。私は結局のところ、相手は誰でも良かったのかも知れない。頭では、違う、アンじゃなきゃ駄目なんだ、と思っても心はそうはいかない。誰かと話したい。誰かに私の気持ちを聴いて欲しい。今は朝美にその役が回ってきただけ。回したのは他でもない、私自身。

彼女の顔が見えた。朝美の周りには何人かの女の子が集まっている。知らない子たちの前で朝美を呼ぶのは気が引けたけれど、それでも彼女との会話を思うと、口は勝手に動いて、

「あさ——」

「隣のクラスの上城光さん。なんか陰気で、見てるこっちが厭になっちゃうよ」

朝美を呼ぼうとした私の言葉が、途中で切れる。

私の陰口を叩いているのは、去年同じクラスだった岡崎さんだ。下の名前は確か、遥だ。岡崎遥。朝美ととても仲の良い子だと記憶している。

岡崎さんは止まらずに言葉を紡ぐ。

「あの子、殆ど話さないし、たとえ話してもあの転校生の子だけなんだよね」

「なんかあの二人似てるよね。顔も性格も」

「うわあ、キモいキモい」

他の女の子たちも口々に言う。

私は声が出せなかった。顔が青ざめる。

朝美を呼びたい。

彼女なら、私を助けてくれる。

小学校の時からずっとそうしてくれていたように。私を護ってくれる。きっと、きっと。黙って話を聞いている、朝美なら。

「あの子さ、私と同じ小学校なんだよね」

朝美が口を開いた。懐かしい朝美の声。さらさらと砂浜の上を波が撫でる時の音に似ている。じんわりと心の奥に染み渡る。心地良い。私の心がふわっと軽くなる。ぼんやりと頭の片隅にアンの顔が浮かんた。

アン……。

結局、私はアンに何を求めていたのだろうか。アンがいれば、いてくれればそれで良いと思った。なのに、今の私は朝美に縋ろうとしている。アンに失礼だ。そう思っても、心は言うことを聞かない。錆びついた時計の針が時を刻むように、私の気持ちは朝美をゆっくりと求めていく。

でも、

「だから同じクラスの時は仲良くしてあげていたの。でも、本当は厭だったんだあ。内気であまり話さないし、一緒にいてもつまらないんだよね」

朝美の口がそう紡いでいた。ふと、彼女が顔を上げる。後ろでひとつに結った黒髪が、夕日に照らされて揺れた。

私と目が合う。綺麗な瞳だった。でも、何処か違和感がある。

それは狂気。朝美の心の奥に潜む闇がそのまま瞳の黒を染め上げたみたいで。

にいと、朝美が笑う。

「なんだ、いたの、光」

口を三日月のようにひん曲げて、彼女は言う。

そこらへんに落ちている雑巾でも見るかのように。

信じられない。如何して、朝美はこんなことを言うのだろうか。

「うそ……………」

私はやっとのことで言葉を発した。

でもそれはまだどこかで朝美のことを信じたい、と思う言葉だった。

「嘘じゃないわよ。あんたを友達だと思ったことなんて一度もない。一緒に帰る時とか、私、精一杯堪えていたの」呼吸が荒くなる。

目の前がぐらつく。

如何して。

「同じクラスで小学校も同じだったから、仕方なくだったの……あんたの前で、私は上手く笑えていたかしら？」

如何して。如何して。

私は泣きそうになった。

視界が滲み、歪む。

「あはははははっ！ 泣くの？ あんたは昔からすぐ泣くよね……私、あんたのそういうところがすごく嫌いだった。見てるとムカつくんだよねえ。泣いたら先生が助けてくれるとでも思ってたの？」

周りの子たちも一斉に笑い出す。

「朝美、それ言い過ぎー」

甲高い。

「あはは、でも仕方ないよねー」

耳に障る。

私ににやりとした笑顔を向けると朝美は踵を返し、

「行こう」

と言って取り巻きの子たちと共に去ろうとした。

私は涙を必死に堪え、階段を駆け上がった。

朝美との距離が離れていく。私自身の足で遠ざかる。でも、本当はもっとずっと前から私たちは離れきっていたのかもしれない。それに気がつかずに、馬鹿みたいに朝美に縋って。挙句の果てには、私は……。

三階に上がった所で誰かと激しくぶつかった。

「痛っ」

「きゃっ」

私にぶつかった人は尻餅をついた。同様に私も廊下のひんやりとした床に投げ出される。

見ると、私と衝突したのはアンだった。

「ど、如何したの、ヒカリ？ 何で泣いてるの？」

アンは私に駆け寄ると心配そうにそう話しかけた。

私はなんでもない、と呟いて起き上がり、屋上まで階段を駆け上った。

後ろでアンの呼ぶ声がした。

この学校の屋上には柵がない。その為、普段から生徒の立ち入りを禁止している。でも、鍵が壊れているという噂は本当だった。重い扉を開けて、屋上に出る。きいっと音を立てて扉が閉まる。ぱたんと重く閉まる音に、なんだかもう元には戻れない気がした。

初めて屋上に出たけれど、特に面白いものなんてない。ひび割れた地面から雑草が生えているくらいで、あとは何もなし。がらんとして少し寂しい。

初夏の風が吹く。もうすぐ夕暮れなのに、日差しの匂いがする。

スカートが風に吹かれるのも気にせずに屋上の縁までふらふらと歩いた。冷えた身体が震える。

ふと、屋上の入り口のドアが開く音がした。

振り向くとそこにはアンがいた。

「如何したの、ヒカリ？」

アンの声がか細く響く。何かに怯えているような声だ。

私はかろうじて声を出す。

「私、邪魔なんだって」

風が音を乗せ、アンの鼓膜まで届けてくれた。悲しみや辛さなんかも一緒に。

「そ、そんなことないよ！」

「ううん、良いの。有難う。アンだけだよ、そんなことを言ってくれるのは……でもね、私……」

私は一歩、一歩後ずさりした。上履きに屋上の無機質な感触が伝わる。

あと、何歩だろう。

「厭だよ、ヒカリ。せっかく友達になれたのに……私、ヒカリがいないと厭！」

じりじりと一歩ずつ後退する。私の命は一歩一歩磨り減る。

不意に足場の感触がなくなった。

後ろを見ると、そこが屋上の淵だった。下には校庭が広がっている。白線で描かれた楕円が、ぽっかりと開いた地獄の入り口みたいに見えた。

校庭は土でできているけれど、四階から落ちればきっと死ぬだろう。

アンがそろそろと近づいて来た。

「ねえ、お願い、ヒカリ。私を一人にしないで」

アンが懇願するように私に言った。

苦しそうな呼吸のアン。

それはまるで今の私のようにあった。

さっき朝美の友達が話していたこともあながち間違いではない。

私とアンは似ている。性格も容姿も。

「でも、私は……！」

私はアンを裏切った。アン以外には何もいない、とそう思ったのに。でも、朝美という希望に縋ってしまった。朝美の声さえ聞ければ、アンのことなど如何でも良いと思ってしまった。

悪いのは私。全部、私だ。

ぼろぼろと、自分でも信じられないくらいの涙が溢れ出す。

「アン……」

ごめんね、アン。ごめん。

心の中で何度も、何度も呟いた。おまじないみたいに。

「ヒカリ、大丈夫、心配しないで。私、いつまでも貴女と一緒にいるから。だから……」

優しい声が私の鼓膜と心臓を震わせる。気持ちがぐらつく。

厭だ。

私はこの世界にとって必要なのだろうか。何をやってもうまくいかないし、運動も下手、英語の簡単な問題すらでき

ない。仲良くなりたい人からは邪魔と言われ。大事な友達にだって、厭な思いをさせる。

こんな私に生きている価値はない。手の甲で溢れ出る涙を拭う。でも、拭ったそばから溢れてくる。

「アン……ずっと一緒にいたかったけど、ごめんね……………大好き、でした」

そこまで言って、私の体はぐらついた。ぼんと後ろに押されるような感覚。ああ、きっとアンに想いを伝えることができたからだ。この身体は、もうこの世に未練はないんだ。そう思った。

浮遊感。

上履きが屋上の床から離れて。ふわっと何もない空へと投げ出される。

いつの間にか走ってきていたアンが咄嗟に腕を伸ばす。もう死のうと思った筈なのに、アンの柔らかい手をもう一度触りたくて、私もがむしゃらに腕を突き出す。

私たちの距離は、こんなにも、遠い。遠くなってしまった。

私とアンの手は触れることはなかった。白い五本の指が、目一杯に伸ばされる。それでも、届かなかった。「厭っ！！」

それが私の発した声なのか、アンの声なのかは解らない。

でも、それが私の最後に聴いた音だった。

真っ逆さまに落ちる。涙がきらきらと宙に舞う。アンの泣き顔が遠くに霞んだ。

さよなら、アン。

体を揺すられて目を覚ました。

「早く支度なさい、アン。今日は転校初日でしょう？」

そう言うとその人は部屋から出て行った。

「え？」

気がつくと、私はベッドの中にいた。カーテンの隙間から朝日が漏れている。布団から這い出て、辺りを見回す。ここは何処だろう。

私の部屋ではない。どこことなく似ているが、同じではない。勉強机に小説がぎっしり詰まった本棚、丸い簡易テーブル、そして姿見が置かれている質素な部屋。私の部屋も実際こんな感じであった。

おずおずと鏡を覗く。肩まで伸ばした黒い髪。宇宙の果てのように黒い、ふたつの瞳。そこにはアンがいた。

いや、正確には私がアンなのだ。

ヒカリが死んで、私はアンに生まれ変わったのだ。

私はなんだかとても嬉しくなった。

自分の体を、否、アンの体をぎゅっと抱きしめる。いつか抱きしめた時に感じた、アンの脆さを感じる。

涙を堪えられなかった。屋上で流したものと同じくらい、溢れる。こんなにも自分の中に涙があったなんて知らなかった。

身体に回した腕に力を込める。

アン……。

「ずっと一緒だよ、アン……ずっと、ずっと……」

それから私は涙を拭って、呟いた。

光あれ――

彼女たちに『光』 了

妹（1）

『妹』

妹の夕美が死んだと聞かされた時、私は手に握った携帯電話がひどく恐ろしい物のように感じた。目には見えない電話の向こうに、地獄が広がっているのではないか、という恐怖に駆られたからだ。今朝、元気に学校へ向かった夕美の姿が脳裏に浮かぶ。肩口で揺れた黒い髪。細い髪が風に舞ったのを思い出して、少し寂しくなった。

担任の村中先生に病院まで送って貰った。名前は知らないけれど、先生の車は白いスポーツカーだった。病院までの道は、夕方ということもあってとても混んでいた。なかなか前に進めないことに腹を立てるように、先生の車が唸った。

私は太陽が沈み行く彼方を、助手席に座ってじっと見ていた。あの太陽が沈みきる前に病院に着かないと、もう本当に夕美に逢えないような気がした。

太陽が完全に遠くの建物の奥に沈みこんでから、私たちは病院に到着した。辺りはすっかり暗い。送って貰っておいて申し訳ないけれど、私は先生を置いて車の外へ転がり出た。受付に行くとお父さんが待っていてくれて、厳かな声で「こっちだ」と告げた。仕事の途中で駆けつけたのだろう。少しよれたスーツはいつも通りだけど、余計に力なく思えた。

前を歩くお父さんの大きな背中が、今はなんだか小さく見える。目指すは三階。夕美はそこにいる。

病室には妹の遺体がベッドに転がっていた。病院に特有の、なんとも言えない薬品の混じり合った臭いが気持ち悪い。

信号無視をしたトラックが、横断歩道を渡っていた妹を轢いたそう。即死だった。ベッドの脇に夕美の鞆が置いてある。学校指定の小奇麗な鞆も、今はすっかりぼろぼろで。可愛らしい熊のぬいぐるみがついていていた筈だけれど、今はそれも見えない。きっと事故の時に外れて何処かへ行ってしまったのだろう。

茫然自失としているお父さん。その隣で、憔悴しきったお母さんがベッドに横たわる夕美に縋りついて泣いていた。慟哭が涙となって、夕美の眠る白いシーツを濡らす。

私は何もできず、何も考えられず、ただただ白い病室の片隅に取り残されていた。お父さんもお母さんも、いつまでもこの場所を離れようとはしなかった。

ここは地獄だろうか。

いや、違う。

厭になるくらい、現実だ。

翌朝、窓から差し込む日の光で目が覚めた。昨夜は遅くなって帰宅して、お風呂に入る気力もなくベッドに倒れこんだ。

そのまま気がつけば朝だった。夢なんて見なかった。いや、見たかも知れないけれど憶えてはいない。

ひとつの命が消えた後だというのに、清々しいくらい綺麗な太陽が昇っていた。

一人分の体温が消えた朝。

それでも、世界は速度を変えずに廻る。

ダイニングに行って家族の顔を見るのが辛くて、何もやる気が起きなかった。布団に包まって暗鬱な心を転がしていると、控えめなノックが聞こえた。お母さんかも。いつもなら私はもう起きている時間だ。起きて来ないから心配しているのだろう。こんな時だからこそ、姉の私がしっかりしなければいけないのかも知れない。

ドアがガチャリと音を立てて開く。閉ざされていた私の部屋に、朝日の匂いが染み込んで来た。清々しいはずの匂いなのに、私の重い気分が変わらない。

「早く起きなさい！ 遅刻するわよ」

お母さんの怒声が響き、布団を無理矢理に剥がされた。

違和感のあるお母さんの態度。

夕美が死んだというのに、態度がいつも通りなのだ。おかしい。だって、昨日の今日だよ。普通、もっとショックを

受ける筈だ。

仕方がないので寝ぼけた頭をさすりながら一階に下りた。ダイニングにはスーツを着込んだお父さん。新聞を小難しい顔で読んでいる。まるでこれから出勤しかねない様子だ。

お父さんにおはよう、と挨拶すると新聞からは目を逸らさずに、むう、と唸った。

お母さんが急き立てるように朝食を出してきた。

食欲ないな……。

「食べたくない、よ」

「何言ってるの、この子は！ 本当に遅刻するわよ！？」

解ったからそんなに怒鳴らないでよ、と思った。私は大きな声や音に弱い。怒鳴り声を聞くと、体中が悲鳴を上げて、筋肉が弛緩してしまうのだ。

震える手で箸に手を伸ばす。湯気を立てる温かいお味噌汁と玉子焼き。シンプルだけど、お母さんの玉子焼きはとても美味しい。我が家は毎朝、ご飯だ。友達の千百合は毎朝パンを食べると言っていた。なんだかそれだけで普通と違っていて羨ましかった。

いつもならすぐに食べ始めるのだけれど、昨日の病院での光景を思い出してしまって、どうにも食が進まない。夕美はもう二度と、温かいご飯を食べることができないのだ。そう思うと、ただの白いご飯も美味しく感じられた。

どうにかして茶碗の中身を胃に押し込んでいると、ドアの開く音が聞こえた。お母さんもお父さんダイニングにいるのに、いったい誰だろうか。

ふと視線をそちらにやると、そこにはなんと妹の夕美が立っていた。

寝癖のないセットされた髪。自分の通う私立小学校の制服を着て、手には学校指定の鞆を持っていた。鞆についた熊のぬいぐるみがぶらぶら揺れている。

昨日死んだはずの妹の夕美が、そこにいた。

一瞬、目を疑った。妹を失ったショックから幻を見てしまったのではないかと思ったのだ。でも、これは夢でも幻もなくて、ちゃんとした現実だった。

「……ゆ、夕美？」

「おはよう、お姉ちゃん」

笑顔の妹に、私は喜びではなく、恐怖を覚えた。いや、畏怖の方が近かっただろう。

三日月のようにひん曲がった口元が、見下しているかのような目線が、胸につけた名札の「成本夕美」という文字のひとつひとつが、私に嫌悪感を抱かせた。

胃の中に直接素手を突っ込まれて掻き回されている気分だった。先程、無理矢理に押し込めたご飯と玉子焼きを想像して、余計に気味が悪くなる。

「如何して……」

「朝美！ 早く食べてって言ってるでしょう！」

「……は、はい」

お母さんが怒鳴るので、仕方なく残りのお味噌汁をお腹に流し込んだ。その間、夕美は私の向かいに座って、無表情に私を眺めていた。いったい、何が如何なっているのだろう……。

私はその年、中学校に上がった。

自宅からは比較的近い。自転車で二十分弱だから、朝から良い運動にはなる。ペダルを漕いでいる途中、家に起こっている異変について考えた。昨日死んだはずの妹の夕美が生きているということ。勿論、夕美が生きていたことは素直に嬉しい。でも、では昨日のアレは何だったのだろう。

病院の独特の死の匂い。携帯電話の向こうから聴こえたお母さんの泣き声。厳格な父の見せた虚ろな目。

あの痛々しいまでにリアルな光景は夢でなかった。断言出来る。

だとすれば……。

「……死んだ人間が……生き、返った？」

「え、何か言った？」

聞こえてきたのは上城光の声。気がつけば、私はすでに駐輪場に到着していた。考え事に夢中になってしまって、如何やって辿り着いたのか思い出せなかった。

心配そうな顔で覗き込んでくる光に、
「なんでもない。ほら、ぐずぐずしてると遅れるよ」

そう言って、私は少し早足で歩き出す。光は慌てて私のあとを付いてきた。とてとて、という効果音がつきそうな歩き方だ。

光とは小学校からの付き合いだ。悪い子じゃない。でも、何故か周りからは距離を置かれていた。聞くところによれば、暗い、だの動作が鈍い、だの悪い話ばかり。なんであんな子と一緒にいるの？　なんて訊かれるのにはもう慣れていた。私は最初、光の悪口は許さないからね、と陰口を叩く者に軽くすごんで見せたりしていたが、この時には殆どしなくなってしまうていた。

それは勿論、私自身が仲間外れにされるのを恐がったからだ。私は私を護る為に、大切な友達を売った。それだけだ。

そんなことを微塵も知らない光は、今日も朝から私にへばりついていて。
まったく、他につるむ友達とかいないのかね……。

「ねえ、光。あんたさ、死んだ人間が生き返ると思う？」

私の突然の質問に、光はうーん、と頭を抱えて悩み始めた。
「どう、だろう……？　死んじやったら天国か地獄に行くわけだから、帰ってくるなんてことはないんじゃないかなあ」
と良く解らない理論を語る光。彼女の中には天国だの地獄だの、具体的なイメージがあることだろう。夢のない私とは決定的に違う。

光は何処か夕美に似ている。髪形の所為だろうか。妹のことを思い出して、また気分が沈んでいく。
ふと気がつけば、光と話す私をクラス中が見ていた。
私が周りを見渡すと、クラスのみんなはわざとらしく視線を外したり、他愛無い雑談を始めたりした。
違うんだよ、みんな。私はこいつの友達なんかじゃないから……だから……。
だから、私を独りにしないで……。

一日中、授業に身が入らなかった。終始、夕美のことを考えていた。昼休みに遙がやってきて、
「如何かした、朝美？　なんだか元気がなく見える」
と心配してくれた。死んだ人間が生き返るだなんて馬鹿げたことを言っても、余計に心配されるだけだ。遙にこれ以上心配をかけたくない。
「ううん、なんでもないの。ちょっと風邪気味で……」
咳の真似をしたいところだったけれど、すんででやめる。わざとらしくなってはいけない。
「何か悩み事があったら言ってね。私、力になれるか解らないけれど、話くらいなら聴けるから」
遙の癖のある髪の毛が、窓からの風に揺れた。柔らかに舞う黒髪に一瞬目を奪われながら、
「有難う、遙」
私はそう告げた。久しぶりに笑えた気がする。

午後の授業は少しだけ集中できた。黒板の文字を必死にノートに書き写していると、いつの間にか放課後になっていた。

家に帰りたくない、そう思った。夕美にどんな顔で逢えば良いのか解らない。
学校を出てすぐ、携帯電話が震えた。プー、プー、というバイブ音が、何かを急かすように騒ぐ。自転車を邪魔にならないところで停めて、胸ポケットから携帯電話を取り出す。
それはお母さんからの着信だった。妙な既視感に囚われながら電話に出ると、
「夕美がね、夕美がっ……！！」
夕美が死んだ。
お母さんはそう言った。確かにそう言った。
これではまるで昨日と同じ。厭だ。

受話器の向こうには地獄が広がっている。そう思った。

妹（2）

翌日、窓から差し込む日の光が鬱陶しくて目が覚めた。

夕美は昨日“また”死んだ。今度はコンビニに強盗が入り、たまたま居合わせた夕美が殺された。

世界が歪んでいた。そうは思っても私に何が出来るわけでもなかったけど。ただただ世界の不条理を受け入れるしかなかった。

でも、この場合の不条理とは「何故妹が死んだのか」ということに憤っているのではない。「何故死んだ妹が生き返ってくるのか」というものだった。

もはや得体の知れない存在となった夕美は、今日も昨日と同様、生き返った。

そして、家族におはようと言うと、あの憎たらしいくらいの笑顔で私を見たのだ。

お母さんに急ぎ立てられて朝食を胃に収めた。朝から不快感をたっぷり溜め込んだ。

学校に着くと、駐輪場には光がいつものように私を待っていた。

上城光。私の、友達。

妹に似た、私の……。

「如何したの、朝美？ 元気なさそう」

ぼそぼそと呟くように、それでも私を心配するように話しかけてきた。彼女の肩まで伸ばした黒い髪が揺れた。

労わりの声がとても嬉しかった。そのまま光とどこか遠いところに行きたくなった。

奇妙な妹もいない。光を疎ましく思う同級生もいない。厳しい両親もいない。そんな何処か、遠くの場所へと。

私にはこの子だけがいれば……。

「朝美！」

遠くから私を呼ぶ声がしたので振り向くと、そこにはクラスの友人たちがいた。名前を呼んだのは岡崎遥だった。

クラスには仲の良い者同士の集まるグループが少なからず生じるものだが、遥のいるグループはクラス内のヒエラルキーは最上。つまり、女子なら誰もそのグループには逆らえない。逆らうことがどれほど愚かなことか。

私は一応そこに所属していた。明確にどうこうしたから所属した、と認められるわけではないけど、帰り道に一緒にファーストフード店に寄れる関係は少なくとも友人と呼べるだろう。

グループの一人である亜月の厳しい視線を感じた。如何してそんなやつと一緒にいるの、という視線だった。言葉にされなくても解った。肌がぴりぴりと刺激されたけど、厭な思いに対抗するようにグループのみんなの顔を見た。

岡崎遥。白鳥慧子。長谷川琴理。木下茜。万乗千百合。北条桜。戸塚亜月。

みんなの視線、が。

視線、が。

「は、遥……え、と、おはよう」

なんだかひどく間抜けな感じになってしまった。

七人の視線が私と光を射抜く。

厭な一日がまた始まる。そう感じた。

一時間目の数学、二時間目の家庭科、三時間目の社会、と昨日よりかは集中して授業に臨んでいる。四時間目は理科だ。理科室の黒板にチョークで書かれた「光の性質」という文字。私たちが、普段ものを見ることができるのは光の反射があるからだ、と先生が説明をする。なるほど確かに暗い部屋では本を読むのは難しいな、と私は解ったような気持ちになってノートを書く。

光は直進する。まっすぐ進む。

光は反射する。跳ね返って進む。

光は屈折する。曲がって進む。

いろいろな性質があつて、まるで私たちみたいだ。まっすぐ進むときもあれば、あっちに行ったりこっちに行ったりすることもある。

「知ってる者もいるかも知れないけどね、光はこの世界で最も速く進むんだ」

大宮先生が教室を見渡して言った。どれくらいの速さか、みんな解るかい？ と続ける。そこかしこであべこべな答えが上がる。ざわつく私たちを制して、先生がチョークを滑らせる。

「光はね、秒速三十万km。と言つてもぱっとしないかも知れないけどね……どれくらい速いかと言うとね、一秒間に地球の周りを七周半もしてしまう程なんだ」

すげえ、という声が男子から上がる。

たったの一秒で地球をぐるぐるぐると。なんてすごいのだろう。

ふと気になって、光に視線をやる。彼女は必死になって板書を書き写している。もしかすると先生の説明も右から左へと聞き流しているかも知れない。

秒速三十万km。

それだけの速さがあれば。私と光は、きっと何処へだって行ける。ぐるぐると世界一周旅行を楽しんで、現実という檻から抜け出せる。

光をぼんやりと眺めてそんな下らないことを考えていると、授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。

今日の授業はここまで、と大宮先生が言い、号令がかかる。いつもの日常だった。私は何処へも行けはしない。

放課後、委員会の仕事があるけどすぐ終わると思うから、と言つて光は図書館に行ってしまった。教室で彼女の帰りを待っていると、鞆の中の携帯電話が震えた。

ああ、またか。

私の心は本当に壊れてしまったのかも知れない。自虐の笑みが自然と浮かぶ。

不安な心を押し潰して、通話ボタンを押した。お母さんの声が告げた。

「朝美！ お、驚かないで聞いてね……ゆ、夕美がね、夕美がっ！」

ああ、私の心だけではない。

私が壊れてしまったのだ。

いや、世界も一緒に壊れたのだ。

そう思った。

それでも翌日には妹の夕美は何事もなかったように蘇る。

毎日毎日毎日毎日。時間が巻き戻っているわけではない。ただ、夕美が毎日死んで、毎日生き返る。それだけのことだ。

それはまるで復活の神とか偉大な悪魔のようだった。もはや人間ではない。

それに、周囲の人間はそれに気がついていない。

病院の人間だって、毎日お世話になっているのにも関わらず、私たちのことは何も憶えていないのだ。

そんな日々がもう一年以上続いている。

私は中学二年生になった。

この学校では学年が上がる度にクラス替えが行われる。

光とは別々のクラスになってしまった。違うクラスになったことで、より一層彼女の悪口を聞かされた。その度に私は愛想笑いと共に彼女の悪いところを挙げる。するとクラスメイトたちは笑う。それ言いすぎだよ、と笑いながら言って、また笑う。ふざけんな。

でも、彼女を庇うことなんてもうできやしなかった。何故なら、クラスの中で居心地の良い地位を獲得してしまったから。

幸せ、という目には見えないものが私の手の中にある。それを必死に、落とさないように、なくさないように、私はぎゅっと握り締める。光の手を掴む為には、今あるものを手放さなくてはいけない。そんなこと、私には考えられなかった。

それに私はひどく疲弊していた。得体の知れない妹。相変わらず厳しい両親。そして、光へのいじめ。いじめといっても目立つものではなく、陰口や嫌がらせが主だった。

もう何もかもが厭だった。何も考えたくない。ただただクラスで浮かないようにしていた。

そんな時、光のクラスに転校生がいる、というのを知った。名前は知らないけど、光といつも一緒にいるらしかった。よくもまあ、そんな物好きもいたものだ。最初はそう思ったが、私だって似たようなものだったし、今では彼女の隣に並ぶことすら叶わないのだから、素直に羨ましく思った。そして、頑張って欲しい、と思った。

「え、えっとあの子に道を訊かれたのよ。転校したてで地理が解らないらしくって」

「へえ……そうなの」

眼がすうっと細められる。

遥の可愛い唇が開く。

「私はてっきり、上城光の話でもしているのかと思った」

「そ、そんな訳ないじゃないの！　なんで私があんな奴の話を……」

私の苦しい言い訳を黙って聞いていた遥だったが、彼女には全てお見通しのようなだった。

カチコチに固まっている私のもとへ歩み寄って来て、言った。

「ねえ、朝美。解ってるよね？」

地獄の底から襲来した悪魔みたいな笑みで私を見ている。

ポケットで携帯が震えだした。妹の死の震えだ。そして、私自身の。

厭。

翌朝、勿論妹の夕美は生き返っていた。

黒目がちな瞳。肩口で整えられた髪。

本当に光に良く似ている。そして、あの転校生にも。

私は遥に昨日言われたことを思い出す。

「如何したら良いかぐらいは解るよね？　態度で示すの」

つまり、面と向かって光を拒絶しろ、ということだろう。やるしかない。だって、やらなくちゃ、やられるのは私だから。

そして、もうひとつ、電話で夕美の死をお母さんから聞いた時、遥は光かあの転校生からの電話だと思ったのだろう。しつこく内容を聞きたがった。妹が死んだのだ、とだけ教えた。どうだ、ちょっとは同情してくれよ。そう思ったのも束の間、遥は怪訝な顔で訊いてきた。

「朝美に妹っていたの？　初耳なんだけど」

「あれ、言わなかったっけ？」

「言っていないよ。それに、遊びに行ってもいつも妹さんいなくない？　会ったことないよ」

そうして、遥は勘違いをして、今の電話は光か転校生からだ勝手に決め付けてしまったのだ。私が嘘をついているのだと思ったのだろう。

でも、それはもしかしたら嘘なのかもしれなかった。

目の前にいる、毎日蘇る妹は、では一体何者なのだろう。

そもそも、私には妹なんていなかった。記憶のどこを辿っても、妹と過ごした思い出なんて皆無なのだ。今まで何か、記憶に薄い靄がかかっていて、判然としなかったのだ。

この不気味な、夕美という私と一文字違いの名前を持った女は、一体何なのだろう。

「おはよう、お姉ちゃん」

笑顔で挨拶して、夕美が私の部屋に入ってきた。

窓から差し込む光が、夕美を照らした。

近付く妹を突っぱねて、尋ねる。

「あんた、誰なの？」

私の声が空気を張り詰める。夕美は、なんのこと？　と言って首を傾げる。

「私に妹なんて、いないわ！　だから、あんたは誰なのよ！？」

そう言い切ると、呪縛が解けたように今までの記憶が鮮明に蘇ってきた。私にとって、過去に妹という者は存在しなかった。今ならはつきりと解る。この化け物は、私の妹ではない。

「な、何を言っているの、お姉ちゃん？　夕美はお姉ちゃんの――」

「煩いっ！　黙れっ！！」

怒鳴ると同時に、私は机の上に予め用意しておいた果物ナイフを掴む。

ひんやりと掌に冷たさが伝わる。きっとこの冷たさは私の心だ。

朝日に照らされて輝くナイフはひどく美しかった。

「お前がいるからだ！ 光も転校生も、そして夕美！ お前らみんな同じ顔して、私を困らせて！！」

「な、何の話？ 夕美にはさっぱり解らないよ」

「まだそんなこと言うの！？ 黙れって言ってるでしょう！」

彼女の細い手にナイフを振り下ろす。瞬間、真っ赤な血が飛び出る。

顔面蒼白になりながらも暴れる夕美に、容赦なく切りつける。右肩、脇腹、首、頬、太もも、右腕、左肩。踊るようにナイフを振る。その度に赤い血が、ぱっと空中に舞う。

逃げようとした夕美の腕を掴んで、背中に血で汚れたナイフの切っ先を力の限り突き立てる。思っていたよりもずっと深く刺さる。溢れ出る血で、ナイフを持つ手が濡れる。

ううっと短く呻くと、夕美は泣きながらその場に蹲った。破れた制服から血が滴り落ちる。

ああ、部屋の床に血が付いてしまった。汚い。

口から血を流しながら、私を見上げる夕美。震える声で、懇願してくる。

「もう、もうやめてよう……痛いよう……お姉ちゃん、夕美が悪いことしたなら謝るから……だから、だからもうやめ、て……お願いだから……お姉ちゃー」

「煩いっ！ お姉ちゃんって呼ぶなっ！」

破れた制服から覗いていた、夕美の白いお腹にナイフを突き刺した。じゅぶり、という生々しい音がして、白い肌がナイフを飲み込んでいく。途端に制服が赤く染まり、詰まった蛇口から水が溢れ出すような音を立てて、夕美の口から大量の真っ赤な血が溢れ出す。

「ごふっ、あ、ふ……お、お姉ちゃ……ん……う、あ……っ」

血塗れの汚い顔で。恐怖に占められた瞳で。ボロボロの身体で。

両手でお腹の傷を押さえているけれど、指の間から血が流れ出す。そのじわじわした染み出し方がとても愉快で、私はつい笑ってしまう。

夕美は鮮血を吐きながら、

「痛いよお姉ちゃんお姉ちゃん痛いよお姉ちゃんお姉ちゃんお姉ちゃん痛いお姉ちゃんお姉ちゃんお姉ちゃんお姉ちゃん痛い痛い痛いお姉ちゃんお姉ちゃんお姉ちゃんお姉ちゃんお姉ちゃん……」

呪詛のように紡いでいる。

私はお前のお姉ちゃんじゃない！

私に妹なんていないんだ！！

消えろ消えろ消えろ！ 忌々しい忌々しい！！

「黙れ黙れ！ お前なんか、どうせ殺しても生き返るんでしょう！？」

「厭だよ……死にたく、ない……よう……お、姉ちゃ、ん……」

どさりと鈍い音とともに夕美の身体が床にくずおれる。

壊れたスピーカーみたいな口調は次第に小さくなり、言葉も支離滅裂になり、やがて静かになった。

静寂の訪れた部屋には、肩で息をしている私と、床に転がった夕美の屍骸。

制服はズタズタに破れていて、殆どが真っ赤に染め上がっている。虚ろな眼は虚空を見つめている。妹が死んだ。私が殺した。

日々の鬱憤が晴れていたことに、私は驚いた。人を殺したのに。否、こいつは人間なんかじゃない。得体の知れない不気味な化け物。

それでも、化け物の血は、人間と同じ赤だった。

夕美を殺したことで両親の洗脳も解けたようで、私と夕美の騒ぎはなかったことにされているみたいだった。あれだけ大きな声を出したのだから聞こえない筈はないのだけれど、それでも何も言ってこないのだから、きっと夕美の死と共に記憶も元に戻ったのだ。夕美のいない、本当の世界へと。

ご飯を胃に詰め込んでいると、今日、学校で行うことを考えてしまう。夕美を殺して軽くなった気持ちが、再び重くなった。

妹（４）

授業にまったく身が入らず、放課後は押し寄せる波のように、じわじわと然し確実にやってくる。

西日射す階段の踊り場。計画を実行するにはこしかないと思った。

私たちの学年は帰りにこの階段を通る。下駄箱に近いからだ。きっと光もここを通る。廊下では教師に見つかるかも知れないので、階段に決めていた。職員室へ向かうにはこの階段を通ると遠回りになるからだ。

光が階段を上がってくる。如何して下から来るのか解らなかった。教室から帰るのなら上から階段を下りてくる筈だ。それに、なんだか制服が濡れているようにも見えた。混乱する頭。状況に追いつけない。

「隣のクラスの上城光さん。なんか陰気で、見てるこっちが厭になっちゃうよ」

光が私たちの視界に入ったところで、遙が声を上げる。

始まった。

光に聞こえないような音量では意味がないので、その声は階段中に響く。

「あの子、殆ど話さないし、たとえ話してもあの転校生の子だけなんだよね」

「なんかあの二人似てるよね。顔も性格も」

「うわあ、キモいキモい」

他の女子連中もここぞとばかりに口々に言う。

光を貶せば貶すほど、高得点が貰えるかのように。

悪口を競う試合のように。

光がこちらを見つめてくる。

言わなきゃ。光の身体が如何して濡れているのか、如何して教室から出てこなかったのかなど疑問は残るけれど、でも、やらなきゃいけない。

本番はここからなのだ。

「あの子さ、私と同じ小学校なんだよね」

踊り場に音が響く。

光の鼓膜も揺らす。

さあ、言わなくては。言わなくては私が、やられるのだから。

さあ。

「だから同じクラスの時は仲良くしてあげていたの。でも、本当は厭だったんだあ。内気であまり話さないし、一緒にいてもつまらないんだよね」

本当はそんなことない。思ってもいない言葉が口から飛び出す。

ふと、顔を上げて光を見る。

私と目が合う。綺麗な瞳だった。でも、何処か違和感がある。

それはきっと光が夕美に似ているからだ。私は夕美だけでなく、光まで傷つけようとしている。

精一杯醜悪な声で言う。

「なんだ、いたの、光」

泣きそうになるのを堪えなくてはならなかった。上手く笑えていない。

涙を流す部分がまだ私の心に残っていたことに、少しだけ救われた。

「うそ……………」

光はやっとのことで言葉を発した。

それはまだどこかで私のことを信じたい、と思う言葉に聞こえた。

「嘘じゃないわよ。あんたを友達だと思ったことなんて一度もない。一緒に帰る時とか、私、精一杯堪えていたの」呼吸が荒くなる。

目の前がぐらつく。

ごめんね。

「同じクラスで小学校も同じだったから、仕方なくだったの……あんたの前で、私はうまく笑えていたかしら？」
私は泣きそうになった。
視界が滲み、歪む。
「あははははははっ！ 泣くの？ あんたは昔からすぐ泣くよね……私、あんたのそういうところがすごく嫌いだった。見てるとムカつくんだよねえ。泣いたら先生が助けて呉れるとでも思ってたの？」
周りの子たちも一斉に笑い出す。
「朝美、それ言い過ぎー」
耳に障る。
「あはは、でも仕方ないよねー」
ふざけるな。
私はにやりとした笑顔を光に向けると踵を返し、
「行こう」
と言って遥とその取り巻きの子たちと共に去ろうとした。心を抑えるのも、限界に近い。
後ろで、階段を駆け上がる音がした。きっと光は泣いてしまうだろう。私は友達にとってもひどいことをした。
でも、これでみんなに、遥に認められる。
そう思うと、自然と強張っていた表情が緩んだ。
遥に、これで良いのでしょうか、という思いで笑顔を向けた。
すると、彼女は、
「ごめん、朝美。流石にさっきのは言いすぎだと思うよ……私、ちょっと軽蔑しちゃうな」
そう呟いた。下等な生き物を見る目で見つめてくる。
周りの連中も、置いていかれまいと、必死になって言う。
「そ、そうだよ、朝美」
「上城さん、泣いてたよ。ひどいよ」
「ちょ、ちょっと待ってよ、みんな！ みんなだって――」
私の言葉を遮るように、遥がずずいと近寄ってきて、
「みんなだって、何？ 私の友達の悪口を言ったら許さないから」
きっぱりと宣言された。
そして、取り巻きを連れて階段を下っていく。
階段を降り切る直前に、振り向いて告げた。
「じゃあね、成本さん。もう話しかけないで」
世界が歪んでいる。そう思った。

その時、携帯電話が震えた。厭な予感がする。厭だ。出たくない。夕美は死んだ。生き返っていない。死んだんだ。
恐る恐る携帯電話のディスプレイを見る。知らない電話番号だ。
震える手で通話ボタンを押す。
耳に響いてきたのは、聴き慣れた声。
「バイバイ、最低最悪くそつたれのお姉ちゃん」
光が屋上から飛び降りたのを知ったのは、それからすぐのことだ。

彼女たちに『妹』了

嫉妬（１）

『嫉妬』

昔からそうだった。

自分のものよりも他人のものばかりが気になってしまう。

例えば、人が横で食べているケーキ。

例えば、人が持っている可愛い手鏡。

例えば、人が暮らしている綺麗な家。

例えば、人が大切にしている、友達。

全て気になってしまっって落ち着かない。

あの人は持っているのに、自分にはない。

如何して？

如何して？

私も欲しい。羨ましい。

悪いのはそうとしか思えない私。それは解るのだけれど……。

私の家はあまり裕福な家庭ではなかった。その為、欲しいものを買って貰うことなんて、そんなに多くはなくて。

ついつい他人のものが羨ましく思えた。

流行に乗り遅れる、とか周囲に置いていかれる、とか、そういう下らない不安感ではない。

それはただの嫉妬。

私は嫉妬でできている。

「おはよう、成本さん」

成本朝美と初めて出逢ったのは、中学校の入学式の日だった。

自分の下駄箱が判らずにうろたえていたら、声をかけられたのだ。私が自分のクラスを告げると彼女は、

「あ、なら私と一緒に。ついてきて」

そう言っって私の手をとった。きゅっと握られた柔らかい手。そこから伝わる温かさが、彼女を表しているように思えた。

成本さんは長い黒髪を頭の後ろでひとつに纏めている。綺麗なその髪がひどく羨ましかった。まるで刀の鞘みたい

にずっと伸びたポニーテール。歩くたびに揺れる様子は、催眠術に使う振り子のように、私を魅了する。

くせっ毛の私の髪では、あんな風にはなれないのだろうけれど。肩口でくると外向きに撥ねている私の髪の毛。ち

っとも可愛くない。

私も伸ばしてみようかな、なんて思ってしまった。

その出逢いから一週間で過ぎていた。

「あ、おはよう」

少しどもりながらも、成本さんはきちんと挨拶を返してくれる。

そんな律儀な性格も羨ましい。

人の少ない朝の教室。

六年間通った小学校の教室とは、似ているけれどやはり違う。私はもう中学生になったのだ。少し、大人な気分だ。前の黒板の横には担任の村中先生が模造紙で作ったカラフルな日課表が貼られている。今日は音楽と家庭科の授業があるから、楽な一日だ。

私の席は窓際だ。朝も早いのでまだ日差しはないけれど、お昼を過ぎるとカーテンを閉めないと直射日光にやられてしまうのが厭だった。

成本さんの前を通り過ぎようとする

「あ、あの……」

今度はあっちから声をかけてきた。ただの挨拶で終わると思ったのに、なんだろうか。

「朝美で良いよ、呼び方。苗字だとよそよそしいじゃない？」

はにかんだ笑顔が眩しかった。

朝日に美しく笑う彼女は、なるほど綺麗だった。

あんな風に私も笑ってみたいな。

きっと成本さんは、心の中ではとても怯えている。中学校という新しい生活に。周りを取り囲む知らない人たちに。だからきっと、誰かの手を取りたかったのだろう。

慣れないことをしているからだろう、彼女の丸いおでこには汗が滲んでいる。

私も、こんなふうになれば良いのに。

成本さんと一緒にいれば、少しは近づけるだろうか。

「解った。それじゃあ、その……これから一年間よろしくね、朝美」

朝美という呼び方が、まだ少し恥ずかしい。

私の発した言葉に、笑顔のまま朝美は言う。

「こちらこそよろしくね、岡崎……じゃなくて、遥」

お互いに名前呼び合って、それがなんだか可笑しくて、二人して笑った。

朝の涼しい風が、白いカーテンを揺らした。

四月も半ばまで進むと、クラスの顔もだいたい覚えてきて、朝美以外にも何人かの友達ができる。

クラスには仲の良い者同士の集まるグループが少なからず生じるものだけれど、私のいるグループはクラス内でもかなり高い地位にあった。

影響力というのだろうか。そういった力が強いのだった。

私は満ち足りていた筈だった。全てを手に入れたような気さえした。

でも、いつも頭の中では朝美のことばかりを考えてしまう。ついつい彼女の一挙手一投足が気になってしまう。

彼女と話している人を見ると、私がその人と代われたら、なんてことを思いもした。

朝美も私と同じグループだったけれど、それでも他の誰かと仲良く喋っているのを見るとひどく羨ましかった。

朝美は誰のものでもない。でも、もし誰かのものになるのだとすれば、私のものになって欲しい。

恋愛感情なんて高尚なものではなくて、それはただの独占欲。

誰かが朝美と楽しそうに話すのが羨ましかっただけだ。

朝美は同じクラスの上城光という少女と小学校からの友達らしかった。

その子は、肩まで黒い髪を伸ばした小柄な少女だ。瞳が驚く程に黒い色をしていて、見ていると吸い込まれそうになる。

上城光に対する悪い噂は入学してから今までで、たくさん聞いてきた。

どれも根も葉もない噂だったけれど、周りを敵に回したくはないから相槌を打つのに必死だった。

そんな子と何故、朝美はいつも一緒にいるのだろう。何故いつも一緒に帰るのだろう。登校の時も一緒にいる姿を見たことがある。

上城光がひどく羨ましい。

如何して朝美の隣にいるのがあの子なのだろう。

そんなことをいつも考えていた。

如何して私じゃないの。

如何して……。

ねえ教えてよ、朝美……如何して私じゃ駄目なの？

嫉妬（2）

夏休みを目前とした七月の初め、朝美の異変に気がついた。妙にそわそわしていて、顔色も悪い。ぼーっとしていて授業中に先生に当てられても、上手く答えられないでいた。

何かあったのだろうか。

もしかして、上城光絡みだろうか。

それとも、まったく関係のないことなのか。

はたまた、ただ調子が悪そうに見えるだけなのか。

考えても考えても、私にはさっぱり解らなかった。声をかけても、上の空だったから、なんだか虚しくなってしまった。

昨日の夜にメールを送ってみたけれど、返事がくることはなかった。さりげなくそのことを伝えたと、ごめん、と言だけ返されてしまった。

その「ごめん」にどれ程の想いが込められていたのかは解らない。でも、もうそれ以上問いただす気にもなれず、私はすごすごと引き下がった。

給食が終わって、昼休み。

朝美は上城光の手伝いで図書室に行ってしまうていて、この場にはいない。

私のクラスでは、給食は仲の良い者同士が集まって食べる。他のクラスは決まった班ごとに食べるらしく、羨ましがられた。なんだか人から羨ましく思われるのはとても嬉しく、くすぐったかった。

「この頃、朝美ちゃん、なんだか元気がないねえ」

白鳥慧子が眠そうな声で呟いた。背中まで垂らした髪の毛がさらさらと揺れるのを、私は目で追う。

給食当番を終えてきた長谷川琴理も自分の席に着くなり、うんうんと頷いた。

「悩み事かしらね……心配だわ」

頬を上品に右手で押さえて、万乗千百合が琴理の頷きにそう返す。

「ちーちゃんが心配するだなんて珍しいねえ」

慧子がころころと笑いながら、千百合にちょっかいを出す。

「あらあら、そんなことないわ。わたくしはこう見えて心配性ですもの」

千百合の腰迄伸びた黒い髪が言葉に合わせて揺れる。それを目で追いながら、慧子がにやにやして言う。

「お嬢様も大変だねえ」

そんな二人の会話を遮って、木下茜が声を上げた。

「私もさ、さっき話しかけてみたんだけど……」

「けど？」

「なんだかぼーっとしてて、駄目だった」

「お昼も、食欲なさそうだったし」

眉をひそめる琴理に、慧子が、

「さてはことりん、朝美ちゃんの残したアセロラゼリーが狙いだなっ」

「ち、違うってば！」

甘いものの好きの琴理のことだから、あながち間違ってもいなさそうだけれど、ここは黙っておこう。朝美の食欲がないのには、私も気がついていて。

「だったらさ、直接聞いてみれば良いんじゃないかな？」

茜がぴよこぴよここと小さい身体で主張する。私よりも頭一個分小さいから、見た目は殆ど小学生だ。

「話したくないことだったら、無理に話してもらわなくても良いしね」

私は彼女の意見にちゃんと返事をしてあげた。彼女は小柄で、声も大きい方じゃないから会話に入ろうとしても気づかれないことがよくある。

誰かが気づいてやらないと、会話に加われずに一人で落ち込んでしまうのだった。

「亜月は如何思う？」

私が尋ねると、戸塚亜月はもうすでに昼食を食べ終わっていて、机に頬杖をついてファッション雑誌を捲っていた。ふわふわとウェーブのかかった髪をくるくると指に絡めながら、
「うーん、確かに元気がなかったのは見ていて私も思ったけど……原因が判らない以上、対処のしようがないというか……」

雑誌から目を離さずにそう言った。

「あ、このバッグ可愛い！ 欲しいなー！」

ふいに、雑誌を横から覗いていた北条桜が叫んだ。

「もうっ！ みんな真面目に考えよーよ！」

いまいち纏まらない私たちの会話に、怒った慧子が大きな声で喚く。

それはとても珍しい光景だった。何かに真剣に取り組む慧子は、初めて見たかも知れない。

「あらあら、珍しいのは白鳥さんの方じゃない。急に何をやる気出しているのかしら？」

千百合のよく通る声を聞いた途端に、うっ、と言葉につまった慧子は机に勢いよく突っ伏してしまう。机の上に彼女の髪の毛が舞う。

「うあー、やっぱりやる気でないー」

白鳥慧子は怠け者で有名だった。

授業中の居眠りは勿論、ホームルームの話し合いにも消極的だし、掃除をサボるなんて日常茶飯事。

さっきまでのやる気は本当に幻みたいだった。

「まあ、暫くは様子見で。何かあってからじゃ遅いけど、まだ何も起きていないんだから如何にもできないわよ」

そっけなく言う亜月に、

「亜月の意見に一票」

琴理が手をびしっと挙げて宣言した。続いて茜と桜も手を挙げる。

みんなから賛同された亜月は、たいしたことは言っていないけどね、と返した。

「なににせよ、直接訊いてみないと解らないものね」

千百合がにこやかに笑って、賛成と言った。

なんだかんだ言って、みんなきちんと考えているんだなあ。

これが私のいるグループのみんな。ここに朝美が加わって八人となる。

白鳥慧子はいつも飄々とした態度をしているが、何故か男女共に人気があった。

長谷川琴理は内気だけれど、仲良くなった相手とはよく話すので特に女子に人気が高い。

万乗千百合はとある資産家の令嬢で、容姿も完璧、生徒からは一目置かれる存在だった。

木下茜は小柄な体格に愛くるしい顔をしていて、みんなからはクラスのマスコットのように扱われていた。

戸塚亜月は気取った態度をしているが、内面は優しいということを誰もが知っているので、何かと良い噂を聞く。

北条桜は友達がとても多く、廊下を歩けば殆どの生徒と挨拶や軽い冗談を交わす毎日を送っている。

みんな、羨ましいものを持っている。

私には彼女たちのように魅力的なものを持っていない。

このグループに如何して私がいられるのかも解らない。

でも、彼女たちが友達になってくれて本当に嬉しかった。

これだけは他人に誇れるものだ。

結局あのあとも朝美に話しかけることはできずに放課後になった。直接聞いてみる、という結論に至ったものの、聞いてみても教えてくれないかも、という意見も出た。メールを送ってみたけど返ってこなかった、と私が告げると、その懸念はよりいっそうのものとなった。

帰り支度をしていると上城光が私のところにやって来た。

「この頃ね、なんだか朝美の元気がないの」

彼女はぼそぼそ呟くようにそう言った。俯いて話すから、ひどく言葉が聞き取りづらい。前髪が目元を隠し、懺悔でもしているかのようだ。

朝美の不調を、彼女も気づいていたのだ。

なんだか悔しい。

周りを見渡すと、朝美はもう帰ってしまったようだ。

幾らなんでも早過ぎると思ったけれど、それも朝美の悩みに起因しているのかも知れない。

クラスメイトたちの視線を感じる。私が上城光と話しているからだろう。馬鹿らしい。今は朝美の悩みのほうが重要なのだ。

「朝美から、何か聞いた？」

「……ううん、特には」

「そっか」

まだこの子にも打ち明けていないのか。よっぽど重いことで悩んでいるのかな。

「そう言えば、この前……」

突然、上城光が顔を上げて呟いた。

「何かあったの？」

「えと、その……たいしたことじゃ、ないんだけど……」

朝美は上城光に何か言ったのだ。打ち明けたのだ。

私ではなく、目の前のこの少女に。

私には言ってくれないんだね、朝美。

「言って」

「でも、えっと……」

「言って！」

「ひう……っ」

つい声を荒げてしまう。肩を縮める上城光。おどおどした彼女の態度が気に食わない。こうしている間にも朝美の身に何かが起こっていないとも限らないのだ。

喉の奥から、搾り出すように、

「人が生き返ると思うか、って……訊かれ……ました」

最後は尻すぼみになってよく聞こえなかったけれど。

人が生き返る？

如何いうことだろう。

冗談ではなさそうだ。上城光の表情は真面目なものだった。

朝美の身に一体何が起きているのだろうか。

まったく関係のない質問であれば良い。というよりも、人が生き返るか如何かが彼女の悩みだとしたら、私に何ができる？

彼女は誰かを蘇らせたいのだろうか。

今の話だけでは解らないことだらけで、頭がくらくらする。

目の前でびくびくした視線で見上げてくる上城光が気に食わない。

そしてそれ以上に、如何して朝美はこの子に自分の悩みを話したのか、ということが気に食わない。

羨ましい。

私だって、こんなに朝美を心配しているのに。

よりもよって、みんなから疎まれてる上城光に話すだなんて。

上城光がひどく妬ましい。ひどく、羨ましい。

朝美の一番近くで悩めるということが、ひどく妬ましい。

それはもう、殺してやりたいくらいに。

翌朝、駐輪場で上城光と一緒にいる朝美を見つけた。

グループの子たちと一緒にだった。多分、みんなは上城光のことをよく思っていない。

そんな上城光と朝美と一緒にいるのはあまり好ましい状況ではない。

「朝美！」

私は叫んだ。彼女を上城光から引き離すべく。

びくっと肩を震わせて、朝美は私たちに振り向く。

おどおどとした表情。なんだろう、何かに怯えているような。

「は、遙……え、と、おはよう」

今日も彼女の顔色は良くない。

寧ろ悪化しているみたいだった。

朝美の横では上城光が自転車の鍵を鞆にしまいこんでいた。ピンクの可愛らしいポーチに丁寧にしまいこむ。

呑気なその動作が、今はひどく苛立たしかった。

結局、朝美からは何も聞きだせなかった。

彼女は、大丈夫だから、の一言でこの一件を終わらせた。

それでも、彼女の顔色は常に悪いままで。私たちは二年生になった。

クラス変えが行われたけれど、朝美とは同じクラスになれた。琴理と慧子も一緒だ。

慧子は相変わらずのぐうたらっぷりだ。

「はるかー」

朝、教室に入ってくるなり私のことを呼ぶ慧子。宿題見せて、といつもみたいに言われるかの思ったけれど違った。

「昨日のホラー特集見た？ ボルターガイスト！」

「あー、見た見た。あれでしょ、食器棚の中身が勝手に飛び出すぞ、ってやつ」

「そうそう。すごいよねーっ」

「あんなの、どうせ嘘っぱちよ。私、ああいうの信じてないし」

「ちえ、冷めた反応だなー」

「あんたには言われたくないわよ」

慧子はこういったオカルトじみたことには少し熱心だ。何事にも無関心、無気力な慧子には珍しい。

冷めた反応だということは、自分でも承知している。

でも、ねえ。ボルターガイストだかウォータークローゼットだか知らないけれど、私はそういった霊的なものを信じてはいない。だって、この身体で体感していないから。幽霊が見えたり、超能力が使えるといった人たちが世の中にいるらしいけれど、如何してか羨ましいとは思えない。きっと、それは私が信じていないからなのだ。

「ボルターガイスト現象はね、思春期の子どもに起こりやすいんだってー。私にもできるのかなあ」

「そんなわけないでしょ」

私は慧子との会話にうんざりしてきた。なにがボルターガイスト。なにが超常現象。そんなふざけたこと、あるわけがない。

ちょうど朝美が登校してきたので、おはようと声をかける。

「おはよう、遙」

一見、元気そうに見える。でも、違う。私には解る。0°と360°がまったく同じに見えるように。然し、まったく違うものであるように。心のメーターが振り切ってしまったみたいだ。

朝美はきっと壊れてしまった。パンクしたタイヤのまま、自転車を漕ぎ続けると車輪自体がおかしくなってしまう。朝美はまさにそれと同じ。パンクした心のまま走り続けている。もしかすると、パンクしたことにも気がついていないのかも知れない。

「朝美は昨日のホラー特集、見た？」

慧子がのんびりした声で言う。間延びした音が眠気を誘う。

朝美は無言で首を振った。それどころじゃない、とでも言いたそうに。

如何して慧子は、わざわざ朝美を苦しめるようなことを言うのだろうか。そっとしておいてあげて欲しいのに。

もし、本当にボルターガイストなんてものが存在するのなら。

もし、本当に思春期の子どもたちの周りで起こるというのなら。

超常現象でもなんでも良い。この腐った現実を捻じ曲げて、朝美を苦しみの渦から救って欲しい。

引きつった朝美の表情を見て、そんなことを思った。

上城光のクラスには転校生がきたらしい。

名前は神代闇。女の子だ。名字の読み方が一緒なのが、少し気になった。

何度か廊下ですれ違ったことがあるけれど、肩口で切り揃えた黒髪と、揺れる水面のような瞳は、何処か上城光を髣髴とさせた。

あんなのが二人もいるだなんて、厭だなと思った。

聞くところによると、あの二人はいつも行動を共にしているらしい。どちらが依存しているのかは知らないけれど、いつも一緒にいる、ということを意識すると脳の奥がチカチカしてくる。

羨ましい。

そうだ、私はきっと彼女たちが羨ましいのだ。

去年の仲良しグループを思い出しても、周りの子にはそれぞれ仲の良い人の存在があった。白鳥慧子と万乗千百合。木下茜と北条桜。長谷川琴理と戸塚亜月。

その関係性が羨ましくて、私は朝美のことを求めているのだろうか。

上城光が朝美とうまくやっていたのが目障りだったのではない。ただ、そういった関係に、私は嫉妬してしまっていたのだろうか。

今となってはもう何も解らない。私は朝美といたい。それだけなのだ。

でも。

でも、放課後に上城光が転校生と歩いているところを見ると、つい羨望の目で見ってしまう。

そこに朝美はいないのに。

厭だ。厭だ。

私は、朝美が良い。そうに違いない。

放課後、教室に残って慧子とおしゃべりをしていたら、私の携帯電話が震えた。お母さんからのメールで、夕食に使うものが書かれている。帰る途中で買って来い、ということらしかった。財布を見ると、千円札が一枚と、小銭が数枚入っている。少し買い物をするのには十分な額だ。

「誰からー？」

慧子が脇から画面を覗き込んでくる。きゅっと右腕にしがみつかれ、彼女の黒髪が揺れて、ふわっとシャンプーの良い匂いがした。背中にかかるくらいに伸ばした、まっすぐな髪の毛。羨ましい。

「お母さん。買い物頼まれちゃった」

「お、じゃあ一緒に帰ろうかー」

「商店街寄ってくから、校門までだけだね」

ぼんぼんと頭を叩くと、

「おーけー、おーけー」

そう言って笑って、自分の席まで戻る慧子。

手早く帰り支度を始める彼女を横目に、私は朝美のことばかりを考える。今こうして隣にいるのが朝美だったらどんなに良いか、と。そんなことばかりを考えてしまう。

「準備できたよー。帰らないの？」

教室のドアに凭れて慧子が言う。はっと我に返って、私は鞆を掴んだ。

「ごめん、今行くよ」

橙色に染まる空を、名前の知らない鳥の群れが飛んでいる。

校門で慧子と別れた私は、一人で商店街を歩いていた。買い物は一通り終えたので、あとは家に帰るだけだ。自転車のカゴに入れた買い物袋がごとごと揺れる。

学校から家までは自転車で三十分くらい。でも、今日は商店街に寄り道をしたからもう少しかかる。商店街から家までは途中で小さな公園の中を通るのが最短だ。普段から誰もいないし、夕暮れの薄明かりしかないので怖いけれど、遠回りする気にもなれない。

だけど、今日ばかりは遠回りしておけば良かったのかも知れない。

公園のベンチに上城光と転校生の神代闇が座っていた。ただ座っているだけなら良かったのだ。そのまま気づかないふりをして、横を通り過ぎれば良かったのだから。

でも。

それは非現実的で、私にはまだ遠い世界の出来事だと思っていた。

でも、それが、現実として目の前で行われている。

上城光と転校生がキスをしていた。女の子同士だなんて、と思ったのは一瞬だった。私は無意識の内にブレーキをかけていた。二人に気づかれないように、暗がりから彼女たちを眺めた。

夜の暗さに溶け込みそうな二人。私たちの制服は黒を基調としているから余計にそう見える。本当にこのまま彼女たちが闇の中へと消えていってしまうような気さえた。

上城光の白い指が、転校生の頭を撫でた。二人とも、折れそうなほど強く相手を抱きしめる。

ドクン、と鼓動が跳ねた。

まただ。

また私は。

羨ましいと、思ってしまった。

上城光と転校生が羨ましい。羨ましい。

私だって、と気がつけば自分の唇を触っていた。私だって、朝美と……。

自転車のハンドルを強く握りすぎた所為で、手が痛かった。ぎりぎりと万力を絞るように、私はこの痛みに耐えた。

ことが済むと、公園の前で二人は別れた。咄嗟に、私は転校生を追いかけていた。知りたい。如何して、上城光なのだろう。それが知りたい。名字が同じだから？ 席が近いから？

太陽がもうすぐ顔を隠す。街頭の薄明かりが転校生の後ろ姿だけは照らしていた。

「ちょっと、待って」

声をかけると、驚いて彼女は振り返った。肩までの黒髪。上城光と似ている。

転校生は私の服装から泉ヶ丘の生徒だと判断したのだろう。首を傾げながら、

「何か用ですか？」

「さっき、公園で貴女たちを見たわ」

単刀直入にそう言った。

“貴女たち”という言い回しに気づいたのか、転校生は大きく目を見開いた。薄い唇を閉じたり開いたりしながら、言葉を搜している。

「だからどうってことじゃないの。ただ、ひとつ訊きたいのよ」

そうだ。私の目的は彼女の行いを非難することではない。

「ね、如何して上城光なの」

「……え」

彼女は質問の意味が解らないのか、ぼかんとしてしまった。

「如何して、あんなのが良いの」

私には解らない。

そして、転校生は一言。

「解りません」

太陽が完全に沈んだ。夜を告げる強い風が吹いた。

「解らない、って。だって、自分のことでしょう」

「そうです。そうなんです……けど、解らないんです」

解らない、と彼女は何度も繰り返した。

ふと、私は自分に問いかけた。

私は如何して朝美が良いのだろうか。

解らない。なんとなく、朝美が良い、というただそれだけなのだ。

転校生も同じ気持ちなのだろうか。

「あの、私はこれで！」

殆ど悲鳴のように叫んで、彼女は走り去って行った。

黒い背中はずぐに、夜の闇に紛れて見えなくなった。

嫉妬（４）

ある日、帰り道に朝美を見つけた。驚いたのは話している相手があの転校生だった。如何して朝美と話しているの？ 目には見えない霞のような嫉妬が身体中から溢れ出して来た。

話し終わると、転校生は歩き去った。きっと私の存在には気がついていない。それは朝美も同じだ。

「随分と転校生と仲良さそうね、朝美？」

後ろから声をかけると、案の定、私がいるのに今気がついたようだ。吃驚させてしまったかも。

「あの転校生、いつも上城光というそうじゃない。全くどうかしてる」

あれではまるで、一年前の朝美だ。いつもいつも上城光に纏わりつかれて。可哀想な朝美。大丈夫、これからは私がいるから。

「そ、そうだよ！ 本当訳解んないよねえ！」

朝美が私に賛同してくれる。それだけなのに、なんでこんなにも心が軽くなるのだろう。ふと気になったので、訊いてみる。

「で、何を話していたの？」

「え、えっとあの子に道を訊かれたのよ。転校したてで地理が解らないらしくって」

「へえ……そうなの」

朝美の慌てぶりが気になった。もしかして……。

不安に駆られたから、思い切って訊いてみることにした。

「私はてっきり、上城光の話でもしているのかと思った」

「そ、そんな訳ないじゃないの！ なんで私があんな奴の話を……」

朝美の態度が何処かよそよそしい。やはり、何か違和感がある。

その時、朝美の持っていた携帯電話が震えた。

彼女は気だるげな目で携帯電話の通話ボタンを押した。短い会話のあと、彼女は電話をしまった。

「誰からだったの？」

「お母さんだよ……妹が死んだんだってさ」

妹が死んだ？

話からすれば朝美の妹ということだろう。

でも……。

「朝美に妹っていたの？ 初耳なんだけど」

「あれ、言わなかったっけ？」

「言っていないよ。それに、遊びに行ってもいつも妹さんいなくない？ 会ったことないよ」

まさか、朝美は嘘をついているのかも知れない。

さっきの電話ももしかしたら上城光からの電話だったんじゃないか……。

それを朝美は隠そうとして……。

「ねえ、今の電話、本当にお母さんからなの？」

「え、それって如何いう……」

「上城さんからの電話だったんじゃないの、って意味よ」

その言葉に朝美はひどく取り乱した。

「なんで今、あの子の名前が出てくるのよ！ 光と夕美は関係ないんだから！」

その否定の激しさが、電話の相手が上城光だったということを隠すようにしか聞こえない。

このままではまずい。朝美が本当に上城光と一緒にいたいと思うのは、学校全体を敵に回すようなものだ。朝美をそんな目に遭わせるわけにはいかない。

「もう良いよ、朝美」

息が荒く、何も言えないでいる朝美に、私は顔を近づけ優しく言った。

「上城光と私、貴女はどちらを選ぶの？」

「遙、信じてよ！ さっきの電話は本当に……！」

「ねえ、朝美。解ってるよね？」

言外に上城光と決別するように告げる。

これは全て朝美の為なんだ。

朝美は泣きそうな顔で、渋々頷いた。

これで私は朝美と一緒に並ぶことができる。

そして、朝美は幸せな学校生活を送ることができる。

嬉しくて、涙が出そうになった。

あの日、朝美ととある計画を立てた。

それは上城光と朝美を決別させる、絶好の計画。

そして今日の放課後、階段の踊り場。計画を実行するにはここしかないと思った。

私たちの学年は帰りにこの階段を通る。それは下駄箱に近いルートだからだ。きっと光もここを通る、と朝美は言った。

上城光が歩いてくるのを確認して、計画が開始される。朝美は泣きそうな顔をしていた。

「朝美のクラスの上城光さん。なんか陰気で、見てるこっちが厭になっちゃうよ」

上城光が私たちの視界に入ったところで、私が大声でそう言って開始の合図をした。

当然、彼女に聞こえないような音量では意味がないので、その声は階段中に響いた。

「あの子、殆ど話さないし、たとえ話してもあの転校生の子だけなんだよね」

「なんかあの二人似てるよね。顔も性格も」

「うわぁ、キモいキモい」

他の女子連中もここぞとばかりに口々に言う。自然とあの転校生の陰口も混ざる。

もう私の出番はない。あとは朝美が上手くやる筈だ。

それまで黙って話を聞いていた彼女が口を開く。

本番はここからなんだ。

「あの子さ、私と同じ小学校なんだよね」

踊り場に朝美の綺麗な音が響く。

私たちと上城光の鼓膜を揺らす。

「だから同じクラスの時は仲良くしてあげていたの。でも、本当は厭だったんだあ。内気であまり話さないし、一緒にいてもつまらないんだよね」

本当はそんなことない。きっと朝美はそう思っている。

ふと、顔を上げて上城光を見ると、両目に涙を一杯に溜めていた。

私と目が合う。

澄んだ鏡のような黒い瞳。夜という言葉をも溶かしたら、きっとあんな黒さになる。

「なんだ、いたの、光」

朝美はそれでも言葉を紡ぐのを止めない。

嬉しい。やっぱり、上城光より私を選んでくれたのだ。

「うそ……………」

上城光はやっとのことで言葉を発した。

それはまだ何処かで朝美のことを信じた、と思う言葉に聞こえた。気の所為ではないだろう。

「嘘じゃないわよ。あんたを友達だと思ったことなんて一度もない。一緒に帰る時とか、私、精一杯堪えていたの」

朝美と上城光の呼吸が荒くなる。

ひっそりとした踊り場で、空気が張り詰めていく。

ごめんね、二人とも。

「同じクラスで小学校も同じだったから、仕方なくだったの…………あんたの前で、私はうまく笑えていたかしら？」

朝美はまだ止めない。それだけ鬱憤が溜まっていたのだろう。今まで辛い思いをしてきたのだから、当然だ。

上城光は泣く寸前だ。

「あははははははっ！ 泣くの？ あんたは昔からすぐ泣くよね……私、あんたのそういうところがすごく嫌いだった。見てるとムカつくんだよねえ。泣いたら先生が助けてくれるとでも思ってたの？」

周りの子たちも一斉に笑い出す。

「朝美、それ言い過ぎー」

「あはは、でも仕方ないよねー」

朝美は全てを言い終えると、上城光ににやりとした笑顔を向けると踵を返し、

「行こう」

と言って私とその取り巻きの子たちと共に去ろうとした。

朝美が、これで良いのでしょうか、という引き攣った笑顔を向けてきた。

その時、思ってしまった。

大好きな親友と別れた朝美。

とても辛そうで、失神しそうになるのを懸命に堪えている彼女の顔は……。

それはもう、ひどくひどく羨ましく感じた。

きっと彼女の心の中は真っ黒の悲しみの渦がぐるぐるしているのだろう。そんな暗い感情に私も支配されてみたい。今にも自分の喉もとを掻っ切ってしまいたい衝動に見舞われたい。

結局、私は最後まで嫉妬したままだ。

朝美と上城光の絆に嫉妬してしまったのだ。

だから、私は、

「ごめん、朝美。流石にさっきのは言いすぎだと思うよ……私、ちょっと軽蔑しちゃうな」

そう呟いた。下等な生き物を見る目で見つめる。

周りの連中も、置いていかれまいと、必死になって言う。

「そ、そうだよ、朝美」

「上城さん、泣いてたよ。ひどいよ」

「ちょ、ちょっと待ってよ、みんな！ みんなだって――」

朝美の言葉を遮って、顔を寄せて呟く。

「みんなだって、何？ 私の友達の悪口を言ったら許さないから」

冷たいその言葉は、階段の壁に反射して響き渡った。

そして、取り巻きを連れて歩き去る。

階段を降り切る直前に、振り向いて告げた。

「じゃあね、成本さん。もう話しかけないで」

朝美は呆然とした顔で、私を見つめていたけれど、これが親友を手放す時の痛みなのか、と私は心臓に手を当てて考えた。

気分が悪い。

倒れそうだ。

視線が揺れる。

でもこれで、今の朝美の気持ちに少しは近付くことができたのだろうか。

彼女たちにあって、私にだけないなんて厭だ。

ねえ、解って。

私も貴女たちと同じになりたかったの。

私も欲しかったの。

その傷が。

嫉妬（５）

「ねえ、遥。如何して朝美にあんなこと言ったのよ？」

おずおずと友人が尋ねてくる。

前を歩いていた私が振り返ると、周りの子たちは驚いていた。

それもその筈だろう。

「遥、貴女、なんで泣いてるのよ？」

ぼろぼろと冷たい雫が、両目から零れ落ちていた。

頬を伝わって、床に落ちていく。

如何してだろう。涙が止まらない。

朝美は泣かなかったのに、私は泣いてしまった。

上城光は泣かなかったのに、私は泣いてしまった。

泣かない成木朝美が羨ましい。

泣かない上城光が羨ましい。

私とは違う。

如何して？

如何して？

如何して、こうなっちゃったんだろう？

私は彼女たちみたいには永遠になれないのだろうか。

窓からの風が涙を揺らす。このまま涙を拭い去って、朝美たちと同じように、泣かなかったことにして欲しかった。

夕焼けに染まる窓の外に視線をやった時、一人の生徒が上から降ってきた。

上城光。

それは一枚の絵画のようで。夕焼けに浮かんだ、夜の結晶のようで。

風に靡く彼女の髪。揺れる瞳。涙。

なんだ、あの子も私と同じ。

泣いていたんじゃないか。

涙で滲む私の目と、一瞬、彼女の目があった気がした。

泣き腫らした目と、考えの覚束ない頭を抱えて、私は壁に凭れて蹲った。

何も見たくない。

何も聞きたくない。

もう、何も。

厭だ。厭なのだ。

生徒たちの喧しい悲鳴がそこかしこで起こる。

上城光は死んだのかな。

きっと、死んだのだ。

死ぬ、という行為も、今の私にはひどく羨ましかった。

何もかもが妬ましい。

笑うこと、泣くこと、怒ること。全て、全てが私には妬ましく感じる。

きっと私は私が嫌いなのだ。

私には何もないから。

周りの人が羨ましかっただけだ。

でも、それはきっと私が嫉妬という行為に羨望を感じていたからなのだ。

換言すれば、嫉妬に嫉妬していたのだ。

厭だ。そう思った。

私はそんな私が厭だ。

でも、最後に上城光は泣いていた。私と同じ、涙を流していたんだ。

それを思い出すと、私はひどく安堵する。

やっと、私は同じになれた。

それが嬉しくて、悔しくて、とても悲しくて、辛くて。

だから私は、また泣き始めた。

彼女たちに『嫉妬』　了

怠惰（1）

『怠惰』

天才という存在は実在するのか、と問われれば、私は何も考えずに首を縦に振ることだろう。

それは何故か、と問われれば、私は何も考えずに私が天才だからだと答えることだろう。

如何せん、私は天才だった。

勉強というものが特別好きだった訳ではない。寧ろ、嫌いだったかも知れない。

静かに先生の説明を聴き、チョークのなぞった跡を目で追いながらノートに書き写す。

その行為の何処に楽しみを見出せるのだろうか。せいぜい先生の思い出話を楽しむくらいのものだ。

私はそれでもきちんと先生の話は聴いたし、ノートも綺麗に書いた。ただそれだけしかやっていないのに、テストではいつも満点だった。

如何して百点なんて取れるの？ と友人に訊かれた時、一番に驚いたのは私だった。

だって、授業で習ったじゃない。それが答えだった。授業で教えて貰ったのだから、できない方がおかしい。私はそう思った。

でも、それは間違いだった。

あとで解ったのだけれど、普通は一度聞いたことを一言一句全て憶えていることなんて非常に難しいことらしい。

私にとってはそれがすんなりできてしまった。ただそれだけ。

初めの内は周りからちやほやされた。同級生の子や、先生。お母さんにお父さん。たまに家にやってくる親戚の人たちからも、「えこちゃんはすごいね」という言葉を投げかけられた。

その言葉が嬉しくて。

その言葉が聴きたくて。

私はテストで山のように満点を取った。満点を取るのは造作もないことだったけれど、取れた時はやっぱり嬉しかった。答案用紙の白い空欄が、時間に比例して文字で埋まっていく快感。鉛筆の先が減れば減るほど、私は得意になった。

いつしかテストを受けることを楽しんでいる自分がいた。全ては誰かに褒めてもらう為。

いつからだったのかは憶えていない。

気がついたら周りの視線が、羨望から嫉妬に変わっていた。

小学校の高学年になると完璧に私の存在は浮いていた。

いつもテストで満点、しかも特にこれといった勉強をしている訳でもない。

天才。

ちやほやと持て囃された頃によく投げかけられた言葉だ。天から授けられし才能。この二文字が私にとってはただの荷物でしかなかった。

天才。なんて理不尽な言葉だろう。

私は普通でいたかったのに。

普通に勉強をして、

普通に授業に出席して、

普通に宿題をするのに手こずって、

普通にテストで平均点ギリギリの点数を取り、

普通にみんなと同じ場所に立っていたかった。

みんなと同じ視点でいたかったの。ただそれだけ。

だから私は天才を辞めた。

テストで満点を取れるということは、裏を返せば零点も取れるということだ。

自分の解答が合っていると解るなら、敢えて間違った解答を書くことも可能な訳だ。

その考えに気づいた時から、テストの点数を操作してきた。急に低くなるとばれてしまうかも知れなかったので、ゆっくり下げていくことにした。初めのうちは言い知れぬ罪悪感が渦巻いていたけれど、段々とその作業にもなれていった。

平均点を少し上回る位の点数に落ち着いたのは、中学校に上がる直前だったと思う。

その頃には、周りの視線もだいぶ落ち着いていた。

これは私が辞めた天才の一部分だ。

運動、芸術、はたまた人間関係においても、私は天才を辞めた。

普段からやる気を出さずに、周りの事態にも無関心を貫くことで、私はやっと普通の人間になれた。

だから、天才という存在は実在するのか、と問われれば、私は何も考えずに首を縦に振ることだろう。

だけども言うだろう。

天才という存在は実在したが今はもういないよ、と。

「白鳥さん、起きなさい。授業中ですよ」

深川先生のその言葉に、突っ伏していた顔を上げる。

今は歴史の授業中だ。四時間目ということもあって、周りのみんなはおなかをすかした表情でノートを書いていた。先生から注意を受けた私に向けて、教室のそこかしこからクスクスという笑い声が洩れた。小学校からの友達であるちーちゃんが、溜息をつくのが聞こえた。

別に寝ていた訳ではない。

授業の内容は数日前に教科書を読んで知っていたので、特に聞くこともないな、と思い机に突っ伏して昔のことを思い出していたのだ。

だけど、正直にそんなことを言ってお説教が長引くのは面倒だ。

「すみません」

目を軽く擦りながらそう答えると、これから気をつけなさいね、と言って深川先生は板書を再開した。

もう注意されたくはないので、黒板がチョークの粉に埋め尽くされるのをぼっと眺める。

白いチョークががりがり削れる。

忙しく動く、先生の手。

それを目で追ってみる。漢字の書き順が違う。また間違えている。あ、今度は年号を書き間違えた。

なんで誰も指摘しないのだろう。

教科書を見れば書いてあるのに。黒板に書かれた数字とは全然違うのに。

昔の私なら、ここで勢いよく手を挙げてその間違いを正したことだろう。それはきっと他の生徒の学習にとっても良いことなのでやるべきことではあるのだけれど、どうにも気が進まない。天才を辞めた日から、何にもやる気が起こらなくなってしまった。やる気を起こしてはいけない、と常に思っていたからいつの間にかやる気の出し方を忘れたのだ。蛇が進化の過程で手足を捨てたのと同じように。私は活力というものを捨て去ってしまった。

誰か訂正しないかなあ……。

そんなことを考えていたら、授業終了のチャイムが鳴った。

結局、先生は自分の間違いに気づかずに授業を終わりにしてしまい、教室を出て行った。

みんなの歴史のノートにはきっと、間違った年号が書かれていることだろう。

歴史って何だろうか。ふとそんなことを思う。

1192年が1129年になったからといって、現在を生きる私たちは全く困らない。徳川家康が聖徳太子と握手をしていたとして、別に私たちの生活がどうなる訳でもない。

真実というものは、ふとした書き間違いで塗り替えられてしまう。薄っぺらい紙みたいな真実に、一体どれほどの価値があるのだろう。風が吹いたら表と裏がひっくり返って、最後にはどちらが『表』なのか判らなくなってしまうのかも。

そんな下らないことを真面目に考えている自分が、なんだか可笑しかった。別に笑えはしなかったけれど。

給食係の人が忙しく動き回って、給食の準備をしている。白い給食着は、夏場は暑い。もこもこしていて、見ているだけでもその暑さが伝わってきそうだ。

係ではない私はぼーっと自分の机に座ったまま。

段取りの悪い係の人たちだと、給食の開始が遅れることがある。そういうのを見ると、何やっているんだろうな、と思う。私ならもっと上手くやるのに。

勿論、自分が当番の時でも率先して行うなんてことはしないけれど。

天才を辞めると決めたから。

怠惰に生きると決めたから。

私のクラスでは給食は仲の良い者同士が集まって食べる。仲の良い子たちと食べる給食を、私は密かに楽しみにしていた。

ガタガタと机をくつつけて、みんなで集まって、いただきますの合図でご飯を食べる普通の光景。これが私の求めていたものだったから。だから、すごく幸せ。

でも最近、クラスの雰囲気が悪い。

同じクラスの上城光という女の子が、周りからあまり良く思われていないようだった。

他人がどう思われようが知ったことではない。きっと私がひょいと頑張ってみれば、人間関係の不和なんてすぐに解決する。

でも、しない。

やる気が起きないし、そんなことをして注目されるのも厭だったから。

上城さんには申し訳ないけれど、私はもう無関心に生きると決めたの。

ごめんね、と心の中で彼女に呟いてみた。

きっと伝わらない。

心の中で思ったって、空気を震わすことなんてできやしない。

だから、きっと伝わらない。届かない。

私がまだ天才だったら、伝わったのかな。

そんなことを思った。

怠惰（2）

一日の授業が終わって、放課後。

「あれ、朝美がいない」

遙ちゃんが心配そうな声でそう言った。

最近の朝美ちゃんは何処か元気がない。少しだけ、心配だ。

成本朝美は上城さんと同じ小学校出身で、よく一緒にいるのを見かけた。もしかしたら、上城さんのことで悩んでいるのかも。それで元気がないのかも知れない。

「成本さんなら、さっき帰ったよ」

ことりんの声。ことりん、というのは長谷川琴理のことだ。下の名前から名づけたあだ名である。後ろで二つに結んだ髪をいじりながら、ことりんが言う。

「何か用事だったの？」

「歴史のノート返そうと思ったのに」

手に持ったピンクの可愛いノートをぶらぶらさせてそう言った。表紙には綺麗な字で「歴史」と書かれている。ことりんが小首を傾げて、

「借りてたの？」

「そうそう。私、授業の途中で寝ちゃってから」

なんだ遙ちゃんも寝ていたのか。私だけ怒られるとはなんと不公平な。そう言えば、遙ちゃんは六時間目の国語の授業でいやに熱心にノートを書いているな、と思ったらただの内職だったわけか。

「机の中にでも入れておいたら？」

「……うん。そうね」

腑に落ちない様子で遙ちゃんが朝美ちゃんの机へと向かう。私も帰る支度をしなくちゃ。

「歴史の授業、黒板に書くのが速くて、私、全然おいつかないよ」

ことりんが苦笑して呟く。彼女はノートをきっちりと書く子だから、黒板に書かれた通りに写す。だから余計に時間がかかってしまうのだろう。自分なりに書きやすいように、覚えやすいようにノートを取ると、時間に余裕ができ、先生の話の耳に入れることもできるのだけど。

「琴理、帰るわよ」

戸塚さんが教室の入り口で、ことりんを呼んだ。戸塚亜月。腰まで伸ばしたふわふわの髪の毛と、射抜くように鋭い目が印象的な女の子だ。私が未だに「戸塚さん」と名字で呼んでいるのは、少しだけ怖いからだ。

「あ、うん。待って、亜月ちゃん」

ばたばたと慌しく戸塚さんに駆け寄る。二つに結った黒い髪が揺れる。戸塚さんは、見た目は怖い感じだけど、実は優しいのかも知れない。今だってことりんを急かしてはいるけれど、きちんと待ってあげているのだから。

彼女たちはとても仲が良い。席が隣同士というのもあってか、たいてい一緒にいるのだ。

なんだか羨ましい。昔から、私にはそんなものはなかったから。

天才と呼ばれていた頃は、ちやほやされてはいたけれど、同等の立場としては見られてなかった。一步引いた場所から話しかけられていた気がする。

その天才という言葉が妬みに変わってからは言うまでもない。天才を辞めてからも同様だ。仲の良い友達なんて、私にはいない。休み時間におしゃべりする相手はいるけれど、果たしてそれが友達と呼べるのだろうか。

友達って、何なのかなあ……。

分からないまま机に突っ伏して、目を閉じる。

考えても答えは出ない。私にも解らないがあるのか、と妙に感心してしまった。

給食を食べる時に集まるメンバーのことを思い出す。成本朝美、岡崎遙、長谷川琴理、戸塚亜月、木下茜、北条桜、そして、

「あら、今日はまだ帰っていないのですか」

それは黒き大河。腰の下までずっと落ちるように伸びた黒髪は、さらさらと流れる川にしか見えない。顔を上げると

そこにいたのは、万乗千百合。ちーちゃんだ。

「今帰ろうとしていたよ」

「そう言って、実は寝ていたのではないの」

「む、今もそうだし、歴史の時間もそうだけど、寝てなんかないってば」

「まあ、良いです。それよりも、こんな時間までいるとは珍しいですね」

「んー？ そだっけ」

言われてみればそうかも知れない。窓の外を見ると、もうだいぶ日が沈みかけている。ちーちゃんの髪が朱に染まっていた。いつもは毛先にまで手入れが行き届いている髪に、小さな埃がついているのが見えた。なんだか、彼女がこの時間まで残っている理由が分かった。でも、それを言うのは面倒なので、直接訊いてみる。

「ちーちゃんは如何してこんな時間？」

「委員会です。美化委員会は校内外の清掃を当番制で行っていますので」

「へえ、掃除ってSHRの前にやるのに、放課後にもやるんだ」

広い校舎だから、生徒だけでは掃除の手が届かない場所があるのは分かるけれど、それを委員会活動としてやるとなると、私にはもう想像できない。ちーちゃん、面倒な委員会に入っていたんだね。

「ちーちゃん、面倒な委員会に入っていたんだね」

「思ったことをそのまま言わないで下さる？」

「な、なんで分かったのー！」

「小学校からの付き合いなんだから、それくらい分かりますわ」

てっきり読心術の一種かと思った。長い付き合いだと相手の考えていることが分かるのか。それとも、友達だから？

「そろそろ帰ろうと思うけど、慧子はどうしますの？」

「あ、うん。帰る帰るー」

急いで鞆に荷物をつめて、ちーちゃんのもとへ。彼女の大きな歩幅に後れないように、隣に並んで歩き出す。

廊下にはもう生徒の姿もなく、寒々しい西日が床を照らし出していた。

私とちーちゃんの関係について考えてみる。私たちは確かに小学校の頃から一緒だけれど、それがイコール友達になるのかといたらそうではないのかも知れない。

そもそもどういう関係が友達なのだろうか。私にはそれを確かめる術がない。だから、結局分からないままで。

昇降口を出ると、夕暮れの少し寒い風が吹いていた。校門の外には黒いリムジンが止まっている。ちーちゃんの家的車だ。彼女にはいつも送迎の車が来るのだ。

「ね、ちーちゃん」

ちーちゃんと話す時は、私が見上げる形になる。夕日に照らされた白い横顔。すっと通った鼻梁が大人な感じを出している。

「なんですか？」

歩きながらそう訊き返すちーちゃん。私が立ち止まると、彼女も数歩先で止まった。この距離がなんとももどかしい。

「私たち、友達、かな……」

うまく彼女の顔が見られなかった。見上げる為の首の筋力がなくなってしまったみたい。じっと彼女の靴の先を見続けるしかなかった。一陣の風が吹いた。

ちーちゃんが息を吸う音が聞こえた。

「なにを言っているのですか。早く行きますわよ。もう車が待っているのですから」

そう言って踵を返すちーちゃん。私が顔を上げると背中しか見えなくて。なんだか余計にしょんぼりしてしまって。

目の奥がカッと熱くなって、視界が少しだけ揺れる。

小綺麗なスーツを纏った使用人さんが後ろのドアを開ける。ちーちゃんはすぐには乗り込まずに、

「今日は友達も一緒なの。乗せて行ってあげて」

使用人さんの視線が私に向かう。かしこまりました、と慇懃に言って私に乗車を促した。いまいち状況が飲み込めない私に向かってちーちゃんが一言。

「ほら、ぐずぐずしないでください」

「えっと、友達って……」

「今ここに、貴女以外に誰かいらっしゃる？」

そっぽを向いて言うちーちゃん。

「う……な、なんだか、顔が赤いよー？」

照れ隠しに、にやにやしながらそう言うと、

「ゆ、夕日の所為です。良いから、早く乗ってください」

そう言う彼女がなんだか無性に可愛くて、思わずその身体に抱きついた。細いけれど、しっかりした身体だ。

「な……いきなりなんですか！」

ぐいぐいと私の身体を引き剥がすように力を込めるちーちゃん。長い髪の毛が舞う。彼女の力は全然強くないから、どれだけ押しても私の身体は離れない。昔からそうだった。ちーちゃんは運動があまり得意ではないのだ。

「……ありがとね、ちーちゃん」

抱きついた姿勢のまま、そう告げた。なんだか恥ずかしくて、やっぱり彼女の顔を見ることができない。

私の言葉を聴いた彼女は、引き剥がそうとしていた腕の力を緩めた。地面には夕暮れの長い影が伸びている。

細い指の感触がした。頭を撫でられている。目を瞑ると、ちーちゃんの匂いがした。

「慧子ったら、貴女も顔が真っ赤じゃないですか」

「……うん。そうだね」

「それも、夕日の所為ですか？」

優しい声音が、私の鼓膜を揺する。友達なんだ。私とちーちゃんは。

それはもしかするともっとずっと昔からそうだったのかも知れない。ただ、私が気づいていなかっただけで。そもそも、本当の友達というものは、こうやって友達かどうかを確かめるものでもないのかも知れない。

でも。

それでも。

友達、という二文字が、私の心をそっと撫でたのは確かなのだ。それに至るまでの手段は人それぞれ違うのかも知れない。だったら、私たちはこれで良い。

そんなことを考えながら、私はちょっぴりいじわるに、こう言った。

「ううん、ちーちゃんの所為だよ」

怠惰（3）

一年間はあっという間に過ぎ去って行って、気がつけば私は二年生になっていた。

二年生に上がる時にクラス変えが行われる。

私は一年生の頃の仲良しグループのみんなとは散り散りになってしまった。唯一同じクラスになったのは茜ちゃんと桜ちゃん。この二人はとても仲良しで、同じクラスになれて良かったね、と心の中で祝福した。

ちーちゃんとも離れ離れになってしまった。確か、ことりんと戸塚さんとは一緒だ。

新しいクラスでの自己紹介が終わり、始業式のある体育館へ向かう途中、
「全然知り合いなくて、なんか不安になっちゃうね」

と桜ちゃんが心配そうな顔で呟いた。きっと、それはみんな同じだ。新しい生活は期待以上に不安が大きい。私はいえどもはやそんなことに一喜一憂することすらないので、解らない。でも、普通は心配なものなのだ。

「まあでも、このクラスで卒業までやっていくんだから、仲良くやっていくしかないよねー」

不安を紛らわせようと、そんなことを言ってみる。二年から三年に上がる時はクラス変えがない。受験を控えるからだろうか。それは解らないけれど、あと二年間は同じ顔ぶれでやっていかなくてはならない。

「そ、そうだよねっ。仲良くしなきゃだね」

慌てた感じで茜ちゃんが言う。何か違和感があったけど、何だろうか。

仲良くしたくない相手でもいるとか？

さっと辺りを見回してみたけれど、それらしい人は見当たらない。殆どが知らない人で、茜ちゃんと接点があるようにも思えなかった。

まあ、良いか。

結局、私の心はそこで落ち着く。考えるのはやめよう、とそう誓ったのだ。

だから、良いのだ。

時が経っても、上城さんに対する周りの評判は悪いようだった。

私が直接その噂を聞くことはなかった。勿論、それは日々の努力の賜物だ。面倒なことには極力関わらない。関わりたくない。

なるべく普通でいたいから。

彼女のクラスには転校生が来たらしかった。

名前は神代闇。カミシロ アンと読むらしい。

すごい名前だ。

アンという少女は、上城さんに似ていた。外見は少し、雰囲気は異常なくらいに。

私は勘が鋭いから、その人たちがどういう関係なのか、この人は今何を考えているのか。そんなことがぼんやりと解る。そして、それはかなりの確率で正解しているのだ。

だから、嘘をつかれると一発で見抜けてしまうのが辛かった。人間って怖いなあ、って思ったけれど、自分だって色んなものを押し込んでいるのだから、お互い様だ。

やっぱり人間って怖いなあ。

閑話休題。

転校生の神代さんは本当に上城さんとよく似ているのだ。一度、廊下ですれ違った時に上城さんだと思って話しかけようとして驚いた。胸元のネームプレートには神代闇とあって、それを見るまで別人だとは気がつかなかったのだ。

神代さんは上城さんとよく行動を共にしていた。

上城さんには私の友人でもある、成木朝美という小学校からの親友がいるのだけれど、クラスが違ってからは一緒にいるところを全く見ない。

朝美ちゃんも去年の途中くらいから様子がおかしかった。

友人たちにはそれとなく彼女の異変について言及したのだけれど、結局、朝美ちゃんが最後まで自分で抱えたままで

。うやむやのままのクラス変えだった。

まあ、そんなことを言い出したらきりがない。みんな何かを心の奥に隠している。

EVERYBODY HAS THE DEVIL ON THE INSIDE

そんなタイトルの曲を前に聴いたけれど、誰が歌っていたのだっけ。

なにせよ、誰かの隠したい部分を全て解ってしまうのが厭だった。

神代闇という少女はまだ解らない。

転校生は普通、周りからちやほやされるものだけれど、時間が経てば次第に収まるものだ。

だから、神代さんは上城さんと静かに、目立たないように一緒にいた。

一方、上城さんは相当参っているみたいだった。恐らく、周りの視線に気づき始めている。

もともと内気な性格なのだろうけれど、それが拍車をかけているのだ。

そこまで解っていて、何もできない自分は何なのだろう。

否、正確には何もできないのではない。

何でもできるけれど、やらないだけだ。

最悪だ。

美化委員会委員長、草巻桃片。三年生だ。「ももひら」という変わった名前だけれど、周りからは「ももちゃん」と慕われている。背中まで垂らした黒髪を、先の部分だけを結っている。

「委員長になりました、草巻です。精一杯やらせて頂きますので、よろしくお願いします」

草巻先輩は澄んだ声でそう言うと、辺りを見回した。続いて、委員会の活動内容を説明していく。美化委員会は各学年二十名ずつ、総勢六十名ほど。持ち回りで毎日校内の清掃を主に行うらしい。

今年は、私も美化委員会になった。ちーちゃんと同じ立場に立ちたいという子供じみた考えで。机を一列挟んだ先にちーちゃんが座っている。周りに座っているのは今のクラスの友達だろう。去年も同じ委員会だったということで、きっと話を聴く必要がないようだった。

ひとつ気がかりなのは、私の斜め後ろに座っている転校生、神代闇のことだ。いつも見かける上城さんの姿はない。きっと去年同様、図書委員会になったのだろう。美化委員会は人気がないので、あぶれた者が集まることが多い。憶測だけれど、初め図書委員会に立候補した神代さんは抽選に漏れて美化委員会になったのではなかろうか。上城さんと違う委員会に率先して、しかも最も人気のない美化委員会に立候補するだなんて、あまり考えられないから。

「実を言うと、今日は特にやることがないんです。清掃は明日から、先ほど作った予定表の通りに行ってください。

では、今日は、解散です」

部活動に入っている子たちは足早に教室をあとにする。そうでない子たちもだらだらと引き上げていく。

「去年、美化委員会だった生徒はちょっと残って貰えるかな？ 倉庫の用具チェックをしたいの。勝手が分かる人のほうが良いので」

教卓に身を乗り出して声を張る草巻先輩の周りに何人かが集まる。当然、その中にはちーちゃんの姿もあった。

「私も手伝おうかー」

ちょっとした親切心から、声をかけた。

「結構です。それに、どういう風の吹き回し？ 自分から手伝う、だなんて」

相変わらずの憎まれ口だ。久々に話す気がするのに、全く違和感がない。

「じゃあ良いよ。ちーちゃんなんてきったない倉庫で埃まみれになってくれば良いんだ！」

「もう、なにを不貞腐れていますの」

「不貞腐れてない！」

周りの視線が、少し気になる。私とちーちゃんはこれくらいが普通。だから、大丈夫。

「えっと、万乗さん」

心配そうな草巻先輩の声。他の先輩方も不安そうにこちらを見ている。

「すみません、先輩。いつものことですから」

そう言うと、ちーちゃんはにっこり笑って、

「行きましょうか」

悠然と告げる。釈然としない周りの人たちを引き連れて教室から出て行った。

こんな風に言い合えるのは、きっと友達だからなのかも知れない。本音をぶつけ合える存在。勿論、冗談まじりに、だ。冗談を冗談ときちんと認識できる相手、それが友達なのかな、とぼんやり考えた。

二組の女の子たちが立ち上がる。男子はもう戻ったあとのようで、神代さんとあと二人、女の子がいる。名前はなんと言っただろうか。

ちらっと胸のネームプレートを見やると、一人は『福永美咲』とあった。

「ミツ、行こう」

短く切り揃えた髪の子、福永美咲がそう言った。少し日に焼けた健康的な肌。陸上部っぽいイメージ。

ミツと呼ばれた子は、対照的に色素の薄い長髪で、三つ編を一房、身体の左側から前に垂らしている。三つ編だからミツ？ そんな筈もないだろうけれど。

彼女たちに勘付かれないように、ネームプレートに書かれた名前を盗み見る。そこには『大島三葉』という文字が並んでいる。なるほど、『みつば』で“ミツ”なのか。

大島さんは慌てて筆記用具を筆箱にしまい、席を立つ。神代さんも同時に立ち上がる。舌打ちが聞こえた。少し離れたところにいる私でさえ聞こえた。

「早く行こう、ミツ」

いらいらした口調で、福永さんが言う。

「ちょ、やめなよ、美咲」

おずおずと指摘する大島さん。でも、福永さんは、意に介せず、

「なんでよ。ミツだって、こいつのことうざいって言ってたじゃない。こんな時だけ良い子ちゃんぶるの」

「それは、その……」

神代さんは開けた口を閉じようか如何しようかで迷っているみたいだった。

教室の中にはもう私と彼女たち三人しか残っていない。クラスみんなは私がちーちゃんと話している時には退散してしまっただった。

如何したものか。

普段からぼんやりしている私が近くにいがいが、如何にもならない、と福永さんは思っているようで、神代さんへ露骨に辛い言葉を浴びせる。大島さんも引っ込みがつかなくなったようだった。

「ただでさえ美化委員なんて面倒な仕事やらなきゃいけないのに、その上こいつが一緒だなんてさ」

「あの時、じゃんけんで上城さんが負けてれば……」

「ほんとよ。あいつったら去年も図書委員会だったんでしょ。一回やったんだから誰かに譲るとかすれば良いのに」

二人の矛先が、段々と上城さんの方へと向いてくる。

ここで私が介入しても、面倒なだけだ。ひとつ欠伸をして、筆記用具と掃除当番表を持って、教室を出ることにする。

ごめんね、神代さん。ごめんね、上城さん。

私はもうそういった面倒事には首をつっこみたくないんだ。

教室の扉に手をかけた時、意外にも神代さんの声が聞こえて驚いた。

「光の悪口を言うのはやめて！」

切実な、一声。

もし空気というものが目で見えるというのなら、その一言で教室内の空気にひびが入っている筈だ。

後ろを振り返ってみると、信じられないものを見るような目つきで、福永さんは神代さんを見やる。大島さんは目を丸くしている。

「馬鹿じゃないの」

震える声で福永さんが告げる。如何してだろう。如何して震えているのが、陰口を叩いていた福永さんなのだろう。

「馬鹿でも良い。でも、光は私の友達なの！ だから、絶対に悪いことは言わせない」

キッと睨みつける神代さんの視線に、二人はたじろいだ。今まで誰も擁護してこなかった上城さんを庇うなんて、私も

吃驚した。

「もう良い。行こ」

机の上の荷物を音を立てて引つつかみ、福永さんは大島さんを連れて神代さんに背を向ける。

「死んじゃえ」

低く発したその言葉が、神代さんの肩を震わせたのに気がついたのは私だけだったのかも知れない。

怠惰（4）

ずんずんと福永さんがこちらに向かってくる。

「ちょっと、邪魔」

福永さんの手が伸びてきて、ぐいっと横に押しやられる。教室の扉の前でぼうっとしていた私は、本当に邪魔だったのだろう。

大島さんが慌ててあとを追って教室から出て行った。残されたのは私と、神代さん。

教室の真ん中で呆けたように立っている。その黒い両目には今にも溢れ出しそうな涙が溜まっていた。

このまま知らない顔で私も教室を出れば良い。そうすれば、厄介事に首をつっこまなくて済む。私は、天才を辞めたあの日からずうっとそうやって生きてきたのだ。

でも、如何してだろう。

如何しても身体が動こうとしない。神代さんから目が離せない。

おかしい。自分でもそう思う。でも、私は、

「あの……」

私の声は二人しかいない教室に大きく響いた。いつもより広く感じるのは、当たり前か。遠くから野球部のかけ声が聞こえた。委員会が終わって部活動の時間なのだろう。

うまく、彼女の目を見られない。俯いていた神代さんが顔を上げる。潤んだ瞳が、揺れた。

「上城さん、のこと」

「……え？」

彼女はきっと私のことなんて知らないだろう。第一回目の委員会の集まりということで、クラスと名前を言うだけの簡単な自己紹介はやったけれど。私だって、神代さんのことはよく知らない。でも、悩んでいるのは上城光のことだろう。

「どうし——」

「解るよ。貴女を見ていればね」

ああ、私は何を言っているのだろう。こんなの私じゃない。そうは思っても、

「上城光は去年からずっとあんな感じ。周りの子たちは特に理由もなく、疎んでいるの。それについて、貴女は納得できていない。さっきだって、この学校の生徒だったらしないようなことをしてたしね。上城さんを庇うなんてこと、自分の首を絞めるようなものだからね」

一気にそこまで言った。

驚かれるだろう、そう思った。違うクラスで、今日初めて話すような相手が、自分の抱えているものを言っただけ。それは驚きを通り越して、不気味にさえ映るかも知れない。

でも、彼女の反応は全く違った。

「そこまで解っていて、何もしないんですか……」

錆びついた鎖をそのまま飲み込んだ時のような声だった。きっと、彼女の奥底から絞り出した言葉。

私もさっきまではそうだった。心の底辺にそっと想いを溜め込んで、いつまでも言わないで腐らせていた。

「私なんてどうでも良いの。でも……でも、そこまで解っているんだったら、なんで光を助けてあげないのよ！ 去年から光を知っているんでしょう？」

教室に彼女の声が響き渡る。

黒く澄んだ二つの瞳が、私を睨みつける。

「そうだね、去年は、なんと同じクラス」

おどけてそう言ってみる。反応は、解りきっている。

「だったら、なんで……！」

なんで助けてあげないの……。神代さんの切実な声が、教室の中心で爆ぜる。

如何して助けないのか。

そんなこと、理由は一つだ。

面倒事に首を突っ込むことは辞めたのだ。

あの日、天才を辞めた時に、『私』は死んだのだと思う。

以来、何もやる気が出ないのは、もう私のこの身体の中には『私』がいないからなのだ。私は空っぽ。ただの抜け殻だ。

天才は死んだ。

「ねえ、如何してよ！　如何して助けてあげないの！」

肩を掴まれる。ぎゅっと力が込められ、痛い。この痛みは、きっと神代さんの痛みそのものだ。

「私だって！」

神代さんの手を振り払って叫んだ。彼女の叫びに負けないくらい大きい声が出て、自分でも吃驚した。声の大きさと、自分の行動自体に。

こんなの、いつもの私じゃない。何も考えずに、静かに目立たずに生きていきたかったのに。心の奥底に溜まっていた言葉が、次々に溢れそうになる。いや違う、もう溢れ出しているのだ。

「私だって、助けてあげたいよ！」

「じゃあ、なんで！」

「だって！」

気づいたら、ぼろぼろと涙を流している自分がいた。頬を伝って、床に落ちる。

言葉だけじゃない。溜め込んでいたのは涙の形をした感情だったんだ。

「もし、上城さんを助けて、私はそのあと如何すれば良いの！　きっとみんなからも頼られる。一般人がスーパーマンに頼るみたいに……それでも……それでも、また私は、誰かに妬まれる！　あの頃、そうだったみたいに！」

圧倒された神代さんは、黙って私の言葉を聴いている。だから、声が枯れるまで叫んでやろうと思った。

「もうそんな厭なの！　誰かを助けられる力があるのは解ってる！　でもその先、私は如何したら良いの！？　スーパーマンは人を助けるけれど、スーパーマンは誰に助けて貰うの！？」

息が荒い。

涙が止まらない。

俯く私に、神代さんは優しく言った。

「貴女はスーパーマンなんかじゃないわ」

違う。そんな気休めはいらない。現に私は昔から天才と言われ続けて、普通じゃないのに。

それでも、私の抱えた想いをぶち壊すように、神代さんは告げる。

「貴女は私たちと、みんなと同じ。ただの人間だよ」

「え……？」

一瞬、彼女の言葉が理解できなかった。鼓膜は揺れても、それを言語として脳が処理できないような。

「私が……ただの人間……？」

それは私が一番欲していた言葉。

天才でも、怠け者でもない。ただの人間。

呪縛が解けたみたいだった。みんなと同じ、ってなんて安心する言葉なのだろう。安堵してほうっと息を吐くと、さっきよりもたくさんの涙が出てきて驚いた。

「人より少しだけ勘が鋭いってだけでしょう？」

肩までの黒髪が彼女の笑顔と一緒に揺れる。

言葉の一つ一つが優しい。

長い沈黙のあと、涙交じりの声で言った。

「……有難う」

お礼を言って、もう一言付け加える。

「……それと、ごめんね。上城さんのこと」

「ううん、ごめん、私こそ勝手言っちゃって」

そう言って、神代さんはそっと微笑んだ。夕日に照らされた彼女の笑顔は、反則級に綺麗だった。

敵わない、とそう思った。私もこの子みたいに、上城さんの為に何かできるだろうか。

なんだかやる気が出てきた。

きっと私にはみんなを助けるなんてことはできない。何でもできるなんてのは、ただの驕りだ。

でも。

それでも、友人を一人助けるくらい、スーパーマンじゃなくたってできることだったんだ。

目の前の転校生は、天才でもスーパーマンでもない。それでも、大切な友人の為に懸命に闘っている。それが、簡単な証明。

神代さんに借りたハンカチで涙を拭っていると、教室のドアを開けて上城さんが入ってきた。なかなか教室に戻ってこない神代さんを捜しに来たのだろう。

充血した目の私を見て、驚いている様子だ。急いで背中後ろにハンカチを隠したけれど、泣いていたのはばれてしまっただろう。

濡れたハンカチは吸い取った涙の重さで、少しだけ重くなっている。それは気がつかないくらいの微小な変化だけれど、一方で私の身体はひどく軽くなっていた。質量保存の法則なんて、嘘かも知れない。それとも、涙は例外ってことかな。

「ど、如何したの、白鳥さん。目、真っ赤だよ」

慌てた様子の上城光。いつもはおどおどしているけれど、今は違った。本気で心配しているみたい。

「目にゴミが入っちゃったみたいで」

神代さんがすかさずフォローした。あまり上手い言い訳ではなかったけれど。それでも、上城さんは納得したようで、

「そっかあ、もう痛くない？」

なんて訊いてくる。

それがなんだかくすぐったくて。

とても居心地が良くて。温かくて。

私は思わず笑ってしまった。

きょとんとしている二人を置いて、私は一人でいつまでも笑った。

瞳の脇に浮かんだ涙を隠す為に。

怠惰（5）

その日は三人で一緒に帰ることになった。辺りは薄暗く、遠くに沈みかけた夕日が見える。

私と上城さんは家が同じ方向だったから、途中で神代さんとは別れることになる。

別れ際に彼女は、思い出した、と呟き、私に向かって、

「スーパーマンはさ、きっと誰の助けも要らないんだよ。自分でなんとかしちゃうの。だってそれがスーパーマンなんだから」

笑顔でそう言うと、神代さんは別れの挨拶と共に帰ってしまった。

その後ろ姿が見えなくなった頃、上城さんが首を傾げながら、

「スーパーマン？ 何の話だろう……知ってる、白鳥さん？」

と訊いてきた。

なるほど、スーパーマンは自分で何とかしてしまう。誰かに頼る必要なんてない。

スーパーマンはそれでこそそのスーパーマンなんだ。

私は結局、人間だから。誰かに頼るしかない。

でも、人間だから、誰かに頼れる。頼っても良い。そしてたまに誰かに頼られる。そういった関係が、私たちなんだ。

「さあねえ、転校生はそういった映画が好きなのかもよー？」

真面目に答えるのが照れくさかったから、はぐらかしてみた。

そっかあ、と妙に納得してしまう上城さん。

この子の純真さも、もうちょっとどうにかならないものだろうか。なんとか人並みに疑う、ということも覚えた方が

良い。

純粋な心をいつまでも汚さないようにするのは、きつととても大変だ。一度汚れてしまえば、あとはどれ程汚れよう

があまり気にならなくなるのと同じ。

それでも、上城さんには綺麗な世界で生きていて欲しい、なんてことを思った。

「えっと、私の家、こっちだから……」

交差点で立ち止まる。上城さんの家は信号を渡った先らしい。私は信号を渡る必要がないから、ここでお別れだ。

信号の赤い光が、青に変わる。進め、の合図。

「また、明日ね」

上城さんは控え目に手を振って別れを告げた。青信号が点滅しないうちにと、早歩きで前へ進む彼女の背中。カラカラと自転車の車輪が音を立てる。その後ろ姿に、何か言おうと思ったけれど上手く言葉が出てこなかった。いつもは心の中に溜まって渦を巻くのに、今に限ってそれがなかった。開きかけた口で、仕方ないから短くこう言うことにした。

「また明日」

それを聞いた上城さんは笑顔で頷いて、去って行った。

言葉にすれば、空気を震わせて、きちんと伝わるんだ。

伝えたいこと。

伝わって欲しいこと。

伝わらないこと。

伝わって欲しくないこと。

色々あるけれど。

心の中で持て余しては、きつと勿体ない。

彼女の姿が見えなくなってから、口の中だけでおまじないみたいに呟いてみた。

「また明日」

また明日、逢えると良い。

彼女たちに『怠惰』 了

暴食（1）

『暴食』

——カラスが涙を流すとして、その涙は何色をしているだろうか。

昔読んだ本の一節に、そんなことが書いてあった。

「ほら、あすこ。真っ暗な空をカラスが飛んでいる」

「ああ、本当だ。でもあのカラス、ちょっぴり泣いているみたいだぜ」

「カラスが泣くもんか。カアカアといつも喧しいだけじゃあないか」

黒い夜空に溶け込む様にして、カラスが一羽駆けている。二人の会話を聴き乍ら、私は莩の煙を吐いて、ぼんやりと物思いに耽るのであった。カラスが涙を流すとして、その涙は何色をしているだろうか。そんなことを考えて。

この続きは覚えていない。でも、このあとに何かが書かれていたというぼんやりとした記憶がある。

そもそもカラスは泣くのかな、なんて子供心に思ったことがある。それは今でもそうだ。私たち人間は悲しい時には涙を流す。透明で、綺麗な涙を流す。

真っ黒な身体のカラス。

私はそれでも、カラスの涙が透明であれば良いと思った。

教室の窓から外を見ていたら、向かいの校舎に一羽のカラスが止まっていた。その所為だろうか。古い記憶がぼやけて蘇る。

あの本は今、何処に行ってしまったのだろう。タイトルすら思い出せない。

先生が黒板にチョークを走らせる音を聴きながら、空を見る。千切れた雲が、行く当てもなく漂っている。先ほどのカラスが飛び立つ。黒い両翼で、空を裂いた。

何処に行くのだろうか。あの翼で、何処まで行くのだろうか。泣き場所を探しに行ったのかな。

授業の終わりのチャイムが鳴って、はっと我に返った。クラス会長の号令で挨拶をすると、隣の席の戸塚亜月が話しかけてきた。

「如何したの。なんだかぼうっとしていたけれど」

少し吊り上った目。ずっと通った鼻梁は西洋の人形を連想させる。ぶくぶくした頬は、触ったらとても柔らかいのだ。これで髪の毛が金色ならお話に出てくるようなお嬢様に見えることだろう。ふわふわと波打つ腰まである亜月の髪が揺れて、良い匂いがした。

六時間目が終わると、帰りのSHRの前に掃除があるから、周りの子供たちはいそいそと移動を始める。

「カラスがいたの」

ぼつりと告げる。亜月はよく解らないといった顔。それもそうだろう。

ちらと窓の外を覗いてみたけれど、何処にもカラスの姿は見えない。

「ねえ、亜月。カラスって泣くと思う？」

ざわざわと騒がしい教室で、自分の声がひどく弱々しく思える。きちんと亜月に聞こえているのだろうか。

「泣かないわよ。あいつら図太そうだし」

腕を組んでそう言っただけの亜月が、彼女らしくてなんだか笑ってしまう。

「ど、如何して笑うの！」

「ごめんごめん。亜月らしいな、って」

「なによ、それ」

そっぽを向いて、むくれる亜月。これも彼女らしいのだけれど。これ以上笑うと本当に怒られそうだから、やめておこう。

それに、そろそろ掃除場所に行かなくてはならない。教室掃除の子たちがすでに机を教室の後ろへと運んでいる。

「じゃあ私、掃除行くねー」

「あ、こらっ」

亜月が止めるのを構わず、教室から出ようとする、後ろから髪の毛を引っ張られた。

「うぐ……っ」

「待ちなさいよ。その話とぼ一っとしていたの、関係あるの？」

二つに結った髪の毛の片方を握られて、私はじたばたともがく。髪を掴むなんて横暴だ！

必死に亜月に抵抗をしていると、

「そこらへんにしとけ、戸塚」

担任の村中先生の声がした。髪を掴んでいた力が弛められる。ぴしっとスーツを着込んだ先生は、三十歳近いのにそれよりもとても若く見える。流石に亜月も先生には頭が上がらないらしく、少し大人しくなった。

「長谷川もだぞ。校舎裏の掃除だろう」

と思ったら私にも矛先が向いた。

「す、すみません」

謝ると同時に、亜月の手を振り解いて、一目散に駆け出す。後ろで亜月が不満の声を上げた。

「こら、琴理！」

外履きに履きかえる為に、昇降口までの廊下を駆け足で進む。

亜月の声が、何故だか頭に残った。

琴理。

私の、名前。

「ことり」という自分の名前が嫌いだった。

私には空を飛ぶ為の翼なんてないから。

その代わり私には、血を吸う為の牙ならある。

物心ついた頃には、私は既に吸血鬼だった。吸血鬼というのは文字通り、『血』を『吸』う『鬼』のことだ。

最近では吸血衝動の発作が現われる回数も減ったけれど、一時期は血が欲しくて仕方がないことがあった。自分が吸血鬼であることを厭だと思ったことはない。日差しを浴びたら駄目だとか、ニンニクが弱点だとかよく聞くのだけれど、全然そんなことはない。

暑いのは厭だし、ニンニクは臭いけれど、それは私が吸血鬼じゃなくても同じことを思っただろう。

吸血鬼なのに、私には翼がなかった。手下の蝙蝠もない。昔、先輩吸血鬼に出会った時にすごく圧倒されたのを覚えている。先輩吸血鬼はまさに吸血鬼と呼ぶに相応しい姿で、自分が同じ吸血鬼であることを恥ずかしく思った。

漆黒の両翼と、周囲を飛び交う黒い蝙蝠の大群。

そのどちらも私にはなかった。それでも、私は吸血鬼で。吸血鬼の血が流れている。

こんな落ちこぼれでも、吸血鬼なのだった。

だから、私は自分の名前が嫌いだった。

「ことり」なんて可愛らしさは、私にはない。

暴食（2）

吸血鬼の私が人間の学校に通っているというのも、見方によってはおかしい話だ。でも、それには色々と事情があるのだ。最近では吸血鬼と人間との混血が珍しくなくなっているのが一つの原因だ。要は仲良くやっていきましょう、ということらしい。

別に人間を嫌いではないから、良いのだけれど。中には人間嫌いの吸血鬼もいる。人間をただの餌としか見ていないのだ。

そんな考えは間違っている。

私たちは確かに人間の血を吸うけれど、吸わせて貰っている、という考えの方がしっくりくる。多分、それが仲良くやっていく、ということなのだと思う。

血を吸わなくても、私たちは人間でいう食事からの栄養摂取が可能だ。

これも混血のお陰。純血の吸血鬼は人間の血がないと生きていけないから。

混血よりも純血の方が優れている、という見方もあるらしいけれど、私からすれば純血なんて不便なだけだ。美味しいプリンを食べたって栄養を取ることはできないのだから。だから食べることに意味を見出だせずに、食べなくなってしまうらしい。まあ、勿論それで太ることもないのだろうけれど……。

ともあれ、私たち混血は血を吸わなくても生きてはいける。

でも、残念なことにこの頃発作の兆候が見え出した。まずい、と自分でも思う。

本当はもう誰の血も吸いたくない。

血を吸うといっても加減をするから死ぬことはないし、前後の記憶が少しだけ曖昧になるくらいだったから、人間とは上手く共存できている。それでも、誰かの吸うなんてことはしたくなかった。

だけど。

だけど、渇く。

渇いている。

身体の奥底が渇いている。

渴望している。

あの甘美な、匂いと味。

欲している。

血が、血が欲しい。

赤い、紅い、朱い、赫い、血を。

それもこれも、あの子の所為だ。あの子を見ると、私は――

「長谷川さん、大丈夫？」

心配そうな声が聞こえて、顔を上げると、そこには一人の女の子がいた。私に話しかけてきたこの子。そう、この子だ。クラスの腫れ物である上城光という少女。

掃除が終わって放課後。周囲の喧騒に紛れて、上城さんは私にそう言った。

「え、えっと、大丈夫だよー」

そう笑顔で返すと、彼女ははにかんで俯いた。

「なら良いんだけど……その、長谷川さん、何か辛そうだったから」

普段からぼーっとしていて何を考えているのか解らない子だったけれど、やっぱり何を考えているのか解らない。黒い髪は肩にかかるか、かからないかといった具合に切り揃えられていて、白い首筋が良く見える。ごくり、と無意識に生唾を飲み込む。

血を吸いたい……。

あの淡い雪でできたような首筋に齧り付いて、血を吸い尽くしたい。

「有難う、上城さん。でも、本当に大丈夫だよ、ちょいと考え事をしているね」

言葉を紡いでいる最中も、首筋から目が離せない。視線がそこに吸い寄せられるみたいに。

吸血衝動と、それを必死に止めようとする心が闘ぎ合う。苦しい。苦しい。

でもきっと友達の血を吸うことは、最も苦しいことだと思うのだ。だから、吸いたくない。それが私の吸血鬼としての意地だ。

「考え事……？」

目の前の上城さんの心配そうに揺れる顔が、妙に印象に残る。

「そうそう、そうなの。考え事」

まずいなあ。下手に嘘をつくものではない。嘘というものは一回ついただけで、とても大変なことになる。嘘を嘘にする為に、新しい嘘をつかなければならない。そしてその新しい嘘を守る為に、また新しい嘘を、といった具合にどんどん追い込まれていくものだ。上城さんは心配そうに私を見上げてくる。身長が同じくらいの筈なのに、彼女の方が小さく感じるのは如何してだろう。

「上城さんは、カラスが泣くと思う？」

引っ込みがつかなくなった私は、ふとした思い付きでそんなことを訊いてみる。なるべく、首もとを見ないようにする。上城さんは難しい数学の問題を解く時の顔でうーん、と唸った。

「ごめん、そんな深く考えないで。ほんとつまらないことだし」

慌ててそう言うと、上城さんは薄い唇を開いた。

「……泣いて欲しくはない、かな」

ぼつりとそう言った。穏やかな水面に一枚の葉がゆっくりと落ちたみたいに、その言葉がじんわりと鼓膜を揺らした。

「あ、えっと……ごめん。泣くかどうか、だよな……ええっと」

「ううん、もう良いの」

泣くか泣かないか、ということよりも、泣いて欲しくない、という彼女の考えが素敵に思えた。

不思議な表情の上城さんに、少しだけすっきりした気持ちで告げる。

「有難う」

帰り道、亜月と並んで自転車を漕ぐ。ペダルを回して、私たちの身体が進む。

少し日の傾いた空に、一羽のカラスが飛んでいた。学校でのやりとりを思い出す。

亜月と上城さんの意見はどちらかと言えば、カラスは泣かない、だった。やっぱり、私は普通とは違うのかな。人間じゃないから。

私はカラスに泣いて欲しい、と思った。カラスの涙はきっと透明で、きらきらしていて。

その涙が、地上に降り注ぐ雨の何パーセントかであれば、それはすごく素敵なことだと、私には思えるのだった。

「私にはカラスが泣くとは思えないけど」

頭上を飛ぶカラスを見やって、何処か忌々しそうに亜月が言った。

「何かあったの？」

カラスに厭な思い出でもあるのかな。

「別に」

そう言う亜月の長い髪の毛が、風の中に舞った。

翌日、朝から気分が良くなかった。ふらふらと眩暈がして、吐き気まであった。秋も終わりにかけていて、涼しいのが救いだった。暑いのも、寒いのも苦手だ。秋は、私の一番好きな季節。

少し家を出るのが遅れたから、教室に着くとだいぶ人が多い。その中には上城さんの姿もあった。ドクンと身体が反応する。

血を吸いたい。

上城さんの血を吸ってしまえば、きっと……。

きっと、この苦しみから解放される。でも、それは……。

葛藤を見透かされないように、自分の席へ急ぐ。

「おはよー」

白鳥慧子の挨拶が鼓膜を揺らす。ほんわかした声が、今は何処か安心する。隣にいた木下茜も、おはよう、と言ってぱたぱた手を振った。

慧子はいつもぼんやりしていて、傍にいと和む。茜はクラスで一番背の低い女の子で、いつもぴよこぴよこしている印象がある。見ていて面白い。癒し系な二人だから、体調が悪くても、自然と居心地の悪さは感じない。

「英語の宿題やった？」

茜にそう訊かれて、すっかり忘れていたことに気がついた。

「あ、れ？ 宿題あったっけ……」

「あったよ。私も分からなくて全然終わってないんだけどね」

終わっていれば、見せて貰おうかなって。彼女ははにかんでそう言った。隣で欠伸をしている慧子は絶対にやっていないだろう。忘れていたのではなくて、やっていないというのがまた厄介なところだ。

吸血衝動を抑圧している所為か、他のことにまで気が回らないのが現状だった。どうしよう。そうは思っても、我慢するしかない。

自分のできる範囲のことを、精一杯やっていくしかないのだと思う。

「じゃあ、茜。まずは座って。ほら慧子も」

だから今は、英語の宿題を片付けるところから始めないと。

数学の授業中に先生に指され、黒板に出て問題を解こうとした時だった。

席を立ち上がった瞬間、強烈な眩暈に襲われた。ぐらっと視界が揺れて、足に力が入らない。

騒然とする教室。先生がすぐに飛んできて、慌てて私を抱きかかえた。

「……だ、大丈夫、です」

たったこれだけの言葉を発するのにも苦勞した。呼吸がしにくい。

ふと先生の首筋が目飛び込んできて、吸血衝動が蘇る。きっと今まで抑えてきた分の反動だ。身体に力が入らない。

保健委員である亜月が保健室まで付き添ってくれることになった。肩を貸して貰って、なんとか歩く。いつも歩いている廊下が、ひどく長く感じられた。

「ごめんね、亜月。もう良いよ、自分で歩けるから」

階段をひとつ下りた時にそう言ってみたけれど、一蹴された。

「何言ってるのよ。まだ顔色だって悪いじゃない」

いつもクールで他人のことなんてあまり気にしていなさそうに見えたけれど、その認識は改めるべきかも。なんだかいっつもの数倍優しく見えたのだ。

「ありがと……」

「一応、保健委員だからね」

触れ合う肩から、彼女のぬくもりを感じる。歩く度に揺れるウェーブがかかった髪が綺麗だ。長い髪の間から、白い首筋が見える。そこには青白い血管がうつすらと見えていた。なるべく見ないようにした。

授業中の為か、廊下は静かなものだ。今なら血を吸っても誰にもばれないだろう。亜月も少し記憶と血を失うだけで済む。そして、私の体調も回復する。悪いことなんてない。

なのだけれど。

襲い来る吸血衝動に、歯を食いしばって堪える。額に汗が滲む。呼吸が更に荒くなる。

「もう少しだから頑張るなさいよ」

励ましてくれる言葉に答えるように、吸血衝動を抑えた。今ここで血を吸うことは、亜月を裏切ることになってしまう。

だから、絶対に血を吸いたくない。

私の身体は血を吸わなくても生きていける身体なのだから。

だから。

そこまで考えて。

意識はぶつり途切れた。

暴食（3）

目を覚ますと、保健室の清潔なベッドに横になっていた。
薬品の独特な匂いがする。
ぼやけた視界には、隣の椅子に腰掛けている戸塚亜月の姿。
私、如何しちゃったんだろう。
きっと倒れたんだろうな。うまく働かない頭で、ぼんやりと思った。
「目が覚めた、琴理？」
彼女は私の瞳を覗き込んでそう尋ねた。私が寝ている間、ずっとここにいてくれていたのだろうか。
「いきなり倒れたから、吃驚した」
ごめん、と胸中で謝る。
「ただの寝不足って、先生は言っていたけど……私、心配したんだよ」
亜月の声が妙だと思ったら、彼女は目にいっぱい涙を浮かべていた。
がぼっと抱きしめられる。細いけれどしっかりとした亜月の身体。彼女の体温を制服越しに感じる。
「心配、したんだから……」
シャンプーの良い匂いが、鼻を掠める。薬品の匂いが薄れて、彼女の存在を確かめられた。
亜月は本当に優しいんだな、とぼんやり思った。
そんなことを思いながらも、もう限界だった。
抱きすくめられた私の口元には、彼女の白い白い首があったのだから。皮膚の下には血管が幾筋も見えていて、頭がくらくらする。
目の奥がチカチカして、ぐらぐら視界が揺れる。その中で血管だけはしっかりと見えていて。もう本当に、駄目だった。
「ごめん、亜月」
呟くが速いか、彼女の血管に牙を突き立てる。
亜月は小さく呻き、気を失ったみたいだった。
それで良い。私のこんな姿なんて、誰にも見せたくないから。
何も考えられずにただただ、血を吸うという行為に没頭する。
口の中に彼女の血が溢れる。そして、広がる甘美な味。赤い血を一心に嚥下していく。
これが、亜月の血。
大切な友達、血。
私の求めていたもの。
幸福感に包まれているのも、僅か数秒。早く牙を離さないと亜月が危ない。
名残惜しいけれど口を離す。綺麗に舌で血を舐め取ったけれど、うっすらと残った二点の牙の噛み痕や、血が少なくなつて青ざめた唇が痛々しかった。こちらにしな垂れかかる、血の抜けた分だけ軽くなった亜月の身体。
ごめん、と呟いた。でも、彼女には聞こえる筈がない。
私の代わりに亜月をベッドに寝かせた。
何て言うんだっけ、こういうの。ミイラ取りがミイラになる、だったかな。ちょっと違うかな。
亜月の顔色が少し悪い。血が足りないのだろう。
それでも、たいていはすぐに目を覚ますから、それまで待つことにした。
亜月が眠りについてしまった、上手い理由を考えながら。

あれから半年が経って、私は中学二年生になった。

中だるみの年、なんて言われているから、授業についていけるようにたくさん勉強しなくてはならない。

クラス変えの結果、私は亜月や遥と同じクラスになった。岡崎遥は去年も同じクラスだった。肩口で撥ねた猫っ毛が愛らしい女の子。

「お、ことりんも一緒かー」

そう言ったのは慧子だった。のんびりした声ですぐ解った。慧子も同じクラスか。新しいクラスでも、知り合いがいるというだけで全然緊張なくて済む。

「他のみんなはバラバラか」

遥が少し気落ちした声で言う。

「朝美ちゃんはちーちゃんと同じだったかな」

「あとは茜と桜も同じクラスって言ってた」

去年同じグループにいた子たちとはそれぞれ別のクラスになってしまった。それは仕方のないことだけれど、やはり寂しいものがあつた。

「また一年よろしくね」

「何言ってるのよ、琴理。二年から三年に上がる時には、クラス変えがないんだから、このクラスで卒業までいくのよ」

亜月がそう言つてのけた。そうだった。確か受験勉強も考えて、二年生から進級する時にはクラス変えを行わないのだった。

「良かったねえ、戸塚さん。ことりと三年間一緒のクラスで」

「別に良くはないけど」

亜月はそう言つて自分の席へと戻つた。怒らせてしまったかな。

時々、慧子は計算して物事を進めているように思えるときがある。今だってそうだ。亜月は何も言っていないのに、良かったね、と声をかけたのだ。

いつものだらけた態度からは想像もつかないけれど、本当はとても頭がきれる子なのかも知れない。能ある鷹は爪を隠す、というし。白鳥慧子。白鳥は水面下では必死に足を動かして泳いでいる。でも、周りの人にはそれが解らない。ただただ優雅に水面を漂っているようにしか見えない。それと一緒になのかな。

そんなことを考えたけれど、ふああ、と大きな欠伸をする慧子を見て、その考えをかき消した。ないない。慧子に限って、それはない。

上城さんとは違うクラスになった。

かつて血を吸った人と、血を吸いたかった人。

同じクラスに慣れたのは、亜月だけ。亜月はあのあと、特に後遺症もなくいつも通りの学校生活を送っていた。いつも通りクール、という意味だ。あの時の優しさはそれ以来発揮されることはなかった。

上城さんもいつも通りにのほほんと過ごしていた。ただ、周囲の視線はあまり良くなかった。何故だかは解らない。陰気な性格なのは見ていて解ったけれど、取り立てて騒ぎ立てることでもないと思う。

なににせよ、変わりのない日常を送っていたわけだ。

周りのみんなは。

私はというと、また吸血衝動に見舞われていた。

厭だ。

如何して。

如何しよう。

血が欲しくて堪らない。

一度味わってしまった快樂は、多少のことで忘れられるものではない。

でも、また亜月の血を吸うわけにはいかない。私をあんなにも心配してくれたのに。友達だったのに。

私はそれを裏切ってしまった。

今度はこの身体がどうなったって良い。絶対に彼女から血を吸わない。そう決めていた。

「琴理、帰ろう」

放課後は亜月と一緒に帰ることが多かった。

上城さんは顔見知り程度だったから、一緒に帰るということにはなかった。彼女はいつも誰と帰っているのだろうか。確か一年生の頃は、私の友達の成木朝美とよく帰っていたけれど。今は知らない。

夕日に染まる廊下を歩く。昔、亜月に付き添って貰って歩いた廊下。

私の正体を知らない彼女の横顔は、沈み行く太陽に照らされて赤く染め上がっていた。

赤は血の色。ごくりと唾を飲み込む。

いっそ自分の正体を話してしまえば良いんじゃないか、と考えた時もあった。

でも、もし嫌われたら？

はっきりと拒絶されたら？

私はきっとそれに耐えられない。我慢をするのは、辛い想いをするのは、私一人で十分だ。人間じゃない、吸血鬼の私が。

「如何したの、亜月。急に立ち止まって」

亜月が歩みを止めて、遠くに視線を向けていた。

そこには上城さんの姿があった。ドクンと心臓が鳴る。

頭に浮かぶのは血のことばかり。厭だ。厭だ。

彼女の横を歩いているのは、四月に転校してきた神代さんだ。下の名前は忘れてしまった。漢字一文字だった気がするけれど、知らない読み方だったから。

二人は仲良さそうに並んで歩いていて、まるで昔からの知り合いのように見えた。それに何処となく二人は似ている。肩口までの髪の毛や、黒い綺麗な瞳。

なんだか、上城さんが羨ましかった。

私は亜月とは一年以上も友達をやっているけれど、まだ本音で話すことができない。

今まで誰かに秘密を伝えられたことなんてなかった。でも、亜月になら、全て教えても良いかもな、と思った。否、知っておいて欲しいのかも知れない。

本当に相手を想う、という行為はきっとひどく難しくて、勇気が要ることなんだ。言いたいことも言えない関係は友達なんて呼べない。誰かがそんなことを言っていた。ただの綺麗事だと思う。でも、少しくらい勇気を出したって、罰は当たらないと思う。

亜月なら……たとえ解ってくれなくても、今まで通りに接してくれる気がした。

だけど。

だけど、遠くの二人をじっと見つめる亜月にはなかなか言い出せなかった。言い出せない雰囲気だったから。

暴食（4）

翌日、私は倒れた。

去年と状況は一緒だったから、学校を休めば良かったのかも知れない。朝からどうにも体調が悪くて、朝ご飯は食べてすぐに吐いた。それでも、ぼろぼろの身体で学校に来たのだった。

それは、給食の準備中だった。食器が入った重い容器を運んでいる時に、身体力が急に抜けたのだ。大きな音を立てて床に散らばるプラスチックの食器。

周囲から上がる悲鳴。

ああ、まただ。またやってしまった。そう考えるのが精一杯で、自分がこれからどうなるのかなんて考えられなかった。薄れ行く意識の中で、頬に当たる床がひんやりと冷たかった。

目が覚めた。

カーテンの隙間からは夕日が差し込んでいる。

保健室にいることはすぐに解った。あの薬品臭いベッドに横になっているということも。今は何時だろうか。先生の机の上にシルバーのおしゃれなデジタル時計が置いてある。もう帰りのSHRも終わってしまった時間だ。お昼食べてないや、と思い出した途端にお腹がぐうっと音を立てた。こんな時でも身体は正直だ。お腹がすけば、お腹の虫が騒ぎ立てるのだ。

限界までお腹がすけば、人間はどんなものでも食べてしまう。限界まで喉が渴けば、たとえそれが泥水でも飲んでしまう。昔に読んだ本に似たようなことが書いてあったことを思い出す。それほどまでに貪欲な生き物が人間であり、私たち吸血鬼なのだろう。

沈む太陽の眩しさに目を細めていると、ドアノブが回る音がした。振り返るとそこには亜月がいた。また彼女に迷惑をかけてしまった。

「良かった！ 起きたのね、琴理」

綺麗な笑顔だった。申し訳ない気持ちと、彼女の血を吸わなくて良かったと思う気持ち。どちらも同じくらいあった。

先生を呼んでくる、と言って彼女は慌てた様子で部屋から出て行った。

彼女には悪いけれど、亜月が帰ってくる前に保健室から逃げなくては。

きっともう限界だから。これ以上、亜月の傍にいと血を吸いたくて堪らなくなる。

血を吸わなければ私はどうになってしまうのか、全く見当もつかない。でも、あの笑顔を壊すよりはマシだ。亜月の血を吸うなんて厭だ。厭なのだ。

そんなの、厭。

力が上手く入らない身体を引きずるようにして、昇降口を目指す。

息がし辛くて、酸素が恋しい。汗が次々に溢れ出て、気分が悪い。顎を伝って床に落ちた汗の粒が、なんだか涙みたいだな、と思った。

壁伝いにやっとの思いで進み、昇降口が見えた時、後ろから声がした。

「何処行くの、琴理っ！」

亜月だ。

振り向かなくても声で解る。大切な人の声。

振り向いたら駄目だ。自分を保てなくなってしまうだろうから。

震える足を叱咤して、勢い良く走り出す。逃げ出すみたいに。

足がもつれる。右足と左足が、まるで自分のものではなくなってしまったようで。

こんな時、翼があれば楽なのだろう。夕焼けに染まる空にふわっと舞い上がり、全てから逃げ出せるのだから。

昇降口を過ぎ、夕暮れの空の下を走る。上履きのまま、必死に走る。

背後で、亜月の足音が聞こえる。

厭。

来ないで。

来ちゃ駄目だよ、亜月。

腕をいっぱい動かして、出鱈目なフォームで当てもなく走った。

無意識に校舎裏を目指していた。毎日掃除をしている場所。あそこは人もいなくて、静かで良い場所だから。

今は誰にも逢いたくない。

頬に当たる風に、力任せに突っ込む。翼なんかなくても、私は二本の足で走るしかない。走っても走っても、現実からは抜け出せないけれど。

もう少しで校舎裏に着くという時、周囲から悲鳴が聞こえた。

一体何が起こったのだろう。そう思い足を止めて、辺りを見回す。

一瞬、真っ赤な薔薇が咲いているのかと思った。

美しい薔薇色。

それは血だった。

上城光の血。

私の目の前に、上城光が倒れていた。

なんとなく飛び降り自殺という文字が頭に浮かび、上を見上げると、屋上に転校生の姿がちらっと見えた。転校生の神代さんは、ぼろぼろと大粒の涙を零している。それはまるで雨のように地上に降り注いでいた。真っ黒な髪の毛が、場違いにもさらさらと揺れている。

彼女の涙が、私の頬にぶつかって弾けた。

上城さんの身体は真っ赤に染まって横たわったまま動かない。異様に赤い血をぶちまけて。

きっとそれは夕日の所為だ。立ち込める血の匂いが、私を私でなくさせる。亜月の血を吸った時のことが脳裏によぎる。

あの時の味と幸福感。そして、上城光は亜月とは違う、かつて吸いたかった血。

それが今、目の前にある。上城さんの血は、じわじわとその面積を広げ、私の上履きに当たって赤い染みを作った。限界だ。そう思った。

暴食（5）

一步、足を踏み出すとぴしゃっという音が聞こえる。さっきまでふらふらだった足が、今は力強い。もう何も考えられない。血溜まりに沈む彼女の姿ももはや目には入らない。本能のままに、吸血鬼の血に従うように、私は地面を這う血に手を伸ばした。

指先に触れた上城さんの血は、ひどくぬるかった。

無理だ。

スプーンもフォークも使えない幼児みたいに、私は自分の両手にべっとり付いた血を舐め取っていく。

結局、無理だった。

口の中が上城光の血で侵されていく。

私が壊れていく。

喉の奥を大量の血が通る。

厭だ。

食道を通過して、胃に溜まっていく感覚。

止まらない。

厭なのに。

止めたいのに。

壊れたのだ、私は。

口内に溢れる、私の求めていた血の味。それはひどく罪の味がした。

一心不乱に砂利混じりの血液を舐めていると、後ろから誰かに羽交い絞めにされ、血溜まりから引き剥がされた。

風に揺れるウェーブの黒髪で、すぐに亜月だと解った。

「琴理、琴理！ あんた、なにやってるのよ！？」

「離して、離してよっ！！」

必死に抵抗しても、亜月の腕は私の身体を羽交い絞めにしていて、どうにも離れなかった。

彼女の顔を見るのが辛い。厭だ。

きっと今の私はひどく醜いに違いない。口の周りは当然のこと、手や制服はたくさんの血でべとべとだろう。

亜月の目にはただ、食欲に負けた醜悪な吸血鬼の姿が映っている筈だから。

「……亜月」

彼女から逃れることは諦めた。今の私じゃ多分、無理だから。

「私、如何すれば良いんだろう……こんな身体、厭だよ……」

気がついたら目からはぼろぼろと涙が零れ落ちていて。

心の奥底から必死に抑えていた感情が、決壊したダムから水が勢い良く流れ出るようにして、溢れて弾けた。

亜月は押さえていた腕を放してくれた。

「如何してだろうね……いっぱい、いっぱい我慢したのに……結局、私は駄目な子なんだよね……ごめんね、亜月い……ごめんね……」

遠くで救急車の音が聞こえる。

きっと上城さんの為のサイレンだ。

「私ね……吸血鬼なの……人間じゃないの」

言った。

言ってしまった。

亜月は如何思うかな。

私を嫌いになるだろうか。

「うん。そっか」

彼女の返事は短かった。拒絶でも許容でもない。でも、私の言葉を受け止めてくれた返事。

「半年前にもね、血を吸ったの……亜月の、血を……こんな私じゃ、友達失格だよな……亜月の傍にいる資格、私には…
…ない」

俯くと、ぼたぼたと洪水のように涙が溢れてきた。

私たちは色んなものを流す。血と涙。色も形も違うけれど、きっと何処かで繋がっている。

一気に想いの丈を言い放って、肩で息をする私を亜月はそっと抱きしめた。

もう抵抗する力は残っていなかった。

囁くみたいに、歌うみたいに、彼女は告げた。

「琴理が何者かなんて、関係ないよ……吸血鬼でも、私の血を吸ってもさ……それでも琴理は、私の友達でしょ？　それだけで十分なもの」

空気に優しく溶けていく亜月の言葉は、しっかりと私の鼓膜を揺らす。

「だからね、傍にいてよ、琴理」

その言葉を聴いたら、また涙が出た。

嗚咽と共に、私の口に残っていた上城光の血が零れていく。

こんなに泣いたのは久しぶりだ。

亜月は優しく、強く私を抱きしめてくれている。

背中に回された腕から伝わる温度は、前に保健室に一緒に行った時のぬくもりに似ていた。

亜月の胸に顔を押し当てて、大声で泣いた。嬉しいのに、涙が止まらなかった。悲しい時以外でも、こうやって涙が出るものなのか、と少し不思議に思った。

上城さんの死と、亜月の優しさと、自分の未来。

色んなことが頭の中を駆け巡る。

こんな時、翼があつたらどんなに便利だろうか。亜月を連れて真っ赤な空を渡って、何処か遠い国で暮らすのだ。それはとても良い考えだったけれど、不可能ということもすぐに解った。私だってもう子供じゃない。そんなこと、できっこないと解っている。

翼の代わりに、この細い二本の足で生きていかなくてはいけないんだ。

それはきっと、人間も同じことなのだろう。

翼のない吸血鬼と、人間。

違うのは血を吸うことだけ。

なんだ、初めから私たちは似ていたんだ。

そうやって、吸血鬼と人間の境界線を曖昧にして生きていくのも悪くない。

亜月が傍にいる。いてくれる。それだけは確かだったから。

でも……。

そっと、思う。

でも、今だけは夢を見たい。

救急車の真っ赤なサイレンが現実を染め上げるまでの、短い時間で良いから。

幻想の中に、翼の生えた私と、必死に私の手に掴まる亜月の姿が見えた。楽しそうに、空を飛んでいる。

私の手は血に濡れてなんかなくて、綺麗だった。

それは幻想。

絶対に叶わない、私の淡い淡い夢。

やっぱり、私は「ことり」という自分の名前が嫌いだ。

血を吸う為の牙ならあるのに、私には空を飛ぶ為の翼なんてないから。

それに私は、小鳥じゃない。吸血鬼だ。

そして、亜月の友達でもある。

そうでしょう？

彼女たちに『暴食』了

色欲（1）

『色欲』

愛って何だろう。

誰かを大切に想う気持ち？

誰かと一緒にいたい気持ち？

誰かの全てを受け入れる覚悟？

それが愛なのだろうか。

形のないものは、目で見ることができない。触ることだって、当然できない。

心とか友情とか、それこそ愛なんてものは何処にあるのだろうか。

見えないし、触れない。

そんなあやふやな存在を信じるのは、きつととても難しい。

愛とか絆とか心とか。

目に見えないくせに、とても綺麗な言葉。

目に見えないからこそ、綺麗にしたい言葉。

きつと見えてしまったら、私たちの視線にやられて汚れてしまうのだ。形あるこの世界が、綺麗でないように。

思うに、そういったたくさん見えない何かは、自分の中にあるのではないか。見えなくても、触れなくても、感じることはできるから。上手く言葉にできなかったとしても、これだ、とびびつと感じる時がいつか来る。

きつと。

それらの内のひとつである愛というものに、私は最近気づいてしまった。

愛が何かは解らない。でも、この気持ちを表すのに一番ぴったりの言葉は愛なのだと思う。

開け放たれた窓から風が颯爽と吹いてくる。カーテンが生きているみたいに揺れる。ぼんやりと見上げた青空には、ふわふわした雲がひとつだけ浮かんでいた。

午後の気だるい空気が、授業中の教室に充満している。シャーペンの動く音と、先生の声が響く。

誰にも気づかれずに、あの人の横顔を盗み見る。真っ直ぐに黒板を見つめる視線が、真面目さを良く表している。

胸が高鳴る。心臓が恐ろしいくらいに速く動いて、今にも破裂して中から感情がとろりと溢れ出してきそうだ。

いつからこんな気持ちになったのだろう。

判らない。

解らない。

気がついた時には、もう遅かった。

頭の中があの人のもので一杯になっていて、もどかしい夜を何度もやり過ごした。

そんな夜に限って、空には月なんか昇っていなくて。真っ黒な空が大きな両手を広げていて。なんだか世界に自分だけ取り残された気分になって。身体に毛布を巻きつけて、空が白んでいくのをぼーっと眺めていた。

こんなこと、あの人は気づいていないだろう。素知らぬ顔で、おはよう、だなんて話しかけてくるのだから。

私をこんなにも悩ませているのに。こんなにも切なくさせているのに。

「茜、何ぼんやりしてるの？ もう放課後だよっ」

ぼんやりしていたら、北条桜に話しかけられた。セミロングの黒髪がさらりと揺れる。私の大事な友達。

「あ、桜ちゃん」

「あ、桜ちゃん、じゃないよ。また考えごと？」

まあ、うん、と要領を得ない返事をして、探りを入れられないようにする。私のこの感情は、周りの誰にも話せない。友達である桜ちゃんには尚更だ。

周りを見るとだいぶ人の数が減っている。時計を見ると帰りのSHRが終わって二十分も経っていた。急いで荷物を纏め、教室の入口で待っていた桜ちゃんのもとへ駆ける。

その途中で、机の中の教科書を丁寧に鞆に仕舞い込んでいる少女に声をかける。

「ま、また明日ねっ」

緊張で引きつってしまった。恥ずかしい。

「あ、うん……また明日」

それでも、私の言葉に軽く手を挙げて、いつも通りに返してくれる。顔を上げた時に揺れる黒い髪が、良い匂いをしていた。

二つの黒い瞳。可愛い鼻。丸い線を描く顎。白い頬は、少し桃色に染まっている。

上城光。

それが彼女の名前。私が好きになってしまった女の子。

この愛は一方通行。きっと実らない恋。

だって、私は女で上城さんも女だから。

でも。

でも、それでも良い。

今はこうして、互いにさよならの挨拶を交わせる仲であるだけで幸せなのだから。

昔から背が小さかった私は、大人に憧れていた。

早く大人になりたかった。

身長が伸びれば、きっと今見えている世界が変わる。世界が変われば、私は子供から大人になれる。そう信じていた。

それでも、背は一向に伸びなくて。中学校に上がったら伸びる、と信じていたのだけれど、未だに私は140cmの高い壁を越えられずにいる。

身長があと10cmだけ高かったら、私はきっと落ち着いた大人に近づけよう。

身長があと20cmだけ高かったら、私はきっと難しいことを考えられる大人に近づけよう。

もしかしたら、愛というものが何なのか解るのかも知れない。

解らないままで良いかも、と思う自分もいるのだけど。

愛とは何なのか。もしもその答えが解ってしまったら、なんとなく私はがっかりする気がするから。だから解らないままでも良い、とも思う。

「あんまり上城さんに話しかけない方が良いよ。周りの目もあるんだからさ」

廊下を歩いていると、桜ちゃんがこそっと耳打ちしてきた。

後ろから走ってきた男の子の集団に抜かされる。風が巻き起こって、私たちの髪を揺らす。危ないなあ、もう……。

彼女の言う通り、上城さんは如何してかあまり良い評判を聞かなかった。

直接的ないじめはないのだけれど、好ましく思わない人たちがいるみたいだった。だから、あまり仲が良さそうにするのは得策じゃない。

成本朝美という私の友達も、入学したての頃は仲良くしていたみたいだけど、最近ではそこまで仲良くは見えない。それでも、一応、一緒に帰ったりはしているみたいだった。

好きな人のことを悪く言われても、反論すらできない自分が厭で仕方ない。周りから私自身の悪い噂をされるのは厭だったし、上城さんに好意を寄せていると知られるのは死ぬより厭だったから。

だから、表面的には合わせるしかない。

まるで軍隊みたいだ、と思ったことがある。

自分の意見なんて持つてはいけない。ただただ周りの歩幅に合わせて、周りの歩調から一歩も踏み外すことなく、必死に何処かを目指している。

目指す場所はきっと、良い大学とか、良い会社とか、良い将来。心の奥底に渦巻くたくさんの想いを、誰にも言えずに隠して生きていく。

それが大人になる、ということなのだろうか。それとも、大人になればそういうことは簡単にできるようになるのだろうか。

まだ子供の私には解らないけれど。なんにせよ、ひどく厭な気分だった。

桜ちゃんと二人で歩く帰り道。あまり会話も弾まない。

心の中で彼女に謝った。

ごめん。

桜ちゃんとは途中で別れる。思えば、彼女とは帰る方向が一緒だったから仲良くなれたのかも知れない。たまたま帰り道に逢って、たまたま一緒に帰るようになったのだった。

彼女は努力家だ。これだ、と思うことにはとことん頑張って成果を上げる。この間の定期テストでは、彼女の苦手な理科で八十点を取ったら携帯電話を買って貰えるという約束を取り付けたらしく、授業に集中している姿を覚えている。そして、テストでは見事に九十二点という点数を叩き出した。

すごいな、と思う。私にはきっとできないから。

ちなみに私の理科の点数はその半分よりちょっとだけ少ないくらいで。どれだけ背伸びしたって、桜ちゃんと並ぶことなんてできない。

桜ちゃんのいない、一人きりの帰り道。いつもと同じ筈なのに、如何して今日はこんなにも心細いのだろう。不安が、後ろから駆け足で迫ってくるみたいで。少しだけ早歩きになる。

さっきまで彼女と並んで歩いていたのが、全て幻だったら。最近では、そう考えることも一度や二度ではない。全てが私の妄想で。全てが私の頭の中で完結してしまうのなら。この考えを、そうじゃない、と否定することはできても証明できない。

私には木下茜、という名前があるけれど、私が“私”であることの証明はどうすれば良いのだろう。彼女が——北条桜が——私の友達で、さっきまできちんと隣にいて、何も話さない私に気を揉んでいた、というのが真実であると誰が証明できるだろう。全部私の妄想だ、と言われたら信じてしまいそうだ。それくらい、私と桜ちゃんには距離があるように感じる。私より背の高い桜ちゃん。セミロングの綺麗な髪 of 桜ちゃん。私にはとうてい、追いつけない。

溜息と共に、とぼとぼ歩く。家まではもう少しだ。この大きな交差点を渡れば家に着いたも同然だ。

赤信号で止まり、ふと気づいた。交通量の多い交差点だから、今までにも何度か見かけた光景が、私の足元に転がっていた。

白色に、ところどころ灰色の混じった猫だった。ぽかんと開けた口に、虚空を見つめる瞳。猫は、茶色い内臓をお腹から出して横たわっている。

きっと、死んでいる。

可哀想だな。そう思った。でも、いったい何が可哀想なのだろう。無意識に湧き出てきたこの気持ちは、いったい何なのだろう。

死んでしまったことだろうか。車に轢かれたことだろうか。それとも、無残な姿を晒していることだろうか。

もしかすると、猫はちっとも悲しくないのかも知れない。人間が勝手に、可哀想だとか、悲しいだとか思うだけなのかも知れない。それはきっといつまでも解らないことだけれど、私の感じたこの悼みは本物だ。

私は屈みこんで手を伸ばし、開いたままの猫の両目をそっと閉じてあげた。おやすみ、と口の中で呟くと、喉の奥がカーツと痛くなるのを感じた。

小柄な猫の身体。大きな鉄の塊がそこにぶつかってきたら、ひとたまりもなかっただろう。この子は私と同じ。小さな身体を引きずって、もがいてもがいて、生きていた。それもこうしてあっさりと命を落とす。

私もいつかは、こうなるのかな。

私の小さな身体には、この世界は広すぎる。

信号の色が青に変わる。歩き出さなくてはいけない。もう一度猫の頭を撫でて、私は立ち上がった。自分の家に帰る為に、歩き出した。

色欲（2）

翌日の放課後は、図書室に向かった。木曜日は上城さんが図書室のカウンター当番の日なのだ。ここは学校の中で最も静謐な場所。歴史を積み重ねた書物の匂いが、私を優しく包み込む。

カウンター席には上城さんの姿があった。本を借りようとした上級生の対応をしている。図書室の本の裏にはバーコードが貼り付けてあって、それを専用の機械で読み取って、貸し借りの管理をする。お店のレジに置いてあるバーコードリーダーにそっくりなので、まるで上城さんが本屋さんの店員にでもなったみたいだ。小奇麗なエプロンを身に付けていたらさぞ様になるだろう。

いつまでも入り口に立っているわけにはいけないので、ふらふらとした足取りで本棚の間を漂う。どうしようか。特別読みたい本があるわけじゃない。

困ったな。そう思って、もう一度カウンターに視線をやる。上城さんの他に、もう一人女の子が座っている。当番はたいてい二人か三人なので、彼女も図書委員なのだろう。

よく見る顔だ、と思ったら毎週通いつめているのだから、当たり前だ。以前にも見かけたことがあった。大人しそうな子で、眼鏡が落ち着いた印象を強めている。胸元のネームプレートには『水鳴瞳』と書かれている。

水鳴さんか。大人しそうな子だ。長すぎない髪に、セルフレームの眼鏡をかけている。確か、三組の子、だったと思う。他のクラスとは授業も違うから、なかなか覚えられない。

水鳴さんは分厚い本をゆったりと開いて、一枚一枚丁寧にページを繰っている。カウンター当番といっても、貸出や返却といった業務がなければ、あとは自由だ。本を読んでも良いし、宿題をやっても良いのだろう。五月蠅くしなければ、特に問題もなさそうな委員会の仕事だ。

隣の上城さんがそっと顔を上げた。暗い夜空の映った水面みたいな瞳が、こちらを向いた。目が合って、どきっとした。

ふと、彼女と初めて話した時のことを思い出す。

あれは入学してすぐのことだ。多分、四月の中旬、自分たちの入る委員会が決まってすぐの頃。親が仕事で帰りが少し遅くなる、ということで家に帰っても鍵が開いていないから、学校で時間を潰すことにした。教室では男の子たちが箒を使って野球を始めたので、静かな場所を探していた。ちょうど、目に留まったのが図書室だった。中に入ると、当たり前だけど本がたくさんあった。昔から本を読むのが苦手だった私は、小学校時代も図書室には寄り付かなかったから、とても新鮮な光景だった。

色々な本があるな、と思ってぶらぶらと本棚の間を徘徊する。あっちに行つてはこっちに行つて。まるで、花の蜜を吸う蝶々みたいに。

ふと足を止めた棚は生き物コーナーだった。猫や犬についての本が並んでいる。私は犬よりも猫派だ。猫は小さくて可愛い。私の使っている筆箱も猫をデフォルメした形のものだ。

きちんと覚えていないけれど、「猫の気持ち分かる」みたいな題名だった。その本が気になって、手を伸ばした。けれど、届かない。チビな私には、どれだけ爪先立ちをしても、指先すら触れることはなかった。うーん、うーん、と唸りながら手を必死に伸ばしていると、横から控えめに話しかけられた。

「あ、あの……」

そこには肩口まで伸ばした黒い髪の女の子が立っていた。隣には脚立が置いてある。

「これ、あの……使ったほうが……」

尻すぼみの声は、今にもごめんなさいと謝るのではないか、と思うほどだった。ネームプレートに『上城光』と書いてあって初めて同じクラスの子だと解った。上城さんは普段から大人しいから、声を聞いたのは自己紹介以来だ。その時の声も、今みたいにか細いものだった。

よいしょ、という声と共に脚立を移動させる上城さん。そこにひよいと足をかけて、目当ての本を取ってくれた。

「はい、これ……」

「……あ、りがとう」

そう言ってこちらに本を差し出す彼女が、ひどく眩しく思えて、私は目を細めた。生返事をして受け取った本を、落

とさないように胸に抱く。

「あ、えっと、それじゃあ……」

上城さんがガタガタと音を立てて脚立を運んでいく。ほんのりと朱に染まった頬は、内気な性格の彼女の、精一杯の努力を物語っていた。

結局、その日は日が暮れるまで図書室の机で猫の本を読んでいた。思い返せば、図書室の中には私と上城さんしかいなかったのではないか。だから彼女は、困っている私を見捨てるわけにはいかなかったのではないか。私だったから助けてくれたのかは、今となってはもう解らない。あやふやな記憶の糸を手繰っても、答えは出ない。それでも、別に構わない。

これが私と上城さんの初めての出会いだ。会話というほどの会話をしていないけれど、私にとっては大切な思い出だ。

あれから半年以上が経った。未だに私と彼女の距離は縮まらない。

目が合った上城さんが、少しだけ微笑んだように見えた。その顔を直視できなくて、私は本棚の陰にそっと隠れた。

これが一年生の冬の出来事だ。それから時は流れていって、私は学校の授業に必死になってついていきながら、中学二年生になった。

身長もまったく伸びる気配がない。中学を卒業するまでに150cmになる、という目標は今のペースだと140cmになる、に変更しても良さそうぐらい。

毎日お腹が痛くなるくらいに牛乳を飲んでも、一向に伸びようとしらない私の身体。それはまるで、身体が変化を嫌っているみたいだった。私は早く大人になりたいのに。言うことを聞かない自分の身体が、嫌い。

私の通う市立泉ヶ丘中学校では、一年から二年に上がる時にクラス変えが行われる。その為、新しいクラスにはあまり知り合いがいなかった。

一年生の頃に仲良くしていた人たちとはばらばらになって、知っている人は桜ちゃんと白鳥慧子だけ。慧子ちゃんはなんだかいつもやる気がない女の子。ふにやふにやとして掴みどころがないのだ。

「全然知り合いなくて、なんか不安になっちゃうね」

桜ちゃんが心配そうな顔で呟いた。慧子ちゃんは余裕綽々としている。当然といえば当然の光景だ。そして、私はと言えば、上城さんと別々のクラスになってしまったことにかなりの速度で絶望していた。

「まあでも、このクラスで卒業までやっていくんだから、仲良くやっていくしかないよねー」

何気ない慧子の一言に、絶望する速度は倍に増した。

忘れていた。二年から三年に上がる時にはクラス変えはないのだった。

「そ、そうだよっ。仲良くしなきゃだね」

慌てて言い繕ってみたけれど、うまくいかなかった。なんかもう、溜息すら出ない。涙も出ないけれど。

上城さんのクラスには女の子の転校生がやってきたらしかった。名字が確か、上城さんと同じ読み方だった。漢字は忘れてしまった。

転校生というものは物珍しいけれど、わざわざ他のクラスまで見に行く気はなかった。

ただ、気になるのは名字が一緒の読み方ということは席が近いだろう、ということだ。廊下で一緒に歩いているのを、何度か見たことがある。二人が仲良さそうに笑っているのを見ると、胸の奥がちくりと痛んだ。

私の方があの転校生なんかよりも、多くの時間を上城さんと過ごしてきたのだ。

なのに、いきなりぽんと現われて、上城さんのことを何も知らないで、あんな風に笑って。

如何して？

私はこんなにも上城さんのことを愛しているのに。

まだ足りないの？

いったいどれだけ愛すれば良いの？

愛というものに上限はないのかも知れない。きっと私の愛はまだ不十分なんだ。もっともっと、愛が何かを解らなければいけない。

あの転校生は知っているのかな。愛とは何なのかを。
知っているのかな。

最近は桜ちゃんも何やら忙しいようで、一緒に帰る頻度が少なくなってきた。慧子ちゃんとは帰る方向が反対だったから、殆ど一人で帰ることが多かった。

去年同じクラスだったみんなは、今頃どうしているのだろう。特に同じグループにいた子たちは。

岡崎遙、成本朝美、万乗千百合、長谷川琴理、戸塚亜月。

別のクラスになると、わざわざ休み時間に逢いに行きでもしないと、滅多に話す機会はない。廊下ですれ違えばちょっとお喋りはするけど、クラスの子に呼ばれて去っていく姿を見ると、やはり寂しいものがあつた。

空を見上げると一羽のカラスが飛んでいた。ゆったりと羽ばたいて気持ち良さそうだ。カラスは猫と同じくらいの小さな身体でも、空を飛び、車に撥ねられることもない。

去年見た、交差点で死んでいた猫のことを思い出す。次の日にはもう、あの死骸は何処にもなくて、誰かが片付けてしまっていた。あの猫を轢いた本人もすでに忘れてしまっているだろう。あそこを通りがかる人も、きっと忘れてしまった。一匹の猫が、あの場所で死んだことを、もはや誰も覚えていない。私を除いては。

多分、私があの猫のことを忘れる時が来たら、その時本当の意味であの猫は死ぬのだ。誰にも思い出されず、存在しなかったことにされた時、初めて“死”というものが訪れるのではないか。

だから、私は少しでも長く憶えていようと思う。十字に交差した道を、お墓に見立てて、長く、長く、憶えていよう。そんな取り留めのないことを考えつつ、校門までの道を歩く。外の空気が少し涼しい。夏の前の、ひと時の涼しさだ。

色欲（3）

それから数日経ったある日、桜ちゃんが帰りのSHRにいなかったの心配だった。担任の白井先生に聞いても、解らなかった。それで良いのか、先生！ と心の中で怒鳴ってみたけど、先生は探してくる、と言って何処かへ行ってしまった。

桜ちゃんの行方も気になるけれど、学校の中がどうにもいつもと違う雰囲気だった。妙に浮き足立っているというか。なんとも言えない感じ。私だけ、息が詰まる。

廊下を歩いているだけで、その違和感が伝わってくる。いったい、なんだというのだろうか。

二組の担任の川嶋先生の声が教室から聞こえたと思うと、何人かの生徒がお説教を食らっていた。二組は上城さんのクラスだけれど、掃除の時間にでも何かあったのかな。その時、教室の後ろの扉から一人の女の子が飛び出してきた。肩口までの黒髪が揺れた。一瞬、上城さんかと思い、どきりとしたけれど、それはあの転校生だった。

何処かへ走っていく背中。それはとてもよく上城さんに似ていた。

如何してだろう。如何して私は、あの転校生に愛する上城さんの後ろ姿を重ねてしまったのだろう。

遠く廊下の端まで進む彼女を、追いかけてなければならない、と私の中の何かが告げていた。自然と私の足は動いた。

廊下にはまだちらほらと生徒が残っていて、十分な速度で走り抜けることなんてできない。それでも、懸命に足を前に出して、私は駆けた。

それほど長くない廊下を走りきった。端にあるのは階段だ。一段目を上ろうとした転校生の背中に向けて、大きな声で彼女の名前を呼んだ。

「カミシロさん！」

階段には珍しく誰もいなかったから、その声はなんだかひどく大きく聞こえた。振り返る彼女は、やはり何処か上城さんに似ている。肩まで伸ばしている髪形が似ているのかも知れない。

「如何して、私の名前を？」

戸惑った声の転校生。いきなり名前を呼ばれたのだから、当然だ。

「ああ、えっと……貴女のクラスの上城さんと同じ苗字だったから」

「光と、友達なんですか？」

下の名前。光。

私なんて、上城さんとはしか呼べなかったのに。

「……うん。去年、同じクラスだったから」

友達なのか、と訊かれて肯定するにはひどく勇気がいる。だって、その感情はすごく一方的なものだから。相手は何とも思っていないかも知れない。私が勝手に思っているだけなのかも知れないのだから。絆とか愛とかは、目に見えなくて一方的なもの。でも、相方から確かめ合った時には、目で見えるのかも知れない。

私の言葉を聞いた転校生は、焦った口調で、

「お願い、光を探して、多分、保健室にはいないの」

保健室？ どういうことだろうか。

「それって……」

転校生は上城さんを探しているのか。そう言えば、私も桜ちゃんを探している途中だったのを思い出す。

「早くしないと、もう何も思い出せないの。これ以上先のことは、私にも解らない……だから！」

切羽詰ったその声が、耳に痛い。

でも、それ以上に私の心の中が黒く染まっていくのを感じた。

このまま転校生と一緒に上城さんを探してしまつて良いのだろうか。上城さんを探すことが、この転校生の、上城さんへの、愛なのだろうか。

厭だ。それは、厭だ。

「厭……」

搾り出すように、言葉を紡ぐ。

「何言って――」

「厭なの！」

彼女の声を遮って叫んだ。

「私は去年、一年間、上城さんとおんなじクラスで！ 毎週、図書室で委員会の活動をするのを見てきて！」

私は何を言っているのだろうか。水面に岩が落下したみたいに、転校生の漆黒の瞳が揺らぐ。

「だから、私の方が……」

言葉が勝手に溢れ出す。

止まらない。

止められない。

止めたくない。

「私の方が、貴女なんかよりも上城さんのことをずっと知っているの」

「それが、どうしたんですか。今は光を……！」

胸がもやもやする。伝えられない想いと、伝えたくない想い。

でも、言わなくちゃ、はっきりと自分の声と言葉で。

「私は、上城さんのことが好きなの！ だから……だから、貴女なんかには、死んでも渡さないんだから！」

恥ずかしさで顔が爆発しそうだった。

本人に告白している訳でもないのに。きっと、上城さん本人に伝える時は、恥ずかしさで死んでしまうだろう。転校生は突然の私の暴露に、呆気に取られていた。

「私のこの気持ちは嘘なんかじゃない。私にはちゃんと、愛という気持ちがあるわ……上城さんが好きなの、だから……」

今までずうっと思っていたことが、言葉になって、空気に触れる。

愛って何だろうとか、愛は見えないのとか、色々と考えたけれど、きっとこの気持ちは愛なのだから。そうに違いないのだから。

誰にも嘘はつかない。私自身にも、嘘はつきたくない。

「ねえ、愛っていう感情が貴女にはあるの？ ……愛が何なのか、貴女には解るの？」

「……」

「ねえ、何とか言ってよ！ 愛が解らない貴女には、上城さんの隣にいる権利なんて――」

「――それは」

転校生の口が開く。びしっとガラスにひびが入るみたいだった。思わず、私は口を噤んでしまう。

転校生は、言葉を抿ぶように、ゆっくりと、だけどはっきりと、

「貴女のそれは、本当に愛なんですか？」

そう告げた。

一瞬、その言葉の意味が解らなかった。否定されたことだけは、解った。

転校生の夜のような瞳が、まっすぐに私を見つめる。

「な、何を言ってるのかな……私は、本当に」

「本当に愛しているんですか？」

何だ。

何で言葉が出ないのだろう。

如何して。

言わなくちゃ。

厭だ。厭だ厭だ。

この気持ちは愛に違いないのだ。違いない。違いない。愛だ。愛なのだ……。

愛の、筈だ。

そうに、違いないのに。

「貴女は本当に、光のことを愛しているの？」

転校生の言葉が鼓膜を揺らす度に、私の気持ちも揺らされる。ゆらゆらと、波間に浮かぶ海月みたいに。ただ、流さ

れるまま。

「貴女は光を愛する為に光を掴んだの？ それとも、誰かを愛する為に光を掴んだの？」

愛の為？

上城さんの為？

どっちだろう。愛が何なのかを知りたかっただけだったのだろうか。

目に見えないものを理解できれば、大人になれると思った。

誰かを愛することができれば、立派な大人になれると思った。

だから、私は……。

「私は……私の、この気持ちは、愛なんかじゃない、のかな……」

「それが解らないから、訊いているんです。貴女は愛ばかりが気になっているみたいだったから」

この気持ちはなんだったのだろう。

上城さんを見て、ひどくもどかしく、切なくなるのは、愛ではなかったのだろうか。愛だと思っていたこの気持ちは、何だったのだろうか。

私は自分自身に嘘をついていたのかも知れない。早く誰かを好きになって、大人になりたかっただけ。その為に、私はありもしない愛なんてものをでっち上げていたのだ。

愛は目に見えないから、確かめようがない。

だから、これだ、と思ったのだけれど、それは見間違いだったのだ。

「女の子同士、というのがありますが、もし貴女が本当に愛していないんだったら、光のことは諦めて下さい。これ以上、あの子を苦しめないで」

もはや自分の気持ちというものが解らなかった。心って何？

愛、友情、絆、信頼、喜び、悲しみ、怒り……。

感情というものは一体、何なのだろう。

私という存在は、たくさんのあやふやなものでできている。目で見える手とか足以外に、目に見えないぐちゃぐちゃした塊が纏わり付いている。

それが知りたくて、私は早く大人になりたかった。

否、逆だ。

大人になる為に、それを知りたかったのだ。その何か解らないものを理解すれば、大人になれると信じて。

目的と手段が、複雑にこんがらがっていた。全ては私の、子供のままでいたくない、という気持ちが原因だったのだ。

。

「……ごめん……私、もう少し考えてみるよ。この気持ちが何なのか」

私の言葉に、転校生は納得したように頷いた。それから一言。

「たとえそれが愛じゃなくたって、友達として傍にすることはできます。だから、安心して下さい」

心の底から切に願うような、そんな言葉だった。

それからすぐに、転校生は踵を返すと、階段を上っていった。上城さんを探している、と言っていた。彼女のそれは、愛なのだろうか。

愛なのかも。そんな風に自然と思えた。

私も桜ちゃんを探そう。たまには、一緒に帰りたい。

色欲（４）

校内を歩き回って、疲れ果てた時にはもう外は夕焼けに染まっていた。もう廊下を歩いている生徒もいない。結局、桜ちゃんは見つからなかった。諦めて教室に戻ろう、とすると、遠くで悲鳴が聞こえた。

何の騒ぎだろうか。

そう思って、辺りを見回す。校舎内はほぼ無人だ。どうやら外が騒がしい。

ひょいと廊下の窓から下を覗くと、校庭に人が集まっていくのが見えた。何かあったのかな。

唐突に桜ちゃんのことが心配になった。もしかして、上城さんがいなくなったのも、それに関係しているのだろうか。

急いで、昇降口までの階段を駆け下りる。もうへとへとの方の身体は、今にも倒れてしまいそうだ。あと数段で一階、というところで階段を踏み外してしまった。ろくに受身も取れずに床に転がった。身体を派手に打ちつける。すごく、痛い。膝を擦りむいたらしく、じんわりと血が滲んでいた。

私はこの小さな身体が嫌いだ。走ったらすぐ疲れてしまうし、階段から落ちただけで怪我をする。早く、大人になりたい。

よろよろと立ち上がって、外を目指す。今、立ち止まったら何もかも終わってしまうような、そんな気がして。

傷ついた身体を引きずるようにして校舎の外に出ると、やはり校庭の方から大勢の人の声がした。そちらへ向かおうとする私に、後ろから声がかかった。

「茜！ あんた、如何してここに！？」

「桜ちゃん！」

見知った顔。セミロングの黒髪が夕焼けに照らされて輝いている。

「探したんだよ、桜ちゃん！ って、それ……手……」

ふと、視線を落とすと彼女の手が赤く染まっていることに気がついた。

「大丈夫、私のじゃないから」

そう言って息をつく桜ちゃん。見れば、制服の肩のところが破けている。いったい、桜ちゃんに何があったのかは解らないけれど、今こうして私の前にいてくれることがすごく嬉しかった。

「ねえ、茜」

息を整えて桜ちゃんが口を開く。

「上城光のこと、どう思う？」

いきなり上城さんの名前が出てきて驚いた。どう思う、ってそれって……。

「ええっと、どう思うって、私と上城さんはただの、友達で、ええと、その……」

「友達！ 友達ね！」

何かをやり遂げたような表情の桜ちゃん。もう本当に訳が解らなくて。私は頭の上にたくさんのクエスチョンマークを浮かべる。

「それで、良かった。これで、きっと大丈夫……」

「もう、さっきから何の話？ それに、桜ちゃん、さっきまで何処行ってたの。ずーっと探してたのに」

ぶうたれる私に、おぎなりに相槌を打つ彼女に余計に腹が立った。でも、なんだかほっとして、笑ってしまった。

だから、桜ちゃんの言葉でそんなことが言われるとは、想像もつかなかった。

「聴いて、茜——」

——上城光は、死んだの。

上城さんが死んだ。その言葉を聴いても、不思議と涙は出なかった。

多分、心が理解していない所為だ。

私はまだ心の整理もついていないのに。彼女に想いを伝えてすらいなかったのに。そもそもその想いが何なのかさえ、私には解らなかったのに。

頭の中がたくさんのことでいっぱいになって、子供の私にはもう如何して良いかなんて解らなかった。

葬儀の時になって、上城さんの遺影を見た瞬間に涙が止めどなく溢れ出た。

ぼろぼろと頬を流れて、喪服の黒い鎧を濡らした。喪服が夜のように黒いのは、きっと汚れが目立たないようにする為だ。着る人の流す涙で汚れても、周りにばれずに済むように黒いのだ。

もし、上城さんに私の気持ちを伝えていれば、彼女は死ななかったのかも知れない。そんなのは、勝手な思い上がりかも知れないけれど。それでも、心の中は後悔で一杯だった。

もう元には戻らない。私の愛は、彼女が飛び降りた瞬間に、何処かへ飛んで行ってしまった。

今度は、私は誰を愛するのだろうか。

誰かを愛するのだろうか。

解らない。

結局、愛というものが何なのか、解らないままだし。案外、自分で気がついていないだけで、もう解っているのかも知れないな、とぼんやりと思った。

葬儀の帰りに泣き腫らした目で、桜ちゃんを見つけた。桜ちゃんも目にうっすらと涙を溜めていた。黒い喪服のお陰で、彼女がどれ程の涙を流したのかは解らないけれど。

無言でハンカチを差し出される。

白くて綺麗なハンカチ。それは彼女の黒一色の服に、とても良く映えた。

「顔、すごいことになってるよ。これで拭きなよ」

「有難う」

その優しさがすごく嬉しかった。

いつでも傍にいてくれた桜ちゃん。あの時、校舎内を一人で走り回った時、本当はすごく怖かった。桜ちゃんが何処か遠くへ行ってしまうのではないかとそんなことばかり考えていた。だって、私には桜ちゃんの隣に並べないから。こんな小さな私では。

そう思っていたら、桜ちゃんが一步、私に近づいて、二人して涙を拭きながら空を眺める格好になった。

近すぎて、気がつかないものもある。遠くに憧れてばかりいると尚更だ。私は自分の先にある、遠すぎる未来ばかり追っていた。だから、遠く of ものは全て手の届かないものだと思っていた。でも、違った。大切なものは、こんなにもすぐ近くにあった。遠くにあると思っていたのに、いつのまにか、私はそこに辿り着いていたのだ。

私にとって桜ちゃんは……。

「茜は、死なないでね」

桜ちゃんが雲ひとつない空を見つめて言った。世界の中心で歌うみたいに、そう言った。

「善処するよ」

私も空を見上げて、呟いた。

今はこれで良い。

互いに少し真面目に、そして少しふざけ合いながら、言葉を交わせる仲であるだけで良いのだ。

「ねえ、桜ちゃん」

上を向いていた首を戻すと、桜ちゃんが私を見つめる。

「何？」

呼んだのは良いけれど、そのあとが続かない。

風が吹いて、沈黙を吹き飛ばしてくれたら良いのに。

そう思ったけれど、冷たい風は地面に落ちた木の葉だけを舞い上げた。それと一緒に、ついでのように私たちの涙も吹き上げていった。

涙はもう綺麗に拭き取られて、空に舞い上がった。いつか、私たちの涙が雨となって降って来るのかも知れない。その時にまた、私は上城さんのことを思い出すのだろう。

誰かが憶えてくれている限り、死なない。あの交差点の猫もそうだ。まだ、私が覚えている。私の中で生きている。

だから、安心して上城さん。私が、憶えておくから。

きょとんとした桜ちゃんに向かって、私は空中を舞う木の葉と水滴の中で、歌うように囁いた。

「ううん、何でもない」

変なの、と呟く桜ちゃん。

私はまだ自分の気持ちが無なのかわからない。

もしかしたら、今度こそ、愛なのかも知れない。

今回はちゃんと確かめよう。きっと時間はたくさんある筈だから。

桜ちゃんが傍にいてくれる限り、考え続けよう。

だから、今はこれで良い。

今はこれで良いんだよ、きっと。

「帰ろう、桜ちゃん」

彼女たちに『色欲』 了

傲慢（1）

『傲慢』

幼い頃から、私の周りにはたくさんのものがあつた。

庭師が手入れをする広い西洋庭園。季節ごとの花を咲かせる大きな花壇や、朝日にきらきら光る水面を生む噴水。自分の部屋には天蓋付きのベッド。何着もの洋服の入った大きなクローゼット。ふわふわと毛の長い絨毯。一周するのに歩いて三十分以上かかる豪邸は、私にとっては必要以上に大きかった。数十人もの使用人がいて、身の回りのことは何でもやってくれる。

挙げればきりが無い。私は所謂、お嬢様だったのだ。

屋敷の中にはいつもたくさんの使用人がいた。だから決して寂しくはなかったけれど、いつもいない両親に逢いたいと思ったことは、星の数なんかよりもずっと多い。

お金をたくさん貰っていたし、資産家の娘ということで将来も約束されているようなものだった。友達にそのことを話すと、馬鹿みたいに羨ましがられる。

全く鬱陶しい。

勝手に向けられる羨望の眼差しが、私にとっては鬱陶しい以外の何物でもなかった。

お金も、将来もある。勝手にそう言われる。お金も将来も、確かにあるのかも知れないけれど……。

でも、私には『家族』が足りなかった。

お金をいくら集めても買えないものだってある。

それが『家族』だったのだ。

今日、父が死んだ。給食を準備している時に、父に持たされた携帯電話に連絡があつた。

父は仕事柄いつも忙しくて基本的に家にはいなかったから、最後に逢ったのがいつだったかすぐには思い出せなかった。彼の好きな食べ物すら、私は知らない。低い声できっちりとスーツを着こなしている印象しか、彼にはない。

交通事故だったらいい。父の乗っていた車が、横転したトラックの下敷きになったのだとか。それはまるでニュースの中の出来事みたいで、実感が全く湧かない。電話の向こうから聞こえてくる使用人の声が、まるでテレビのアナウンサーの声みたいだったから。ただただ原稿を読み上げるような無機質な声が、私の鼓膜を事務的に揺らした。

父がいなくなったことで、私はあの広い家で本当に独りぼっちになる。今の母親は父の再婚相手だから、私の本当の母親ではない。唯一血の繋がっていた父が死んでしまった今、私の家族は本当になくなったのだ。

それにしても、如何して今日なのだろう。如何して今日でなくてはいけなかったのだろう。

勝手に天国へと旅立った父。別れの挨拶も言わずに。

授業参観、来てくれる、って言っていたのに……。

自分の父親が死んだというのに、不謹慎だろうか。彼の死に嘆き苦しみ、慟哭しなければならないのだろうか。頭では理解していても、心の何処かが故障してしまったみたいだった。

今日は授業参観日。父の死よりも、そのことばかりが頭の中を巡る。それくらい楽しみにしていたのだ。久しぶりに逢える、ということもあつたけれど、父が初めて授業参観に来てくれる日だったのだ……。

昨夜は緊張と期待で上手く眠れなかった。

「ねえ、わたくし、先生の質問にちゃんと答えられるかしら」

「大丈夫ですよ、お嬢様ならきっとできますわ」

「でも、お父様がいらっしゃるのよ。ああ、もし的外れな回答をしてしまったら、どうしましょうか」

「まあまあ、今日はもう夜も遅いですから」

などと使用人たちに促されて寝室にこもったのだけれど、結局、そのあとも一人で悶々としていて、睡眠不足だ。

授業で先生に指された時に、きちんと答えられるだろうか。多くの保護者の前で恥をかくようなことはしないだろうか。そんなことばかりが頭の中を巡って、幾ら羊を数えようとしても、不安が邪魔するので羊は数えられる前に逃げ

ていったのだった。

結局、その日は学校を早退することにした。使用人の運転する車が校門の前にやってきて、私はそれに乗り込んだ。病院に行かなくてはならない。その時、父の顔を見たくない、と初めて思った。死んでしまった父。もう、二度と逢えない。記憶の中で手を繋いで貰った回数を数えてみても、片手で足りてしまう。

あの人は本当に私の父親だったのだろうか。眠気の所為か、上手く働かない脳みそでそんなことを思った。

「千百合さん。こちらが貴女の新しいお義父さんよ」

そんなことを義母から聞かされた時に、たった今紹介された、目の前の男を呆気にとられて見つめた。それしかできなかった。痩身だけれど、不健康なイメージは受けない、気の良さそうな男の人だった。耳にかかるくらいに伸ばした黒髪が優しげに揺れる。若そうに見えたけれど、顔にできた皺を見ると、大人なのだと実感が沸いた。

にこやかに、こんにちは、と挨拶をされた。

これが、私の……。

「ほら、挨拶なさいな、千百合さん」

義母は私のことを千百合さんと呼ぶ。その呼び方が気に食わなかった。こちらを窺うような、何かを畏れているような呼び方。“さん”をつけると丁寧で、相手を思いやっているみたいに聞こえるけれど、なんだか距離が遠い気がする。親子だったら、千百合と呼び捨てで読んで欲しい。

今はもうこの世界にはいない人から貰った、私だけの名前をはっきりと、堂々と、呼んで欲しいんだよ。

結局その時、私はお義父さんに何と言ったのかは覚えていない。ただ、ぼそぼそと曖昧に呟くような言い方になってしまったに違いない。

これは父が死んで二ヶ月が経った頃のことだ。

私は義母に、心の中で問いかけた。

如何して？

貴女は父を愛していなかったの？

如何して、すぐに違う男の人を好きになれるの？

私はまだ子供だから解らない。ろくに恋なんてものをしたことはない。

でも、それでも解る。父を愛する気持ちは、義母も一緒だと思っていたのに。

新しい父親と笑い合う義母が、ひどく憎かった。

午後の授業は、ついうとうとしてしまう。まどろんだ意識を現実に戻すと、六時間目がまだ二十分も残っていることに気づいた。思うに、午後の一番眠い時間に数学の授業を入れてしまう時間割に問題がある。給食を胃の中で消化するのに忙しい身体が、脳みそまで使いたくない、と必死に叫んでいる。欠伸をする口元を左手で押さえて隠す。古い記憶が瞼の裏にこびりついている。あれは小学校の頃の出来事だ。今となっては思い出話だけれど、当時は辛かった。父の死と、義母の態度。うんざりだった。

それから半年が経ち、私は中学校に入学した。小学校と中学校では違うことが多すぎて、ついてけるか心配だったけれど、意外と上手くいっていた。

友達も何人かできた。私の大切な友達。

綺麗な顔立ちの成本朝美。

人当たりの良い岡崎遥。

いつでも冷静な戸塚亜月。

明るくて賑やかな北条桜。

控えめで優しい長谷川琴理。

背が低く可愛い木下茜。

みんな、とても良くしてくれる。

小学校からのつきあいの白鳥慧子とは、一年生の時は同じクラスだった。彼女はやる気というものを何処かに落として

きてしまったかのように、いつもだらけきっている。昔はもっと勉強や運動に熱心だった筈なのだけれど。何処かで頭のネジが緩んでしまったのかも知れない。サボることに対して楽しみを見出しているのでは、と疑うほどやる気がなかった。

周りからお嬢様扱いされていた私は、中学校でこんなにも友達ができるとは思っていなかったから、驚きと共に飛び上がるほど嬉しかった。学校が楽しかった。家にいると息が詰まる。血の繋がらない義母と義父。ひとつのテーブルに座って夕飯を食べている時、私たちは如何して一緒にご飯を食べているのだろうか、と疑問に思ったこともある。傍から見たら、私たちの食卓はどういうふうに見えているのだろうか。滑稽な気がするの、私だけなのかな。

そういった事情で、一秒でも長く学校にいたかった私は、それこそ毎日の授業も真面目に取り組んだし、委員会活動にも励んだ。

段々と周りのみんなの様子がおかしくなり出したのは、中学一年も半分が過ぎようとした頃だった。何か隠し事をされているような、違和感。全て私がそう感じるだけなのかも知れないのだけれど。

一見すると普段通りなのだ。でも、注意深く観察していると些細なものまで見えてくる。

何だろう。一体、みんな何を隠しているというのだろうか。悩み事があるのなら、相談してくれても良いのに。みんな自分だけで抱え込もうとしているみたいで。それが私を不愉快にさせる。

如何してなのだろう。何でも良いから話して欲しかった。そうしたら、力になれるかも知れないのに。

ちょうどその頃、同じクラスの上城光という女の子がクラスで浮いているということにも気がついた。周りの態度が妙によそよそしいのだ。それでも、私に何かできるか、と言われれば素直に白旗を振ることしかできない。

誰かを助けたい。友達を助けたい。あまり話したことはないけれど、あの上城という少女のことも。

でも、私には何もない。あるのはお金。そんなもの、何の役に立つと言うのだろうか。百万円を上げるから、みんな元気になってくれ、とでも言えば良いのだろうか。それで満足するのは私一人だけだ。元気になった振りをするみんなを見て、ああ良かった、と安堵するのは私だけだ。そんなの、望んでなんかいない。

私の将来はきっと有望で、何処かの大きな会社の社長の息子とでも結婚させられるのかも知れない。それはもしかしたら素敵な将来なのだろう。でも、すぐ先の未来に私は何もできない。何もできない私が少し先の未来へと続いていく。遠い将来のことよりも、私には今この瞬間に困っている人たちに何かできないか、と考えた。

でも、みんな何も話してはくれない。誰も自分勝手だ。自分の問題は自分の問題。身勝手にいじめる人間。身勝手に見て見ぬ振りをする人間。

みんな、みんな自分勝手に我が儘なのだ。

これは去年の記憶。眠気の中で瞼の裏側に蘇っては消えていく。

黒板を走るチョークの音がまた睡魔を誘き寄せる。周りをちらと見渡すと、眠りに落ちそうな生徒も少なくない。いつもなら騒がしい男子も、今は静かに先生の話の聴いている。半分は寝そうになっているのだけれど。

視線をさらに後ろへ一瞬だけ巡らす。教室の後ろにはおめかしした大人たちが立っている。今日は授業参観日なのだ。それにしても六時間目という一番眠い時間に保護者を呼ぶだなんて。眠気と保護者に板ばさみにされた私たちにできることは、必死に耐えるということだけだ。どちらにせよ、私の親は来てはいないけれど。

ばれないように溜息をつく。父の死から三年が経った。父が来る筈だった授業参観。それ以降も、授業参観なんてものに義母も義父も来ることはなかった。どちらも仕事が忙しい。彼らは家にいる時間が増えて、夜になれば帰ってくるけれど、平日の午後に学校に来るだなんて、夢のまた夢だ。

三年。私はあれからどれだけ成長しただろうか。大人になりたくて伸ばした髪はやっと腰までの長さになった。そんなことで喜ぶなんて子供っぽい、と慧子に言われた時は、ついむきになって反論したけれど、冷静になってみるとなるほどそうだな、とってしまった。

人はいつ大人になるのだろうか。法律の上では、成年は二十歳だ。お酒も煙草も二十歳からだ。だったら、私がこうして髪を伸ばして精一杯、背伸びしているのは無駄な行為なのだろうか。時間が等しく子供たちを大人に変えてくれるというのなら、早く大人になりたいと思っても、それは不可能なことだ。

早く終わらないだろうか。時計の針をじっと眺めてみても、秒針のない時計はまるで動きを止めてしまったかのようだ。時間が止まれば良い。そうすれば何も煩わしいことなんてない。そんなのは無理だと解っている。

でも、もしそれができたら……。過去から未来へ進む時間を捻じ曲げてしまうことが、できたとしたら。それこそ、無茶苦茶な話だ。無理だ、と解るのだから少しは大人に近づいているのかも知れない。そんなことを思った。

傲慢（2）

「万乗さん、今年もよろしくね」

澄んだ声でそう言って、草巻先輩は私に微笑んだ。三年生の草巻桃片先輩は、三年連続で美化委員会に入っていて、今年はずいぶん委員長を務めることになった。背中までの長い髪を、先端でひとつに纏めている。ぷっくりした頬が愛らしい先輩だ。おっとりした性格だけど、掃除に関してはとても熱心で、少しの手抜きも許さないといった一面もある。

授業参観から数日たったある日、放課後に今年度最初の委員会活動があった。

「こちらこそよろしくお願いします」

私も美化委員会は二年目。掃除は好きだ。家では使用人たちが全てやってしまうから、小学校に上がるまで掃除なんてしたことがなかった。雑巾を初めて絞った時は、指が痛くて水がぼたぼた垂れるような始末だったけれど、掃除は楽しい。綺麗になっていく様子を見るのは、自分自身も綺麗になっていくような錯覚を覚える。だから自分の入る委員会を決める時、美化委員会しかないと思った。あまり人気のない委員会なので、唯一私だけは立候補で美化委員会に決まった。嬉しかった。

「また美化委員になるなんて、万乗さんもお掃除が好きな人なの？」

草巻先輩は不思議そうに首を傾げた。

「先輩もお好きなのですか？」

探るような微妙なやり取りのあとに、先輩と二人して笑った。美化委員会に入るのは二種類の間人だ。他にやりたい委員会があったけれど抽選に漏れてしまった人と、本当に掃除が好きな人のふたつだ。どうやら私たちは後者らしい。

「モモ」

それはまるで鈴の音が鳴るようにも聞こえた。冷たく響く声だった。

振り返ると、そこにいたのは背の高い少女だ。いや、制服を着ているから少女と言えるけれど、だいぶ大人びた印象を受ける。長い黒髪がさらさら揺れる。私も身長は高いほうだけれど、彼女の方が少しだけ高い。その人は分厚い本を重ねて持っていた。図鑑か何かだろうか。

「小夜子、重そうだね。運ぼうか」

「大丈夫よ。この子たちも手伝ってくれているし」

小夜子と呼ばれた少女は、さらっと答えた。ネームプレートには『倉木小夜子』と書かれている。上履きの色を見ると、どうやら三年生らしい。

倉木先輩の後ろには上城さんと、もうひとり眼鏡をかけた女の子の姿があった。どちらも重そうな本を抱えている。二年に進級してクラス変えを行ってから、上城さんとの接点なんて完全になくなっていたので、逢うのはとても久しぶりだ。

「先生が持っていけて。随分と乱暴よね。女の子にこんな重いものを運ばせるだなんて」

歌うように倉木先輩が言う。本当にそう思ってなさそうな口調で。

「図書室に置くの？」

「司書室ね、きっと。貸し出し用ではないみたい」

完全に雑用だ。上城さんがいるということは、図書委員会なのだろう。

「本当に手伝わなくて大丈夫？ 委員会始まるまで、まだ少し時間あるから運べるよ」

草巻先輩はそう言うと、倉木先輩の持っていた本の山を、半分だけさっと取り上げてしまった。

「モモったら、本当に良いのに」

申し訳なさそうな倉木先輩に、草巻先輩は屈託なく笑って、

「良いの良いの、困ってる時はお互い様なのです」

二人の先輩は仲が良いらしい。そのままですたと歩き去ってしまう。その後ろを眼鏡の女の子が慌てて追いかける。本が重いから、うまく走れないようだったけれど。

廊下に残されたのは、私と上城さんだけ。辺りは静かだ。みんなはそれぞれの委員会の場所へと向かったのだろう。

上城さんに視線をやる。肩までの髪が、歩くたびに右と左に交互に揺れた。

先輩たちの今のやり取りを思い出す。片方は「手伝いたい」と言い、片方は「手伝わなくて良い」と言う。私にはそれが、どうも自分勝手なように思えてしまう。二人の意見は、まったくの逆だ。永遠に交わらない平行線。自分の考えを押し付ける行為に他ならないのでないか。

重い本を懸命に運ぶ上城さんに、私はなんと声をかけたら良いのだろう。

「あの」

何も考えが浮かばないまま、声だけが出てしまう。どうしよう。

「万乗さん……？」

「ええ、そうよ」

「あ、えっと……お久しぶり、です」

去年、同じクラスだった時、上城さんとは殆ど会話をしていない。声を聞くのも随分と久々な気がした。

「手伝いましょうか」

何故だか言ってみたら、案外すんなり言うことができた。ただ、上城さんは困惑している。

「い、良いよ。大丈夫だよ。もうすぐ委員会始まっちゃうし……重いし……一人で、ほんと大丈夫だから」

最後の方は尻すぼみになってしまっていて、なんと言っているのかよく聞こえなかったけれど、手伝わなくて良い、ということらしい。こちらが親切に言っているのに、如何して断るのだろうか。草巻先輩たちは荷物を分けて持っていったではないか。

結局、この子も一緒なのだろうか。みんな、自分勝手。こちらの気持ちをちっとも知ろうともしないではないか。

「悪いよ、そんなの……」

必死に言い訳を探すように、上城さんが呟く。その声だけはしっかりと聞こえた。

「悪いと思うのなら、私に荷物を持たせて下さい」

「それは、だめ」

頑なに首を横に振る上城さん。肩までの黒髪が首の傘を開くように円を描く。

「如何して……？」

「……え？」

「如何して、断るのですか……わたくしが、親切に持つと言っているのに」

何故、私の気持ちを踏みにじるのだろう。

「それは、その……」

彼女は本当に言葉を探しているのだろう。自分の中にある言葉を組み合わせて、自分の想いを相手に伝える為に。だから、こんなにも話をするのに時間がかかるのかも知れない。それだって自分勝手な行為に思えてしまう。

沈黙を破り、上城さんが言葉を吐き出す。

「万乗さんに、迷惑、かけたくないから……」

目が泳いでいて、前髪をいじる上城さんはなかなか落ち着かない。迷惑をかけたくない、と彼女はか細い声で言った。それはどういうことだろう。私には解らない。

「えと、だって、これ重いし、万乗さんは図書委員じゃないから持つ必要はないの。だから、その……」

「そんなの、勝手じゃないですか……わたくしの気持ちを蔑ろにして」

「それは違うよ」

私の言葉をぴしゃっと遮って、はっきりとした口調で上城さんが言う。

「だって……万乗さんの手伝いを断ったのは、万乗さんのことを考えてのこと、だから……」

私のことを考えてのこと？ 嘘ばっかり。私のことを一番に考えるのなら、私の申し出を受け入れるべきではないか。結局、この子も同じなのか。暗い思いが心を染め上げる。それじゃ、と言って急ぎ足で私の前を通り過ぎる上城さんを、私はただただ見送るしかなかった。

傲慢（3）

翌日の帰り、慧子とたまたま一緒に帰ることになった。昨日は委員会で慧子と逢った。一緒の美化委員会になれて、なんだか嬉しかった。面倒くさがりの彼女が、美化委員会になるだなんて、きっと他の委員会に入れずにしぶしぶだったのだろう。その光景がすぐに想像ついて思わず苦笑する。

「どーしたの、お嬢様」

時折、慧子は私のことをからかってお嬢様、と呼ぶ。私はあまりその呼び名が好きではないから、むっとして答える。「貴女が美化委員になるだなんて、おかしいな、と思って」

いつもは学校までの送り迎えに、家の真っ黒なりムジンがやってくる。それはまるで私を閉じ込めて逃がさない棺みたいで。音もなく校門の前にすっと止まる。

中学校に上がって最初のうち、私は自転車で通っていた。それは入学のお祝いに義父から買い与えられた、真っ黒な自転車だった。とても高級な代物で、十年乗っても壊れることのない、素晴らしいものなのだ、と義父は得意げに言っていた。私はあまりその自転車が好きになれなかった。ギアがついていないので、ペダルを漕ぐのにひどく体力がいるし、何より見た目が無骨で厭だった。

こんなの、男の子が乗るみたい。そう思ったけれど、口をついて出たのは買ってもらったことに対する感謝だけだった。その嘘で塗り固められた言葉は、きっとこの自転車みたいに真っ黒なのだろうな、とぼんやり思った。

黒という色が嘘の色だとすれば、この世界は嘘ばかりだ。父の死体が納められた棺、私の長い髪の毛、家の車。どれが本当でどれが嘘なのか、もはや私には解らない。

空には一羽のカラスがぼつんと飛んでいて、お前も嘘でできているの？ と心の中で尋ねた。

ともかく私は入学早々に、黒くて大きな女の子らしくない自転車に乗るのをやめた。それを知った義父は、「最近は何事だからなあ。正直、自転車で毎日登校するのは心配だったんだ」

そう言って、仕事へと出かけていった。皺のない真っ黒なスーツに身を包んだ背中を、私用人の作った朝ご飯を食べながら見送った。

それからというもの、毎日のように漆黒の車体が校門前に止まる光景が日常となった。少しだけ私は有名になった。別にそれは構わないのだけれど、周囲の勝手な羨望が鬱陶しかった。

そういった諸々の事情があって、私は時折、家までの帰り道を歩いて帰るようにしている。朝は送ってもらうけれど、帰りは友達と帰るから、と嘘をついた。たまには一人になりたい。もともとたいした距離ではないのだ。

そんな昔のことを思い出して、ついさっきのこともついでのように頭に蘇る。昇降口でぼったり出くわした慧子は少し雰囲気違って見えた。何だろうか。

夕暮れにはまだ早いけれど、少し日が傾いでいる。

「ちーちゃんと帰るのって、久しぶりだねえ」

のん気にそう言って、慧子はふわぁ、と盛大に欠伸をした。それきり、二人とも無言で歩いていたらけれど、「最近、みなさんの様子がおかしいとは思いませんか」

気づくとそんな質問をしていた。何を言っているのだろう、私は。いつも眠たそうにしている慧子に、そんな話をしても一蹴されて終わりそうだ。

「うーん……それ、実は私も思ってた」

然し、予想に反して彼女はそう言った。嘘をついているようには思えなかった。だいたい、いつも面倒事には絶対に首を突っ込まない慧子が、わざわざこんな話に食いついてくる筈がないのだから。

「そうですか……具体的に、わたくしは皆さんの為に如何したら良いのでしょうか」

いつもはふざけ合っている仲だけに、真面目な話をするのが照れくさい。遠くに沈もうとしている夕日が、なんだか綺麗だった。

私たちは歩みを止めずに、ぐんぐんと進んだ。

慧子は黙ったままだ。

「それはやっぱりさ、直接本人に訊くしかないよ。考えたって解らないことはあるもんだよ、お嬢様」

沈黙のあと、慧子がへらへらと笑いながらそう言った。人の気も知らないで。

「では、手始めに慧子の最近の様子について伺いたいのですが」

「私？」

「そうです。慧子も最近、何かを隠しているように見えます。例えば、美化委員会に入るとか」

実際、慧子様子はここ最近、少しだけおかしかった。それは本当に僅かな変化だったけれど。何か周りが気になっているような。普段から周りのことなどお構いなしにだらけ切っている彼女にしては珍しいことだった。

「そ、それは……」

一瞬口ごもる慧子だったが、すぐに真剣な表情は一転して緩んだ笑顔になった。

「それは乙女の秘密、ということで」

まただ。

またそうやって、真実を隠す。

身勝手な振る舞いが、私をどんどん憂鬱にさせていく。

「如何してですか……」

「……ん？」

気がついたら言葉を紡いでいた。駄目だ。止まらない。いつもならこんなのやめたいと心のブレーキが働くのに。

「如何して……みんな、自分勝手です！　そうやって周りのことなんかお構いなしに、自分だけで背負い込んで！」

当惑した慧子の瞳が揺れる。夜が液化したらあんな瞳になるんだろうな、と心の何処か冷静な部分がひっそりと思った。

「……それは」

「言い訳は結構です！　どうせみんな――」

その時、携帯電話のけたたましい音が鳴り響いた。マナーモードにするのを忘れていたらしい。一日中鳴らなかったのは幸いだった。使用人からの電話だった。

慧子のことは気になるけれど、仕方がないので電話に出る。

「……はい、もしもし」

少し不機嫌そうな声でそう告げると、

「千百合お嬢様！」

何よ、騒々しい、という私の言葉は、受話器越しに響く大声に掻き消された。

「今は何処にいらっしゃいますでしょうか。これから、お嬢様をお連れして病院に向かいます」

――お義母様が倒れました。

使用人の声。何処までも無機質で抑揚のない、電気信号で変換された声が、私の鼓膜を容赦なく叩いた。

まただ。

また自分勝手に。

父は勝手に天国に向かった。

貴女もなの、お義母さん……？

貴女も勝手に……。

傲慢（4）

何も考えられず、気がつくと私は病院にいた。私の乗るリムジンが何処を通過してここまでやってきたのかを、思い出そうと思ってもできなかった。辺りはすっかり暗く、初夏の夜の匂いがした。

病室に着くと、目の前には元気そうな母親の顔があった。最後に逢ったのはいつだったろうか。いつも家にいない義母の顔を、病室で見ることになるうとは思ひもしなかった。

「ごめんね、心配かけて」

いつもと余り変わりのない義母の様子に安心した。睡眠不足からくる貧血だったようで、使用人たちの取り越し苦労だったらしい。それを聞いて肩の力が抜けた。

その時、肩に何かが触れた。それは義父の手だった。白くて繊細な、男の人の手とは思えないくらいに綺麗な手。「貴方も、ごめんなさい」

義母が義父に謝る。ひどく薄っぺらい光景。全てが書き割りに見えてしまう。

病室にいる三人は、みんな血が繋がってなんかいない。それがなんだか可笑しかった。

義母が私に話がある、と言ったので義父は病室から出て行った。少し名残惜しそうだったけれど、女同士の大事な話、とあれば退出せざるを得ない。

「それで、お話とは何でしょうか？」

ベッド脇にある椅子に腰掛けて、私は尋ねた。今さら話すことなんかない。もっと義父と仲良くしなさい、だとか、学校の友達とは仲良くやっているの、なんて訊かれたら本当に目の前の女性を憎みそうだ。

「貴女にね、謝らないといけなことがあるの」

「倒れたことなら、さっき謝罪されましたが」

「そうじゃないの」

義母の声が、真っ白の病室にこだまする。チクタクという時計の針が奏でる音が、心臓の音みたいに聞こえた。いつかあの時計が電池切れで止まるみたいに、人間の心臓も動きを止める。病院にいと不思議とそんなことばかり頭を巡る。病院はそういう場所だ。人の生と死を敏感に感じ取れる。

黙ったままの私に、義母は言う。

「貴女のお義父さんのことよ」

やはり、仲良くしなさいと言われるのだろうか。大人は勝手だ。子供の気持ちなんて考えてはくれない。それも当然のことか。私はこの人の子供ではないのだから。そんなことを考えるとどんどんと気分が沈んでいく。

「本当はね、結婚する気はなかったのよ」

義母のその言葉に耳を疑った。

嘘……。いや恐らく、嘘ではないだろう。では、本当に……？

「貴女、前のお父さんが亡くなってから塞ぎ込んでいたでしょう……お母さんね、貴女に何かしてあげたくて、でも何もできなくて……」

義母は両目に一杯の涙を溜めていた。順番待ちの涙が急かしているのが解る。

「何をすれば貴女が前みたいに笑ってくれるのか、解らなくて……そんな時に今のお義父さんに出逢ってね……また家族三人が揃えば、もしかしたら貴女は元通りになるんじゃないかって、私は思った」

目の前で言葉を紡ぐ彼女が、まるで遠い国の絵本でも朗読するみたいで、いまいち実感が沸かない。でも、紛れもなくこの話の“貴女”は私で。昔に読んだ絵本の中のことでないのだった。

目も耳も、義母の声に注目していた。

「でも、やっぱり駄目だったみたいね……だから、謝ろうと思った……ごめんね、千百合さん」

そう言うと、彼女は深々と頭を下げた。黒い髪が、清潔な白いシーツに垂れて黒い川を生み出した。こうやって地球もできたのかも知れない。

「そんなの、勝手です」

いつの間にか私の声は震えていた。言葉を出すのが、こんなに勇気のいることだったなんて。まるで、自分の声じゃ

ないみたいだ。

「なんで、勝手に決めるんですか？ 勝手に……そうやって……」

大きく息を吸い込んで、

「わたくしの心の中が、貴女に解るんですか！？ ……みんなそう、自分勝手に決めて、わたくしの気持ちなんて後回しで！ わたくしの心の内を知らないで、それで上手いかなんて嘆くのは、道理じゃないですか！」

病院中に響くような声で叫んだ。これ程の想いが自分の中にあるとは思わなかった。自分には何もないと、そう思っていたから。

目の前の義母も、突然いなくなった父も、学校の友達も、みんな自分勝手。

私の気持ちとは別のところで、みんなは何かを考えている。だから、私の気持ちは彼らの考えには加われない。仲間外れ。私の気持ちは遠くから彼らの囲む焚き火を眺めるしかない。ほんのりと温かい焚き火の熱さえ貰えずに。

気がつくと、目からはぼろぼろと涙が溢れ出した。義母の目に溜まっていた雫の列よりも、私の方が多かったらしい。私の言葉を噛み締めていた義母は、やがてゆっくり言葉を拭くみたいに話し出した。

「そうじゃないわ、千百合さん」

きっぱりと、揺るぎない瞳で。

「……え？」

それは否定の言葉。私が間違っているとでも言うのか。

「私は貴女に喜んで欲しかった。ただそれだけなのよ……」

「でも、じゃあ、それこそ話してくれたら良かったじゃないですか……！」

「それは貴女も同じことなのよ、千百合さん」

優しく諭す義母の声。労わるような視線が、私の頬を撫でる。

上城さんの言葉が、ふと記憶の底から顔を出す。

——万乗さんに、迷惑、かけたくないから……。

そうだ。上城さんはきちんと、言葉で伝えていたではないか。 義母の言葉も上城さんの気持ちも、なるほどそうなのだ。

「私たちは言葉を持っている。言葉はコミュニケーションの道具で、言葉があれば通じ合えるし、想いを確かめ合うことができる……でもね、言葉では伝え切れないものもあるのよ。言葉にした途端にその価値を失うものもあるの。本当の気持ちとかは、特にそうかも知れない」

義母は私に何も話さなかった。良かれと思って再婚した。

私は義母に何も話さなかった。話しても解ってくれない。そう思ったのだ。

「いくら言葉で確かめようとしても、心の奥底まで言葉を届かせるのはなかなか難しいの。そして、心の奥底を言葉にして伝えるというのはそれと同じくらい難しい」

私の心の中には、いつも何があったのだろう。ぐちゃぐちゃで醜悪な気持ちばかりが、そこにはあったのかも知れない。周りの人のことを、私は考えていただろうか。

考えてはいた。多分。でも、みんなの相談をただ待つだけで、私は結局何もしなかった。できなかったのではない。しなかったのだ。最低だ。

周りが身勝手だったわけではない。

他でもない私自身が、我が儘の塊だったのだ。自分の傲慢を傲慢と思えないことが、一番の傲慢なのだ。

「だからね、謝りたかったのよ、ずっと。言葉で言えばこんなに簡単だったのにね……それでもそんなことに気がつく暇もないくらい、焦っていたのね……これがお義母さんの心の奥底よ……ごめんなさい、千百合さん」

私の心の奥底は。

そっと手を伸ばして底を撫でるように探してみる。

「わたくしも、お義母さんに言いたいことがひとつあります」

きっと、今まで溜め込んだ言葉の中で、今この瞬間に何かひとつ伝えたとすればこれだろう。だから迷わず、自分の言葉で、言う。

「千百合、と呼んで下さい。“さん” などという言葉は、必要ありませんから」

言った途端、また涙が溢れてきた。

きっとこれが私の抱えていたもの。言いたくても言えなかったもの。

義母に拒絶されるのが恐かった。現状の危うくて、けれど幸せな状態が壊れてしまうのが厭だった。だから、言えなかった。

でも、口に出してみるとそれは意外に簡単で、なんだか拍子抜けしてしまった。義母は俯いていた顔を上げ、「ごめんなさいね、なかなか踏ん切りがつかなくて……私にそう呼ぶ権利があるのか、なんて考えてしまうのよ」「それはお義母さんの勝手な意見でしょう。私の心の中では呼んで貰えることを期待しているんです」

そう言って、私たちは籬が外れたみたいに笑い合った。この状況がひどく可笑しくて。

恐る恐る相手の気持ちを確かめ合う作業。勇気を出して相手にちょこっと近づく。それが、こんなにも素敵な行為だったなんて。

「だから、呼んでよ、“お母さん”」

「……ええ、千百合。これからも宜しくね」

想いは通じた。

それを言葉で確かめる術はないけれど、なんとなく解った。

それはきっと、家族だからなのだ。

傲慢（5）

次の日、いつも通りに学校に行った。

昨日はあのあと、義父も呼んで三人でたくさんお喋りをした。誰かとあんなに話をしたのは何年振りだったろうか。すごく楽しかった。

今では母は義父のことをそれなりに好いているそうなので、仲が悪いという訳ではないらしい。結婚する時はそこまで好きではなかったらしいのだけれど。

でも、きっともう大丈夫。仲良くやっていけそうな気がする。やっと私は望むものを手に入れたのだ。お金では買えないのに、なんだかあっさりと手に入れてしまった。

家族、という二文字が私にはとても素敵な言葉に思えた。

今日は自分の退院祝いに、母がご馳走を用意してくれるらしいから、早く家に帰らなくてはならない。久々の母の手料理だ。自分の退院を自分で祝うのはなかなかにおかしかったけれど、もしかすると違った意味でのお祝いなのかも知れない。家族としての、お祝いとか。

「おなかをすかせて帰ってきてね、千百合」

それがいってらっしゃい、の挨拶だった。

登校の見送りも、とても久しぶりだったのでなんだか恥ずかしかった。いつもは使用人だけが私の身支度を整えてくれるだけだったのに。リムジンが発進しても、母が門の前で手を振ってくれていたので、私は彼女の姿が見えなくなるまで後ろを見ていた。

教室に着いてまもなく、慧子が私のもとへとやってきた。違うクラスなのに、よく私が到着したのが解ったものだ。やはり最近の慧子はおかしい。こんなに行動力はなかった筈だ。ぱたぱたと駆け足で近づいてくる。背中に垂れた髪が朝の新鮮な空気に踊る。

「昨日は大丈夫だったー？」

「あらあら、心配して下さってどうも有難う。でも、たいしたことはなかったです」

「そりゃ良かった……それと、昨日の話の続きだけど……」

「あ、あれは……その、わたくしも悪いところがありました。みなさん、周りに迷惑をかけないように自分の中に隠しているでしょう」

一晩考えて、この結論に至った。答えはすぐに見つかった。だって、私も同じだったから。私だって自分の家庭のことは話さないだろう。心配をかけたくないから。上城さんもそうだ。きちんと言葉で伝えようとしていたのに、私がそれを断ち切ったのではないか。彼女はそれほど悪い子ではないのかも知れない。

「なんか、変わったねえ……何かあったのかい、お嬢様」

「まあ、たいしたことはありませんよ」

ほら、私はまた隠す。

自分勝手、と言ってしまえばそれまでのだけれど。でも、きっとこれは自分勝手とはまた違う。自分のこと以外に、他人のことも考えた上での勝手なのだから。

「ふーん、まあ良いか……よーし、じゃあ仲直りの記念に、今日の放課後、何処かに寄って行こうよ。たまには駅前のケーキ屋さんとか！ 光ちゃんたちも誘ってさ」

綺麗な笑顔で慧子が言う。涎が出ているし。

その提案はとても名案だったけれど、生憎と断らなくてはならなかった。本当に残念なのだけれど。

「ごめんなさい、今日はちょっと……」

「如何してー？ なんか用事があるの」

きょとんとした慧子に、申し訳なささと嬉しさが交ぜになった言葉を紡ぐ。心の奥底から。

「ええ、先客が入ってしまして……家でわたくしの大切な家族が待っていますから」

彼女たちに『傲慢』了

『強欲』

「彼女は自分自身が嫌いでした。

嫌いで、嫌いで、とっても嫌いで。

今すぐにでも自分の喉もとを掻っ切って死んでしまえばどんなに良いか、とさえ思っていました。その想いはとても強く、何かの弾みで現実になってもおかしくはありませんでした。

然し、人間の身体は上手くできています。このままでは命の危険があると判断した脳は、自分であって自分ではない架空の存在を作り上げました。それは彼女とそっくりの人間でした。

これで命の危険は去りました。

何故なら、彼女は自分を責める代わりに、自分そっくりのそれを責め立てれば良いからです。

それを罵れば良いからです。

それを嫌えば良いからです。

それを、殺してしまえば良いからです。

それでも、彼女にはそうできなかった。自分が死ぬほど嫌い。自分そっくりのその人間を嫌って心の平和を保つ筈だったのに、彼女には無理でした。

なんということでしょうか。

彼女は嫌悪するべき自分自身を好きになってしまいました。

それによって、また心のバランスが崩れ始めます。

これは、そういうお話です」

ノアと名乗った少女はすらすらとそんなことを言った。夕暮れの迫る公園のベンチでこんな話もどうかと思うのだけれど、ノアの真剣振りがあまりにも鬼気迫るものだったので、つついこちらも聞き入ってしまった。

「貴女に解る言葉で言えば、ドッペルゲンガーとでも呼べば良いかしら」

「ごめん、解らない」

話の腰を折らないように必死だったけれど、私には理解できないのだから仕方がない。この子は何を言っているのだろうか。ドッペルゲンガー？

「上城光の脳は『神代闇』というもう一人の自分、つまりドッペルゲンガーを生み出して、憎むべき対象を作ったの。そうすれば自分自身を嫌わずに済むから。『神代闇』は上城光にとっては飽くまで他人だもの」

台本通りに喋っているような、違和感。もう何度も同じ台詞を使ってきたかのような熟練さがそこにはあった。薄い唇がプログラミングされた機械のように規則正しく動く。ざあっと風が吹いて、ノアの長い髪を揺らした。このままでは相手のペースだ。そして、意味も解らないままになってしまう。

私は意を決して言ってみる。

「もう一人の人間を作るだなんて、そんなこと、できるわけじゃない」

自分そっくりの人間を生み出す、などという荒唐無稽な話を信じられるわけがない。それも脳みそが勝手に作り出したものだなんて。何処かのマッドサイエンティストが実験室で作った、という方がまだ真実味がある。

けれど、ノアは止まらない。淀みのない二つの青い瞳で私を見つめる。可愛い唇が動いて、解読不能の言語が吐き出される。

「ボルターガイスト現象というものを聞いたことがあるかしら？ 貴女たちくらいの歳の子の周りで発生する、怪奇現象のことなのだけれど」

「勝手に食器棚の食器が動く、とかだっけ？ それとこれとがどう関係あるのよ」

ボルターガイスト。いつだったかテレビでやっているのを見たことがある。触ってもいないのに、ひとりで食器や家具が宙を舞う、といったような不思議な現象のことらしい。

あんなものテレビの中だけだ。全部、作りごとに決まっている。フィクションをあたかもノンフィクションのように伝

えるのが、テレビという機械だ。

「これは大規模なポルターガイスト現象だと考えれば良いわ。普通は部屋の中などといった、自分の身の回り、小規模な範囲でしか起こらないものだけど、それが世界規模で起こったと考えれば辻褄が合うわ」

「……世界、規模？」

ついに、世界規模のお話にまでなってしまった。

「欠伸をするのはよして頂戴」

「ごめんなさい」

素直に謝ってしまう私。何かおかしいような気がする。

「そう、世界規模なの。学校という閉じられた空間には何百人という思春期の人間がいるわ。それだけの大人数によって引き起こされたポルターガイスト現象は、世界を動かすほどの大きなものとなるの」

「世界を動かす、ってそんなこと」

できるわけがない。

「食器を動かすのも、世界の法則を動かすのも、同じことよ。要は規模の問題ね」

「……」

「テストで良い点数が取りたい。スポーツが上手くなりたい。授業で当てられたくない。あの人が好き。嫌い。あんなりたい。こうしたい……そういった様々な欲望が集まって、複雑に絡まりあい、増幅され——世界を捻じ曲げた。『神代闇』というドッペルゲンガーの存在する世界を生み出してしまった」

「嘘、でしょう。それが本当だったら、世界を思うがままにできるってことじゃない！ そんなのできるわけ——」

「できるよ」

今日食べたお昼ご飯のメニューを言うみたいに。

ノアはこともなげに言う。

「できるんだよ。私たちにはね」

「それって」

「想えば力になる。願えば現実になる。私たちにはそれができる。世界を変えたい。常識を捻じ曲げたい。強い想いは、世界を食い破ることができる。それだけの可能性が、私たちには眠っているの」

太陽がそろそろ彼方の山に沈みこむ。夜の訪れを感じる。

ノアの目は、嘘を言っているようには思えない。

全く信じることはできなさそうだけれど、もし、今言ったことが全て正しいのなら……。

「それが全部本当で、そして百歩譲って、神代闇が上城さんの作ったドッペルゲンガーだとして、それであんたは何がしたいの。私にその話を言って、どうしたいの」

いったいどれだけの人間が今の話を信じるだろうか。私だって、信じてはいない。心の冷静な部分が否定する。だって、おかしい。常識外れだ。今は科学の時代だ。怪奇現象なんて笑ってしまう。

でも、ノアの表情を見ると、何故だか今の話を信用しなくてはならないような気分になる。

もし彼女を信用するとして、それで私はどうすれば良いのだろうか。返答を待っていると、俯いていた顔を上げるノア。私に向き直って、綺麗な青い両目を開いて、

「私を、助けて欲しいの」

切実な声で、ノアはそう言った。

一度にたくさんの情報が頭に入ってきて、上手く処理ができない。

ひとつ、神代闇は上城光のドッペルゲンガーである。

ひとつ、ドッペルゲンガーが存在するのは、大規模なポルターガイスト現象が起こり、世界の法則を変えたからである。

ひとつ、ノアは助けを求めている。

整理した筈が、余計に混乱しそうなラインナップに、つい舌を出しそうになる。お手上げだ、こんなの。

「完全記憶能力というものを知っているかしら。文字通り今まで体験した全ての記憶を、一生保持し続けることのでき

る能力のことよ」

「また胡散臭そうなものが……」

「私にはそれがあるの」

「ああ、そう」

「信じてないわね」

「当たり前でしょう。そんな珍しい能力があれば、もっと世の為人の為に――」

「そうになりたいのはやまやまなのだけれどね。今のままじゃ無理なのよ」

ノアは助けて、と言っていた。何かに困っているわけだ。こんなふうに長々と意味不明のことを吐き出し続けているが、結局はノアの悩みまで到達しなければ先が見えない。

「今のままじゃ無理って、どういうこと」

「今のこの世界は、十三周目なの」

「……はい？」

「いかん、頭痛が。」

「この世界はある時間まで進むと、一度もとに戻るの。そしてまたある時間まで進むと、もとに戻る。そんなループを繰り返しているの。そして、今、私と貴女が話しているこの世界は十三回目の世界なのよ」

「ちょっと、待ってよ。私、貴女と逢うの、今日が初めてよ。それに……！」

「勿論、“この世界では” そうね……世界の時間軸はある時刻へと巻き戻る、つまりリセットされるわけ。その間に起こった出来事や、記憶なんかも含めて、全て」

だから、私が何も覚えてないのは当たり前、ということなのだろうか。では、如何してノアはそれを知っているのだろうか。

「私には完全記憶能力があるの。それもどういうわけか、真の意味で『完全』記憶なのよ」

「それって……」

「世界の時間が巻き戻っても、私だけはもとには戻らなかった。全て、記憶している状態で周りの時間だけが巻き戻るの。本当のことを言えば、記憶以外の身体の成長も元には戻らなかったけれど……」

その声はとても悲しそうで。まるで、置き去りにされた迷子みたいで。

それはあながち間違っていない。ノアは世界から置き去りにされたのだ。時間の迷子といったところか。この長い髪の毛も、もしかするとずっと伸ばし続けてきたのかも知れない。それは時間が進まないことの証。

「その、ある時間まで進んだらもとに戻る、って言ったけれど、それっていったいいつなのよ。もうすぐ来るの？」

半ば自棄だ。ノアの話が嘘だろうと本当だろうと、もうどうしても良くなってしまった。話が途方もなさすぎて、反論するよりも身を任せてしまった方がきっと楽だろう。

「もう少しね。具体的に言うならば、上城光が死んだ時、かしらね」

思考が一瞬だけ止まる。身を任せてしまえ、と思ったけれど、やはり無理かも知れない。上城光が、死ぬ？

「ど、如何して上城さんが死ぬのよ！ それに未来のことなんて……」

「だから、これは十三周目だと言ったでしょう。最初のうちは、私にも何が原因で時間が巻き戻るのか解らなかった。でも、調べていくうちに解ったのよ」

「……それが、上城さんの死だっていうの？」

信じられない。いや、信じたくない。如何して上城さんが死ななくてはならないのか。そして、如何して上城さんの死と共に時間が巻き戻るのか。

「さっき話したボルターガイスト現象のことはもう良いかしら。世界を捻じ曲げる力が、私たちにはある、ということも」

「まだ、信じられないけど」

「今はそれで構わないわ。でも、貴女もきっと何処かでその力を発揮している筈よ。些細なことでも、願い事が叶うなんていうのは、世界を変えているのと一緒に」

「夕飯はカレーが良いなあ、って思ってたら本当にカレーだったとか」

「そうね」

ほんとかよ。澄ました顔のノアは、瞬きすらしないで頷いた。

ポルターガイスト現象で『神代闇』が誕生した、とノアは言っていた。それを引き起こしたのは、他でもない上城光。

私にもそんな力があるのだろうか。夕飯の献立をいじるようなしょうもない力でなく。
「上城光の死と共に時間が巻き戻って欲しい、と思った人物がいるのよ。その子の強い想いが、世界の時間軸までをも歪ませたの」

そう簡単に世界をどうこうできるものなのだろうか。でも、もしそれが可能だとしたら、それを願う子というのは……。

「それって、まさか……」

「そのまさか。きっと、それで正解ね」

上城さんは周りからはあまり良い評価を受けていない。その死を本気で願う者は多くはないだろうけれど、その死を悼む者が何人いるだろうか。彼女の死を一番認めたくない人物、それは……。

「そう。神代闇。彼女の願いが、上城光の死をなかったことにして、もう一度世界をやり直すことだったの」
なんということだろうか。

上城光の想いが世界を歪め、ドッベルゲンガーである神代闇を生みだし、今度はその神代闇の想いが世界を歪め、上城光を蘇らせる。

「今まで話したことが信じられないかも知れない。でも、私にとってこの世界は十三回目。もう、疲れてしまったわ。この先何度も同じことを繰り返すのかと思うと、ぞっとする」

ノアは本当にくたびれた表情で。同い年くらいだろう、と思っていたけれど、中身が老成している印象を受ける。
「だから、上城光と神代闇の世界を変えるループを、ぶち壊して欲しいの」

少し、瞳が濡れている。

ノア、貴女は本当に……？

「そして、私を――」

想いを、吐き出す。

「――助けて」

強欲（2）

髪の長い子だな、と思った。

膝くらいまで伸ばした少し色素の薄い髪。淡いクリーム色のサロペットは、胸元に橙色の花の刺繍があしらわれている。足にはヒールのあるブーツを履いていた。

商店街から一本脇に入った暗い道で、その子と出逢った。その髪の長い女の子は、私を見るなり開口一番こう言い放った。

「こんにちは。ハウジョウサクラ」

北条桜というのは私の名前だ。でも、私には目の前の子が解らない。何処かで逢ったことがあっただろうか。

「えと、貴女は？」

「私の名前はノア。サクラにひとつ話があるのよ」

ノア？ 見た目は思いつき日本人だけど、その名前はいったいなんだろうか。

「初めて、ですよ、逢うの」

つい敬語になってしまう。ついでに倒置法にも。ノアと名乗った少女は奇妙な間を空けて、

「……そうね」

とだけ呟いた。夕暮れの風が少しだけ寒く感じた。

これがノアとの出逢い。たった数時間前のことなのに、ひどく昔のもののようになってしまう。それはきっと、ノアから聞いた話がとうてい信じられるようなものではなかったからだ。

「また明日逢いましょう」

そう言うと、ノアは今まで座っていた公園のベンチに別れを告げて、暗がりの中へと去っていった。まるでノアが違う世界へと帰ってしまったように、彼女のいなくなった公園はひどく現実味があった。

一人だけ残された私はいそいそと帰宅した。辺りは暗く、何か厭なものでも出そうな雰囲気だった。でも、そう言った超自然的なニカを信じてしまうと、さっきの話すら信じなくてはいけないような気がした。その方が厭だったので、変な考えを振り払って、急いで家へと戻ってきたのだった。

お風呂の浴槽に浸かり、膝を抱えて今日あったことを整理する。温かいお湯が、身体を包み込む感じが、なんとも気持ちが良い。

「ドッペルゲンガー……」

ぼつり、と口の中で呟く。

「ポルターガイスト……」

小さな声でもお風呂場では、反響してしまって、厭に大きな自分の声が聞こえる。

「上城光と、神代闇……」

そして、ノア。

嘘だと言って信じないのは容易い。全てがノアの妄言だとすれば、何も思い悩むことはない。

でも。

でも、彼女の語った内容が全て本当だったら。

ノアは私に助けて、と言った。

私に何ができるのだろうか。私はまだ子供で、中学二年生で、何もできやしない。

——できるよ。

ノアの声が蘇る。

——想えば力になる。願えば現実になる。私たちにはそれができる。世界を変えたい。常識を捻じ曲げたい。強い想いは、世界を食い破ることができる。それだけの可能性が、私たちには眠っているの。

本当だろうか。本当にそんなこと、できるのだろうか。

「できるのかな」

口もとまでお湯に浸かり、そっとそんな声を吐き出してみる。ぶくぶくと水面に泡が浮かぶ。水中から浮上した『で

きるのかな』が弾けて、消える。

この泡が全てひとつの世界だとして、ひとつの泡が消えればもうひとつに、それが消えたらまた他の泡へ、といった具合に、ノアは世界の間を行き交っているのかも知れない。どちらにせよ、彼女は本当に世界に残されている。世界の時間軸に置いていかれた、ロストチャイルド。

それはどんな孤独だろう。世界は異常だけれど、正常にループを繰り返す。その輪に入れない心情は、今の私には想像することすらできない。

翌日。いつもと変わらない太陽が昇る。毎日同じことの繰り返し。太陽は東から昇る。

まるでノアと同じだ。過去を反復する行為は、きっと心を殺してしまう。無気力に錆びついた太陽が昇るみたいに、ノアも惰性で呼吸をしているのかも知れない。

教室に向かう途中、上城さんを見かけた。朝の廊下は人が少ないから、自然と目が合った。然し、彼女はすぐに顔を下げてしまって、床の埃でも見つめるように歩き去った。

周りの子たちは上城さんのそんな様子に気がつかないように振舞っている。最近の居心地の悪さがこれだ。ノアも言っていた。上城さんは自分のことが嫌い。だから、自分とそっくりな神代闇を作って、それを嫌うようにした、と。

さっと二組を覗くと、転校生の神代さんはまだ教室には来ていないようだ。上城さんは無言で自分の席へと進んでいった。

朝からあまり見たくはないものだった。

私も自分のクラスへと入る。私の通う市立泉ヶ丘中学校では一年生から二年生になる時にだけ、クラス変えが行われる。去年仲が良かった子の殆どとはばらばらになってしまった。

自分の席について、鞆から教科書とノートを取り出ししていると、
「おはよう、桜ちゃん」

木下茜の声がした。茜と去年も同じクラスで、今では一番の仲良しだ。彼女は140cmに満たない小柄な身体をしていて、いつもびよこびよこ跳ねているような印象がある。短い髪の毛が余計に幼さを出している。

「茜、おはよ。数学の宿題やってきた？」

びらびらと数学のプリントを摘んでみせる。空欄はひとつも埋まっていない。昨日、あんな突拍子もない話を聴かされてうんざりとしていた私に、宿題をするという真面目な気力はなかった。

「全部終わらなかったけど、一応やってきた」

茜の鞆から、びっちり折られたプリントが出てくる。そこには彼女の可愛らしい文字が並んでいる。余白にはデフォルメされた猫の絵が描いてある。途中で宿題に飽きたのだろう。

「ごめん、少しで良いから見せてくれないかな」

「良いよ」

茜にお礼を言って、プリントを拝借する。数学は一限目だから早く書き写さなければ。朝のSHRまであと二十分。必死に写せばきっと大丈夫。

そう思ったのだけれど。

「おはよう」

と声をかけられて、おはよう、と反射的に返してから、耳を疑った。今の声は……。

「……ノア？」

顔を上げると、そこにはノアが立っていた。膝まである長髪。青く光る瞳。泉ヶ丘の黒を基調とした制服に身を包んでいる。

「あんた、なんで……」

咄嗟に胸元につけている筈のネームプレートを確認する。そこには『巡来未』という文字が彫られていた。

「じゅん、らい、み……？」

「メグリ、クルミ」

ノアに指摘される。メグリクルミ？ 来未と書いてクルミ、か。

彼女は少しだけ声のトーンを落として、

「これは世を忍ぶ為の仮の姿よ。今の私は『ノア』ではないわ。『巡来未』よ」

窓から差し込む朝日は清々しい筈なのに、今はそれが鬱陶しく感じる。朝から頭痛がするのはこいつの所為だ。

「サクラ、少し良いかしら」

私の答えを待たずに、ノアはむんずと手を引っ掴んで教室の外へと私を連行した。そっと耳に口を寄せて、

「上城光の様子はどうか？」

なんて訊いてくる。勘弁して欲しい。そんなこと、自分で直接見れば良いじゃないか。私は忙しいんだ。数学の宿題を手付かずのままなんだぞ。

「そんなの、見れば解るじゃない。普通よ、普通。いつも通り！」

暑苦しく引っついてくるノアを引き剥がして叫ぶ。平然とした表情のノア。

「神代闇はまだ教室にはいないようね」

一人、思案顔のノア。もう戻って良いかな……。

「ねえ、ノア……じゃなかった、巡、さん」

キッと睨まれて、慌てて言い直す。

「何かしら。質問があるならどうぞ。それと、クルミで良いわ」

「じゃあ、えと、クルミ。あんた、如何してここにいるのよ」

「私は貴女に助けて貰いたい。だから傍にいる。当然じゃない」

なんだか態度が上から目線で気に食わない。私はまだあの話を信じていないんだからな。

「クラスは、違うの？」

「ええ、二組よ。上城光たちと同じ方が良いと思って」

まるで自分で操作したかのような言い方だ。

「まさかあんたも、ポルターガイストとやらでクラスをいじったわけ？」

「いいえ。そんなことしていないわ」

ふとノアの顔が曇った。なんだろう、と思っていると再び落ち着いた声で語りだす。

「そう言えば、世界がループするたびに変わることもあったわね」

「ループじゃないじゃん、それ」

そもそもループ自体、まだ信じてないけれど、と冷静な気持ちで思う。

「特に何も起こらなかったから意識から外れていたわ。毎回毎回、クラスの振り分けが違ったの。あとは給食の献立や、天気なども」

「どういうことよ、それ。じゃあ、完全に世界が一からやり直してわけじゃないのね」

「それはきっと私の所為でしょうね」

「はい？」

それもポルターガイスト？ でも、ノアは何もしていない、と自ら言っていた。

「私という存在が巻き戻らないからよ。その微妙なズレが時間軸をきちんと戻せなくしているのだわ」

「そう……なの？」

私には解らない。残念ながら、全てノアの妄言のように聞こえてしまう。

「初期値鋭敏性。バタフライ効果。カオス理論」

こうやって意味不明な単語を並べて、はぐらかすつもりなのだ。

「時間が巻き戻るまで、もうあまり時間がないわ。だから、一生懸命考えて頂戴。私を助ける方法を」

「時間がない、って……具体的にはどれくらいなの？」

時間がない。つまり、上城さんの死までのタイムリミット。

「三日よ」

一方的に言って、ノアは自分のクラスへと去っていく。呼び止めようとしたら、チャイムが鳴って遮られた。

三日。あと三日で上城さんは……。

強欲（3）

授業には身が入らない。ノアの声が脳内を駆け巡っていて、集中ができないのだ。ドッベルゲンガー、ポルターガイスト、タイムリープ……。ノートに書き出してみても、そのあまりの現実味のなさに笑いそうになる。教卓の上では、地理の大澤先生が地球儀をくるくる回している。先生の手の中にあるミニチュアの世界。ぐるぐると地球儀を回すように、私たちには世界に干渉する力があるのか。カレーの例でなくても、願いが叶う、というのは何度か経験がある。運が良い、というのは無意識の内に現実を変革している結果なのだろうか。違う、とは言い切れない。未来は誰にも解らない。だから、夕飯がカレーになったからといって、それがたまたま当たっただけだ。たまたまだ。明日晴れてくれるかな、と思って寝たら、きちんと晴れている。それだって、たまたまだ。

でも……。

考えがループする。

でも、私にもその力があるのなら。何かを変えられるのだろうか。ノアを助けることができるのだろうか。もしかしたら、上城さんが死なずに済むのかも知れない。

ノートを逆からめくって、そこにシャーペンを走らせる。白いページに私の汚い字が並んでいく。

ノアを助ける。具体的にはどうすれば良いのだろう。いや、どうすれば、というよりは、どうなれば良いのだろう、というのが正しい。どういった結末になればノアは“助かる”のか。答えはすでに出ている。時間軸に取り残されなければ良い。世界が巻き戻ると一緒に、彼女の記憶も元に戻れば良いのだ。

それでノアは救われるけれど、究極的には救われない。世界を救おう、だなんて大それた想いはないけれど、いつまでもタイムリープを繰り返す世界で生きていたいとは思えない。

だったら――

カリカリとシャーペンの芯が減る音がして、私の字が浮かび上がる。

『世界を正常に戻す』

それが目標だ。上城さんと転校生の悲しいウロボロスを叩き潰すしかない。

あとは手段だ。上城さんが生きている未来を願えば良いのか。それは簡単だけれど、そんなこと可能なのだろうか。

そもそもノアの説明では解らないことが多すぎるのだ、などと心の中で愚痴を吐いて現実逃避。彼女の長い髪の毛が思い出される。落ち着いた口調。それはそうだ。十三回も同じことの繰り返しに、心はきつと耐えられない。時間軸は神代闇が転校してくるところから上城光が死ぬまでのループを繰り返す。およそ、三ヶ月。それが十三回目、ということとは三年だ。三年間、彼女は独りで世界と闘ってきたのか。

なんだか悔しかった。そんなに繰り返す前に、如何して私に相談しなかったのか。

そこまで考えて、違和感があった。そうだ。如何して今までノアは私にその話をしなかったのか。前の世界のことは解らないけれど、如何して今なのだろう。リミットは三日。如何してもっと、それこそ四月当初の時間が戻ってすぐに、私のところで来たって良いじゃないか。

何かが引っかかる。ノアはまだ何かを隠している。

放課後、茜と一緒に帰るのを断って、ノアのいる二組へ向かった。このところ、あまり茜と帰れていないけど、仕方がない。

「巡さんなら、もう帰ったよ」

及川小乃未がそう言った。及川さんとは去年同じクラスだった。成績も容姿も良い女の子。岸辺栄子という子と仲が良い憶えがある。岸辺さんも二組の筈だ。

「いつもならまだ残っている気がするけど……用事があるんじゃないかな」

教室の中にはまだ生徒がたくさん残っているのに、ノアはそそくさと帰ってしまったらしい。視界の隅に上城さんの姿があった。あと三日。不吉な数字が蘇る。

あと三日で世界は終わる。それまでに解決策が見つかるのだろうか。

ともかく、ノアに逢わなければ。そう思って廊下を走り出す。

何をこんなにも必死になっているのだろう。全て、ノアの冗談ではないのだろうか。私が必死に走り回る様子を、笑いながら見ているのかも知れないではないか。そんなネガティブな考えを打ち消すように、脳裏に浮かぶのは、助けてと言った時のノアの顔だ。あの表情に嘘はなかった。そう信じたい。

散々走り回って、辺りも薄暗くなってきた。ノアはまだ見つからない。街中を探したわけではないけれど、私一人では無理がある。

昨日の公園に辿り着いた。予感はしていた。ここに来れば逢えるって。でも、その予感はなんだか彼女の手のひらの上で転がされているように思えるので外れれば良いな、なんて思った。

薄闇迫る公園のブランコに、髪の高い少女が腰掛けている。ぎいっと錆びついた音で、ブランコが唸った。暗い闇の中に、ノアの白い肌が浮かび上がっている。

「遅かったじゃない」

足を棒のようにして探し回った結果が、これだ。なんという毒舌だろう。

「放課後に私のこと待っている、とかできないわけ？」

「私にもいろいろとやることもあるのよ」

「なによ、それ」

「タイムリープを止める準備」

いったいどんな準備をしていたというのだろう。

「世界が繰り返す中で、私は知識を蓄えることにしたの」

澄んだ声が、昨日と同じように公園の闇に響く。すでに夕日は沈み、街灯の心許ない光しか見えない。

「ひとつ訊かせて」

「何かしら」

風が公園を囲んでいる木々を揺らす。まるで聞き耳を立てているみたいだ。

「如何して今になって、私にこんな突拍子もない話をしたの。時間が巻き戻ってすぐの、四月から協力していれば何とかなったかも知れないじゃない」

何か思惑があるのだろうか。全部、嘘でした、なんていうことはないだろうけれど。返事を待っていると、ノアはおもむろに口を開いた

「試したからよ」

震えるノアの声。唇がわなないているのは、夜の寒さの所為ではないだろう。

「十二回。私は何度もこの神代闇のボルターガイストを止めようとしたわ。でも、結局駄目だった。私の話を信じてくれない人ばかりだったし」

それはそうだろう。誰もこんな話なんて信じてはくれない。ノアは泣き笑いのように語る。単なる思い出話ではないのだ。

「四回前の世界でね、思い切ってサクラに話してみたのよ」

いつもの高慢な口調が年相応の少女みたいに、弱々しいものになっている。それだけノアが弱っているということだろうか。

「あれは五月だったから、時間が巻き戻って一ヶ月と少しの頃ね。貴女、その時も言ったわ。如何してもっと早く言わないの、って……」

「その世界の私は、あんたの話を信じたわけか」

「それは解らない。でも、協力してくれる、って言った。それがすごく嬉しくて、時間が巻き戻るまでの間は、とても楽しかった」

協力したけれど、徒労に終わったわけだ。上城さんは死んで、時間は巻き戻って、一からのやり直し。

「時間というものはちょっとのズレがあとあとに大きな影響を出すの。だから、サクラに話しかけるタイミングを少しずつつずらしていった……結局、何も変わらなかったけど」

私には何も言葉をかけてやれない。目の前の少女に、慰めのひとつも言えない。きっとそれは前の世界まででたくさん言われ続けてきただろうから。ただの気休めにしかならないと、ノア自身が一番解っているだろうから。

ブランコからずっと立ち上がって、ノアは私を見た。黒い髪が夜の空気を撫でるように揺れた。

「今回はね、諦めようと思ったの。もうどうでも良いや、って……でも、できなかった。ひとつ前の世界でね、サクラと約束したのよ」

「約束？」

「『必ず助ける』って。サクラが言ってくれたのに、忘れちゃった？」

憶えているわけがない。それを承知でノアも言っているのだろうけれど。

「その約束を憶えているのは私だけ。でも、叶えて貰わなくちゃいけない……だって、このままじゃ……このままじゃ、前の世界のサクラを嘘つきにってしまう。私は、そんなの厭……でも、それに気づいた時には時間がもうなかった。話さなきゃって。そう思ったの……あと三日というこのタイミングで、貴女に話したのは、こういうわけ」

ノアの瞳は少しだけ濡れていて、感情の波がもうすぐそこまで来ているみたいだった。私がこの子に何をしてあげられるだろう。残りの僅かな時間で、一体何ができるのだろう。

解らない。

でも。

「解ったわ」

ぼつりと言い放つ。なんだか現実味がないけれど、これは紛れもなく私の声だ。

「私は貴女を必ず助けるわ。やれるだけ、やってみる」

頬が弛むノア。いつもの超然とした態度は、彼女がノアである為の仮面なのだろう。本名だって『巡来未』に決まっている。潜入捜査なんて本人は言っていたけれど、そんな簡単に学校に入れるわけがない。何より、同じクラスの及川さんがノアのことを把握している時点で解り切ったことだ。

何ができるか解らない。私のこの両手で、どれほどの未来を掴めるか解らない。

でも、やるしかない。

「言っとくけど、今回は約束しないから」

「え？」

吃驚した視線を送るノアに、照れくさいからそっぽを向いて言ってやった。

「前の世界で約束済みでしょ。ちょっと遅れちゃったけど、その約束を守る。だから、絶対に助けるよ」

「……お、遅すぎ、だよ」

ノアはごしごしと両目を擦って、そう言った。それがくすぐったくて、二人して笑った。タイムリミットは明後日だ。

翌日になっても、全くと言っていいくらい、何も解決策が浮かばない。昨日あれだけ大胆に言ってしまったからには、もうあとに引けないというのに。

タイムリープについて、あのあとも散々聞かされた。解ったことは、完全に時間軸が元に戻るわけでない、ということ。ノアという不変の要素がある為に完全に返ることができないのだ。ノア曰く、少しのズレが大きな影響を生むらしい。前の世界と今の世界とではクラス変えの結果が変わったり、天気が変わったりしたそう。

それともうひとつ、上城さんは放課後に屋上から転落死するらしい。それは毎回変わらないそう。場所と時間が解れば彼女の死を防ぐことだってできそう。然し、ノア曰く、当日に屋上に行こうとしても何故だか行けないらしい。廊下が生徒で混んでいたり、先生に呼び止められたり、なぜか道に迷ったり、どうやっても屋上に辿り着くことができなかったそう。誰かの意思で、屋上へ行けないようになっているのだろうか。それもポルターガイスト？ だったら、誰がそんなことを……。

最後に気がかりなのが、タイムリープを引き起こしている神代闇の心境だ。上城さんに死んで欲しくないからタイムリープを繰り返すというのは、釈然としない。だって、世界をやり直すたびに上城さんは死ぬのだから。生きている時間だけを閉じ込めておけば良いのだろうか。私にはそれが解らない。好きな人の死なんて、そう何度も体験したくない。神代闇はどんな気持ちで世界をやり直そうとしているのだろう。

気がつけば午前中の授業を消化していた。何も進展しない。パズルのピースは揃っているのに、全体図が解らずに作業が進まないみたいな、もどかしさを感じる。

上城さんの死という未来が必ずやってくるというのなら、変えられるのはただひとつ。

神代闇のタイムリープ。

そこをなんとか絶つことができれば、時間軸は正常に動き出す。上城さんの死という結果を連れて。

強欲（4）

当日。試験の日にノー勉で突っ込むようなものだ。頭の中はすかすかで、叩くときっと良い音が鳴る。何も考えが浮かんでこない。このままではまた悲劇の繰り返し。ノアは孤独の海を彷徨うことになってしまう。

約束したのだ。絶対に、助けなきゃ。

時間は容赦なく過ぎていく。午前中の授業はこんな日に限って体育とか音楽とか、ぼーっとしてられないものばかりで、ノアを助ける良い案なんて浮かぶ筈もなかった。結局、昨夜もいろいろと考えただけだけど、全然駄目だった。そもそも相手が悪すぎる。得体の知れないポルターガイストなどというものに、どうやったら普通の人間である私が対抗できるというのだろう。

そんな投げやりな気持ちで、給食になってしまう。今日の献立はカレーだった。給食センターで大量に作られたものだ。それが私たち生徒のお腹の中に等しく収まっていく。ノアはこのカレーを何度食べたことだろう。献立も変わるということだったから、そこは退屈しないで済むのかな。

「桜ちゃん、元気なさそうだけど、大丈夫？　桜ちゃんの大好きなカレーだよー」

そう言ったのは同じ班の白鳥慧子だ。彼女とは去年からの付き合いだ。去年のクラスは好きな人同士で机を寄せ合って給食を食べたけれど、今度の担任はそれを許さなかった。席順から機械的に班を作って、班同士で食べるようになった。それは他のクラスも一緒だったので別段不平が出るものではなかった。私は茜と別の班だけれど、慧子と同じになれたしそれで良いと思ったのだった。

慧子の気遣いが嬉しかった。いつもはぼんやりとしているのに、最近は少し雰囲気が変わったようにも思えた。なんというか、前よりも地に足が着いている、みたいな感じだ。上手く言えないけれど。

先割れスプーンでカレーをすくう。カレーをすくうのは簡単なのに、世界を救うとなると難しい。そう思ったあとで、それもその筈だろう、と自分の中で笑った。

「カレーは誰でも好きだよ。最高の食べ物じゃない」

そう笑ってみたけれど、上手くできただろうか。でも、慧子はそれを聞いて安心したらしく、
「私も好きだよ、カレー……光ちゃんも同じようなこと言ってた。カレーって美味しいよね、って」

彼女の口から上城光の名前が出て驚いた。いや、もしかすると他の光さんかも知れない。上城さん以外に、光という名の生徒がいるというのは聞いたことはないけれど。

「光って、上城さん？」

「そうそう。最近、一緒に帰ったりしてるんだよー」

上城さんの名前を聞いた同じ班の子たちが少しだけ眉をひそめる。美味しいはずのカレーを食べているのに、なんだか不味いものを食べた顔に見えた。

「仲、良いの……？」

思いついたので訊いてみる。上城さんは嫌われ者だと思っていた。今日死んでしまう。それを悔やんで神代闇が、上城さんを生き返す。そう思っていた。

「ついこないだからだけどねー。光ちゃんと闇ちゃんとはよく帰るね」

慧子とあの二人は仲が良かったのか。それはとても意外だった。あの二人はいわば上城光が二人いるようなものだ。どちらも嫌われているのだと思っていたから。

「どうしたの、桜ちゃん」

不思議そうに慧子が首を傾げる。何かが引っかかる。でも、その何かが解らないもどかしさに包まれながら、
「なんでもないよ」

私はそう嘘をついた。

午後の授業は抜け殻のように過ごした。もう駄目だ。時間がない。今日の放課後、それがタイムリミット。私にはもうどうすることもできない。そんな絶望ばかりが浮かんで纏わりつく。

授業が終われば、あとは掃除、帰りのSHR、放課後だ。掃除の時間が勝負だ。ノアと逢える最後のチャンス。これを逃すわけにはいかない。

六時間目終了のチャイムがスタートの合図であるかのように、私は勢いよく教室を飛び出した。ノアは上城さんと同じ二組だと言っていた。急いで行けば、教室から出て行く前に捕まえられる。廊下には六時間目がちょうど早めに終わった生徒たちで溢れていた。思うように前に進めない。急がなきゃ。早くノアに逢わなくては。

逢ってどうする？

そんな不安が心をひやっと撫でる。解らない。解らないけれど、なぜだか無性にノアに逢いたかった。

二組の教室にはすでにノアの姿はなかった。近くにいた子にノアの掃除場所を訊くと音楽室と言われた。ここからだとして少し距離がある。如何してこの大事な時に、暢気に掃除なんてしているのか。駆け足で音楽室へと向かった。私の掃除場所は一階の女子トイレだけれど、今日はサボる。世界が終わろうとしているのだ。それどころではない。

息を切らして音楽室へと辿り着いたけれど、そこにノアの姿はなかった。とっとと帰れば良かったのだけど、音楽の関谷先生に出くわしたのがいけなかった。今は掃除の時間でしょう、と少し説教を貰い時間をロス。世界が終わるというのに、それに気がつかない人々は全くいつも通りだ。私だってこんなに信じてしまうとは自分でも思わなかった。でも、タイムリープが本当かどうかなんて、今はもうどうでも良い。ノアが助けてというのだから、助けるまでだ。

音楽室から開放されて、当てもなく廊下を駆ける。その途中で、お昼の慧子とのやりとりを思い出す。

慧子はあんなに上城さんたちと仲が良かったのだろうか。それはとても不思議なことなのだ。普段からやる気のない彼女。去年、同じクラスだったというだけで、クラスが変わってから一緒に帰るだろうか。

何かが引っかかる。

世界を正常に戻す為に、知らなくてはならないこと。それは、神代闇の気持ち。タイムリープは如何して起こさなくては行かなかったのか。

時間軸は完璧に戻るわけじゃない。何処かでズレが生じて、前の世界とは異なる。それは私たちの想いや、関係性などにも同じことが言えないだろうか。例えば、上城光という存在が実はそれほど疎まれていない、だなんて。少しずつ少しずつ良い方にズレが生じていくのだとすれば……。神代闇がタイムリープを繰り返す理由。それは……。

上城光が周りから好かれる世界を作る為。それは何度、世界をやり直したら訪れる未来なのだろうか。些細なズレで微調整して、アキレスと競争する亀のようにゆっくりと進む。

そんな、みんな仲良く、なんていう究極的な世界を彼女が望んだとすれば。私にそれを止める権利があるのだろうか。

強欲（5）

漸くノアの姿を見つけた頃には、帰りのSHRも終わってしまっていた。教室に鞆はあるから、きっと不審がられているだろう。言い訳はあとで考えれば良い。今は、ノアと話す方が先だ。特別棟ということもあってか、周りには生徒がいない。静かだ。

「ねえ、あとどれくらい？ もう放課後なのに、何も浮かばないの……！」

肩で息をして、彼女に尋ねる。ノアの長い長い髪が、少しだけ揺れた。

「あと十分くらいかしら」

十分だって？ 屋上には行けない。上城さんも神代闇も見当たらない。一体どうすれば……。

その時、視界に光るものを捕らえて、思考が止まった。それは非日常の塊。傾いだ太陽の光を受けて煌く刀身。冷たく光るナイフが、ノアの手握られている。

「ずっと考えてはいたの」

びりびりと頬に厭な痛みが走る。ノアの右手にあるナイフから目が離せない。刃に映った私と目があつた気がした。

「少しのズレが時間軸に影響するのなら、一人の人間の死はどれくらい変えられるのだろうって」

「何、言って……」

ダンスを踊るように、ノアはその場でくるっとターンをした。ざあっと空気を撫でるように、黒髪が花開く。

人の死が時間軸に与える影響。ノアという一人の人間の身体が巻き戻らない、というだけでもこれだけの差は出る。それが人の死だったら。一人分の命の欠けた世界だったら……。

「馬鹿なことはやめて、ノア……」

「やっぱり、無理だったんだよ。最初からこうすれば、良かった。毎回毎回、一から人間関係を作り直していく作業。すごく、疲れた。それだって、時間が経てばまたリセットされる……だから、もう誰とも関わりたくなかった……誰とも親しくならないで、ただ時間が戻るのに身を任せようと思った」

賽の河ではないけれど、積み上げていったものが理不尽に壊される。そして、壊されるのを知っていながら積み上げなくてはいけない苦痛。耐えられないだろう。

「ごめんね……約束……叶いそうに、ないな」

彼女の目にはうっすらと涙が浮かんでいる。それでも悲しげに笑った。

「何、馬鹿なこと言ってるのよ！ まだだよ……！ まだ終わってない！ 私がなんとかするから、だから……！」

「できないじゃない！ もう時間がないの！ もう、駄目なの……だったら、私を変えてやる……これでまた時間が戻ったって良い。私の身体はここで死んで、もう二度と蘇らないの。そうすれば解き放たれるから」

言葉が切れた刹那、ナイフの空を切る音が響く。駄目だ。間に合わない。銀色に笑うナイフの切っ先が、ノアの真っ白な首に近づく。スローモーションで光景が流れる。私は必死に、駆けた。手を伸ばす。伸ばす。届くわけがない。ノアまでの距離は三メートルほど。それが、遠い。ノアはこの世界の私より三年も多く時を重ねている。遠い。距離にして三メートル、時間にして三年。届くわけがない。私の視線の先で、ナイフの先端が、首の肉に喰らいつく。肉の軋む音が聞こえた気がした。厭。厭だ。厭なんだ。ノアに死んで欲しくない。最初は、変な格好で意味不明なことばかり言って、鬱陶しいやつだって思った。でも、そうじゃない。ノアはノアなりに考えて、ずっとループするこの世界をどうにかしようとした。そんな彼女に、死んで欲しくなんかない。いや違う。ノアがどんな人間だって良い。私は、ノアに生きていて欲しい。だから、ぐっと手を伸ばす。前へ、前へと伸ばす。この手は何かを掴む為のものだ。貪欲に、二つの手で、手に入りたい未来を掴みとる為のものだ。だから、私は――

「死んじゃ、厭！」

頭の中にきーんと痛みが走る。冷たいアイスを一気に食べた時みたいな感覚と、貧血で倒れる時の視界がぶれる感じ。目を開けると、私はノアの身体を押し倒して廊下に転がっていた。手にはべっとりと真っ赤な血がついている。驚いて飛び起きると、横にはノアの身体。傍に血で濡れたナイフが落ちている。

「ノア！ ノア、しっかり！」

慌てて呼びかける。抱き起こすと、首元に一筋の赤い線が見える。

「うう……」

苦しげに呻くノア。でも、首の傷は大きいけれど浅い。そこから染み出た血が生々しい。

「なんで、止めるのよ……」

けほっと咳をして、ノアは起き上がった。良かった、生きている。私はほっと息をついて、精一杯の声で怒鳴ってやる。

「ノアが死んで、たとえ世界が元通りになっても……私、そんな未来いらない！」

「な……」

信じられない、と言った顔のノア。

「だって、これ以上私耐えられない！ だったら死んだ方がマシ——」

ぱちん、と乾いた音が廊下にこだまする。ノアの頬をはたいた私の手のひらも、同じようにひりひりする。

「自分の命で世界を救う？ それが駄目なら逃げ出せば良い？ そんなの間違ってる！ そんなことの為に、私たちの心臓は動いているわけじゃない！ ノア、前に言ったじゃない……想えば力になる。願えば現実になる。私たちにはそれができる、って……だったら、精一杯、最後の最後まで願えよ！ 途中で諦めて、それであんたは満足かも知んないけどさ！ 私はそんな下らない未来なんて欲しくないの……！」

そう言ってみても、実際どうすれば良いのかなんて解らない。結局、無理だったのだ。願っても願っても、私とノアでは世界を変えることなんてできなかった。

「ごめん、ほっぺ叩いて……」

「うん、痛かった……でも、この痛みは忘れないよ。次の世界でも、忘れない」

その言葉が痛かった。もう時間を尋ねる猶予もなさそうで。ちらと時計を見る。ノアが寂しそうに、唇を動かす。

「もう、時間ね。上城さんは、死——」

その時、大げさな足音が聞こえた。振り返ると、そこには慧子とその友人の万乗千百合が立っていた。二人とも肩で息をしている。

「な、何があったの、二人とも」

「光ちゃん、見なかった！？」

私の問いに答えるのもまどろっこしいという感じで、慧子が矢継ぎ早に尋ねる。光ちゃん、ってつまり、上城さんのことだろうか。如何してこの二人が上城さんのことを、こんなに必死になって探しているのだろうか。

「掃除の時間のあとから、行方が解らない、って……神代さんが」

千百合も息を整えながら、私に尋ねた。

「ごめん、解らない……でも、もう手遅れ、かも」

私は何を言っているのか。まだ死んだわけじゃない。そう思いたい。けれど、心の何処かではすでに解っていた。上城さんはもう……。

「どういうこと……」

突然、ノアが掠れる声で呟いた。

「こんなの、前の世界では起きなかった……如何して、いったい、何が……」

「ちょっと、どうしたのノア！」

「その子、首から血が出てるよ！」

「あらまあ、どうしましょう……！」

三人で慌てふためいていると、ノアはがくんと力が抜けたように項垂れた。それを見て心配したのだろう、慧子と千百合の二人は保健室に先生を呼びに行ってしまった。ノアはいったいどうしたのだろう。死ななかったことに今更になって安心したのだろうか。そう思ったけれど、違った。彼女はこんなことを言ったからだ。

「時間が、巻き戻らないの……」

「え、それって……」

「そのままの意味。本当ならここで時間が戻る筈なのに……」

それは未来が変わったということだろうか。いや、そうではない。神代闇がタイムリープを発動しなかったのだ。その理由は、私にはなんだか解ってしまった。

「もうタイムリープの必要がなくなったってわけね……上城さんの周りに、実はたくさんの人がいたことに、神代さん

が気づいたから」

ほっと溜息をつくように、私は言葉を紡ぐ。この切ない物語に終止符を打つ為に。

「慧子や千百合が、上城さんをあんなに必死になって探してた。他の子たちも、もしかすると何処かで探しているのかも。それを知った神代さんは、こう思ったわけ。『上城光は嫌われていなかった。もうやり直す必要はない』ってね」

上城さんに悪い想いのままで死んで欲しくない、神代闇はそう思ったのだ。だから、上城さんにとって良い世界になるまで、タイムリープを繰り返した。タイムリープをすれば、それだけ上城さんの死を体験しなくてはいけない。でも、彼女が嫌われたままで死ぬのは、それこそ厭だったのだろう。

この十三回目の世界では、上城さんの周りには慧子や千百合、それに私やノアも含めても、何人かの味方がいた。そしてそれは、他ならぬ上城さん自身で塗り替えた世界なのだろう。

だから、これで大丈夫な筈だ。

勿論、全ては憶測だ。そもそもノアの言い分だって本当かどうかは解らない。私の感覚では世界の時間が巻き戻らないなんてことは、解らないのだから。

それはでも、ノアにとっては別だ。やっと、彼女は時間の因果から解放された。

透明な雫が、彼女の黒髪に落ちていく。

「有難う、サクラ……これで、私は……やっと」

私は自分の両手を見る。ノアの首の血で濡れた左手。ノアの頬を叩いて赤くなった右手。この両手はしっかりと、未来を掴んだのだ。

——想えば力になる。願えば現実になる。私たちにはそれができる。世界を変えたい。常識を捻じ曲げたい。強い想いは、世界を食い破ることができる。それだけの可能性が、私たちには眠っているの。

ノアの言葉が蘇る。これは当たり前のことを言っただけなのかも知れない。何も想わなければ、何も願わなければ、どんな未来もやってきはしない。ただ世界に流されるままになるだけだ。その大きな波に干渉して、自分の望む未来を作っていく。それが、生きていくということだ。

遠くでサイレンが聞こえる。上城さんのいない世界。自身の死は変えられなかったけれど、彼女は自分の力で周りの人を味方につけていったのではないだろうか。

それも今となっては解らない。

「約束したじゃない」

遠くに沈みゆく太陽が、一日の終わりを告げる。ノアにとっては長い一日だっただろう。それが漸く閉じるのだ。

とにかく、これでもう超常現象とはおさらばだ。上城さんの死という、異常な日常がやってくるだけだ。あまり話したことのない女の子だった。もっと仲良くすれば良かったな、とぼんやりと思った。

床にへたり込んでいるノアに、ひとつ気になっていたことを尋ねる。

「今更だけどさ、如何してノアなの？」

本名を素直に名乗れば良かったのに、わざわざ偽名、というか電波な名前にしたのは何か理由があったのだろうか。耳まで真っ赤に染めて、ノアが恥ずかしそうに答える。

「そ、その方が、突拍子のない話でも信じてくれるかな、って……アニメとかで、よく、あるし……」

そう言ってノアは目をごしごし擦ると、青く光るコンタクトレンズを指に乗つけて見せた。彼女の瞳が青かったのはそういうことだったのか。飽くまで雰囲気作りだったということか。

その弱々しい姿が、ノアから巡来未という一人の少女に戻ったようで、私は心から安堵した。

「もう、こんなのごめんだよ」

清々しい笑顔で、とびっきりの悪態をついてやった。

彼女たちに『強欲』了

憤怒（1）

『憤怒』

世界の全てに嫌気がさす。

皆の視線が、行動が、全て鼻につく。腹が立つ。イライラする。

茨のように絡みつくイライラが、私の身体を更に苛立たせる。

如何してこうなってしまったのだろう。昔は他人なんてどうでも良かった。他人が何処で何をしようが、気にはならなかった。

でも、今は違う。

目に見えることは勿論、あまつさえ見えないところにおいても他人が何をしているのか気になってしまう。そして、何も知れないことがまたイライラを増大させる。

目につくのも私のイライラを刺激するのだけれど。

鈍間な奴、煩い奴、傲慢な奴、自分を隠す奴、そして、全てに苛立っている自分。

周りの友人たちはきっと、私が笑顔の下で噴火寸前のマグマを押さえ込んでいるなんてことに気づいていないのだろう。

気づかれてはいけない。絶対に。

何故なら誰も悪くないのだから。悪いのは私だ。何でもないようなことで怒っている私が悪いのだ。ああ、そんなことを考えていると、また腹が立ってきた。

今が昼休みで良かった。幸い、いつも一緒に行動している人たちは出払っている。

少しイライラから開放されている。

そんな時、後ろの席から話しかけられた。

「戸塚さん、大丈夫？」

自信のないぼそぼそした声。黒い髪が肩口で揺れる。身長は私より少し低い。クラスの腫れ物、上城光という少女である。

「大丈夫って、何が？」

平然を装って言葉を返す。俯きがちな上城さんのおどおどした挙動がいちいち癪に障る。言いたいことがあるのなら、きっぱりと言えば良いのに。

「えとね、なんだか……その、怒っているみたいだったから」

察しの良い女だ。またイライラとした感情がむくむくと首を擡げてくる。

「そんなことない。そう見えたのなら、ごめんね」

「う、でも……」

私はきっぱりと言ったのに、彼女はまだ何か言いたそうで。面倒に思いながらも頭の中で言葉を捜していると、急にぶわっと風が吹いて私の髪が舞い上がった。

机の上に載っている雑誌のページがバラバラバラと次々に捲れていく。

クラスの男子が窓を開け放ち、そこからの突風が教室に吹き込んだのだ。

髪が顔にかかる。さわさわと髪の毛が皮膚の上をなぞる感覚が、とても不快だ。クラスの喧騒が喧しい。音、髪 of 感触、風。

男子たちの巫山戯た笑い声。

女子たちの下らない嗤い声。

厭だ。

厭だ厭だ。

厭だ厭だ厭だ。

全てが苛立つ。

ムカつくムカつくムカつくムカつく……！

ぶわっと風とは関係なしに自分の髪が逆立っているような気がする。

「と、戸塚さん？」

上城さんの澄んだ言葉に、我に返った。

危ないところだった。もう少しで私は、クラス中に響く声で怒鳴って、そこいらにある机や椅子を嵐が通り過ぎたあのようにめちゃくちゃにしていだろう。

「……なんでも、ない」

毎日毎日、心の中を怒りが蝕んでいくのが解る。

怒りは他の感情とは違う。まず隠すことが簡単ではない。無事に隠せたとしても、次々に噴出する怒りは、どうにも自分自身を圧迫する。

いつ心がはち切れてしまうのか、それを考えると自分のことながらも愉快だった。

中学二年生になったある雨の日、帰り道に死神に出逢った。

道行く人たちは、死神が道のど真ん中に立っているのに、まるで気がつかないみたいで。死神のいる場所を無意識の内に避けて通っているように見えた。

でも、私にはその死神が見えた。見えてしまったのだ。

死神は若い青年の格好をしていて、一見すると普通の高校生くらいにしか見えない。短い黒髪に、服装は白を基調としたデザインのスーツ。今から結婚式場に飛び込んでも大丈夫なくらい、清潔なイメージを受ける。

死神と言えば、骸骨が黒いマントを着て巨大な鎌を持っているものだと思っていたのに。それでも私が、彼のことを死神だと解ったのは、彼自身が死神だと名乗ったからだった。

「貴女は『見える』のですね」

綺麗なテノールだ。見える見えないか、と問われれば、見えるのだろう。現にこうして、私には死神の声までも聞こえている。

「鬱陶しい雨ですね。気分が愉しくなります」

「それ、矛盾してない？」

彼はとんちんかんなことを言う。死神って、みんなこんなのだろうか。

「死神っていうことは、誰かの命を奪うの？」

「ええ。正確には、奪うというよりも運ぶのですが」

「どっちでも良いわ」

沈黙は訪れず、雨の音だけが響く。傘に当たって跳ねる雫が五月蠅い。

道の真ん中に突っ立っている私を、不思議そうな目で見て去っていく通行人たちが煩わしい。他の人には死神の姿は見えない。それに、死神のいる場所を無意識に避けて通っているみたいだった。

「こないだ読んだ本には、仕事をする時は必ず雨が降るっていう死神がいたけれど、あんたもそうなの？」

「いいえ、そんなジンクスはありませんが……その死神、とても羨ましく思います」

何処までもおどけた死神だ。死神というよりも、寧ろ道化師に近い。スーツというフォーマルな格好でなかったら、様になっていただろう。

彼が現れたのは、私の近くで誰かが死ぬかららしい。一体誰だろうか。

両親はまだ死なないだろう。でも、突然の事故なんてのも十分あり得る。

涼しい顔で雨を眺める死神。

こんなやつが人間の命を運ぶだなんて。

「馬鹿みたい」

「そうですかね？」

「本当に、馬鹿みたい」

彼はきよんとしている。

雨の勢いが強くなる。早く家に帰って、暖かいシャワーを浴びたかった。

「あと一週間です」

死神が口を開いた。それは誰かの命の期限。

余命一週間。

「最初に謝っておきます。僕のこの仕事はきっと貴女を不幸にします……貴女が僕に気がつかなければ、何も知らなければ、不幸にならずに済んだのでしょーけど」

不幸になる、か。確かに、周りの誰かが死ぬのは私にとっては不幸かも知れない。

でも、なんだか彼の言葉が面白くて笑ってしまった。

「如何したんですか？」

不思議そうにこちらを窺う死神に言ってやる。

「私が不幸になるって……？ あはは、何それ。私以上に死ぬやつが不幸じゃない」

「ああ、すみません。それもそうですね」

本当に会話のしがないのないやつだ。こちらの言葉は、全て躲かれてしまう。それも死神たる所以なのかも知れないな、とぼんやりと思った。

「それでは、失礼します。くれぐれも変な気は起こさないよう」

変な気、って何だろうか。そう思ったけれど、問い質す前に死神は真っ黒なカラスになって雨雲を目指して飛んでいった。私はその光景を忌々しく思った。

カラスは嫌いだ。

小学校二年生の時だったと思う。学校の帰り道、夕暮れ色に染まる坂道で、カラスの群れが道の真ん中にいたことがある。ガアガア、と喧しく鳴いていた。全部で十羽くらいはいたのではないか。実際にはそんなに多くはなかったのかも知れないけれど、当時の私の目には蠢く黒いカラスたちが本当に怖く、無数にいるように感じられたのだった。

恐る恐るカラスの群れに近づく。辺りはどんどん暗くなるので、早く家に帰りたかったのだ。

黒い群れは遠くから見ると宇宙の図鑑に載っていたブラックホールに見えた。近づくにつれてカラスなのだと解る。濡れたように黒い羽が、夕日に照らされて光る。

ちょうど横を通り過ぎた時、カラスたちの身体の間隙から、地面に横たわる赤黒い物体が見えた。それは猫か何かの死体だった。カラスの嘴で掘り起こされた内臓が辺りに散らばっていて、もはや原型はなかった。かろうじて四本の足だったものが見えて、猫かな、と思ったのだった。

それを見た途端、カラスたちがキッとこちらを振り返った。嘴の間から細長い肉が覗いているものもいた。それをごくんと嚙下すると、私に向かってギャアギャアと騒ぎ立てた。

背中を芋虫が這いずり上がるような不快感を受けて、私は一目散に駆け出した。後ろからカラスたちが追ってくるのではないかと、厭な妄想をしながら、必死に駆けた。無事に家に辿り着いた頃には、ランドセルと背中の間は汗でびしょびしょに濡れて気持ちが悪かった。漸く玄関の扉を開けたところで後ろを振り返った。勿論、そこにはカラスの羽の一枚も落ちてはいなかった。

ホッとしたけれど、思い出すのは死体を貪るカラスの群れのことだ。胃の中が逆流しそうになって、急いでトイレに駆け込んだ。

それ以来、私はカラスが嫌いなのだ。道を歩いていて、電柱の上からカラスに見下ろされるたびに、あの日の光景が蘇って、ひどく不快になる。

死神はそれを知っていたのだろうか。だから、わざとカラスという格好になって飛んでいったのだろうか。だとしたら、本当にむかつくやつだ。

曇天の空を見上げて、溜息をひとつついた。

憤怒（2）

「あと三日です」

死神が呟く。その声は夕暮れの何処か寂しい空気に溶け込んでいく。私は少しだけ息を止める。白いスーツ姿の彼は、やはり死神には見えない。

「死神って、辛いなの」

「如何してでしょう？」

風が吹いた。吹かれるがままに、死神は立っている。私の長い髪が揺れて、頬にくっつく感触。邪魔だ。

「だって、命を奪うんでしょ」

「正確には運ぶのですけど」

「それは前も聞いた」

「そうでしたか」

「……」

死神は誰かを殺すことが、厭ではないのだろうか。それが仕事だから、彼は命を奪い続けるのだろうか。それは私たち人間が生きていく為に、他の動物を殺して食べ、住処を奪っているのと同じなのかも知れない。

「殺しても殺しても、死なない存在がいたとしたら、僕には辛いでしょうね」

「不老不死ってこと？」

「そういったものは存在しませんけどね。形あるものは、いずれ必ず滅びます」

「仮にいたとしたら？」

「個人の妄想。幻覚の一種です。死んでも蘇るだなんて、正気の沙汰ではありません」

そもそも死神が見えている時点で、自分が正気なのかは解らない。

「そういった正気の沙汰ではないものを殺せ、と上から言われたら辛いでしょうね」

「まあ、良いわ」

ひとつ溜息をついて、空を見上げた。月は昇りそうにない。

帰り道は長谷川琴理と一緒にだった。琴理は中学校に入ってできた一番の友達だ。クラス変えをした今年も、同じクラスになれた。思えば、隣を歩く彼女は何処か体調が悪そうだった。もしかして、と思い死神を見る。もしかして、死神が命を奪うのは琴理なのではないか。そう考えると、身体の奥底から怒りが溢れそうになる。

思い返してみると、最近では琴理の体調が悪いようだった。半年前に一度、彼女は授業中に寝不足による貧血で倒れている。

今回もそうなのだろうか。

それとも、死神が来た所為なのだろうか。

解らない。

でも、もしあの死神が来たからという理由だったら、死ぬのは琴理かも知れない。それは本当に厭だ。

琴理は、一番の友達なのだ。

私はいつも自分の言いたいことを上手く言葉にできなくて、冷たい言葉を口にしてしまうことがある。それでも、琴理は私の良き理解者だった。こんな私でも良くしてくれるのだった。

いつも小説を読んで過ごす休み時間が、彼女と一緒にいるだけで楽しくなるのだ。そんな時だけ、私の心の中の怒りは何処か遠くへ吹っ飛んでしまう。

ずっと、こうだったら良いのに。こんな日々が続いてくれれば、それはとても嬉しい。

もう怒りたくない。そう思っても、感情の波は抑えきれない。

周囲の状況は、悪くなるばかりだった。

上城さんへの周りの悪口の数に相変わらずのままで、彼女の友達の成木さんも結構滅入っているみたいだった。

いじめる側も、いじめられる側も、傍観者の立場も、全てイライラする。

私をこれ以上に不快にさせないでよ、お願いだから。

「あと三日したら、僕は帰ります。それまでの辛抱ですから」

死神はそうにこやかに言った。無性に腹が立つ顔だ。あと三日。

琴理が死ぬのだろうか。それを訊いても死神はきつとはぐらかすのだろう。この死神には何を言っても無意味だ。そんな気がする。

顔にかかる髪を払って、投げやりに言う。

「そう」

夕暮れの風が吹いて、私の言葉を乗せていった。

憤怒（3）

死神に初めて出逢ってから、一週間が経った。彼の宣言した時間が経過した。私にとっては何もない日々が続いていた。

今日、誰かが死ぬ。

そんなことを考えてふっと笑ってしまった。今日に限らず、毎日何処かで誰かが死んでいるのだ。こうしている間にだって、世界中のあちこちで人が死ぬ。そんなの当たり前のことじゃないか。それがいざ自分の身の周りで起きようとしているから、こんなにも気持ちが沈んでいるのだ。厭な自分だ。テレビのニュースの出来事なんて、どうでも良いのに。

三日前に逢って以来、死神の姿は見えていない。でも、今も何処か近くにいるのは解る。何となくだけれど、気配を感じるのだ。

午前の授業も終わり給食の準備をしている時に、琴理が倒れた。その倒れ方は一切受身なんか取れずに、冷たい床にダイブするみたいだった。鈍い音が廊下に響いたのを聞いた。彼女のふたつに縛った黒髪が、力なく床に垂れた。

もう何も考えられなかった。彼女を保健室まで運び、保健の先生が、ただの貧血よ、と言っても信じることは不可能だった。

きっと琴理は死んでしまうのだ。

あの小奇麗な死神が、彼女の命を運んでいってしまう。それが琴理の運命だ、と言ってしまえば簡単なことだけれど、そんなのくそ食らえだ。

五時間目が始まって、六時間目が始まって、彼女は目を覚まさない。

時折、心配になって琴理の脈を確認してみたけれど、規則正しく動いていた。細い手首の下で、しっかりと血が通っていた。私の気がつかぬ間に、死神に殺されていたら、と思うと一歩も保健室から出る気にはなれなかった。

放課後になり、保健室の扉が音を立てて開いた。

一瞬、死神のやつが来たのか、と思って身構えたけれど担任の深川先生だった。

私たちの荷物を持って来てくれたらしい。あまり琴理の傍を離れたくなかったけれど、担任の呼ぶ声に従って入り口まで行き、鞆をひったくるとすぐさま琴理の眠るベッドへ引き返した。あとでちゃんと謝ろう。

琴理はまだ目を覚まさない。このまま眠り続けたままになってしまうのではないかと、という厭な妄想が頭を駆け巡る。

そんなのは厭だ。琴理の未来にそんなものが待ち受けているというのなら、どうにかしてその未来を変えたい。私は中学二年生で何の力もないけれど、琴理を守りたい。そんなことを思っていると、コンコンと控えめなノックの音が聞こえた。今度は誰だろう。保健の篠塚先生だろうか。

死神が律儀にノックをするとは思えないので、こちらからドアを開ける。

「……！」

驚いた。

ドアの向こうにいたのは上城光だった。如何してこの子がここにいるのだろうか。言葉が上手く出てこなくて、口が閉じたり開いたりを繰り返す。今はこいつにかまっている場合じゃないのに。琴理の命が危ないのだ。それなのに、こんな……。

「帰って……」

漸く出てきた言葉はその一言だった。怒りを押し殺して、そう告げた。厭だった。こうしている間にも琴理は死神に狙われているのかもしれないのだから。

「帰ってよ！」

勢いよくドアを閉める。然し、あちらからノブを掴まれて、完全には閉められなかった。

「と、戸塚さん、如何したの！ 何があったの？」

上城さんの声が空気を揺らす。ドアを引っ張りながら、冷静になりつつある頭が、今しがた見た光景を思い出す。上城さんの制服は濡れていた。水でも被ったかのように。いったい彼女に何があったのかは判らない。

でも、今は上城さんのことを気にしてられない。ごめんと心の中で謝る。

「お願いだよ、戸塚さん……入れてよ」

泣きそうな彼女の声を無視して、力の限りドアを引き寄せる。怒りは力になる。身体がまるで自分のものでなくなったような高揚感と万能感。なんだってできる、そう思えたのだ。

「五月蠅い！ 帰れって言ってるでしょう！」

バタンという大きな音を立てて、保健室のドアは完全に閉じた。それは私と琴理を世界から隔離したように思えた。まだ外にいるだろう上城さんの気配は感じられない。

彼女には悪いけれど、仕方がないのだと自分に言い聞かせる。

でも。

周りからあまり評判が良いとは言えない上城さん。昔、彼女に心配されたことを思い出す。私が不機嫌なことを見抜いて、気遣ってくれた。上城さんは悪い子じゃない。でも、嫌われている。きっと、みんなは怖いのだ。自分が嫌われるのが怖いから、嫌うべき対象を作る。それが口下手で大人しい上城さんに役が回ってきただけの話。

自分の言動を思い返す。琴理が心配だったとはいえ、上城さんには悪いことをした。謝らなくちゃ、そう思ってたった今閉めたばかりのドアを開ける。

外の喧騒が聞こえる。帰りの SHR も終わった頃だろう。勿論、廊下には上城さんの姿はない。先ほど彼女が立っていた床は少しだけ濡れていた。一瞬、上城さんの流した涙かと思ったけれど、彼女の服が濡れていたことを思い出す。きっと何かあったのだ。いじめ、という言葉が浮かぶ。少しだけイライラした。

琴理のことが心配になってベッドまで戻ると、彼女は目を覚ましていた。今の騒ぎが五月蠅かったのかも知れない。上半身だけ起き上がり、外に広がる夕日を眺めている。心の中に安堵が広がった。

「良かった！ 起きたのね、琴理」

笑顔でそう叫ぶと、保健の先生を呼びに行くことにした。

目が覚めていれば、やすやす死神に殺されることはないだろう。それに、殺すのなら寝ている時の方が都合は良さそうなのに、殺しに来なかったのだから何か理由があるのかも知れない。

とにかく、安心した私は職員室まで走り、保健の篠原先生の手を引っ張って保健室に取って返した。然し、保健室の中から琴理の姿が消えていた。

如何して？

厭だ。

まさか私が目を放した隙について、あの死神が……？

憤怒（４）

不思議そうな先生を残して、私は走り出した。探せ！　探すんだ！
がむしやらに駆けていると、遠く、昇降口にいる琴理を見つけた。
まったく心配かけて……！　気づけば心の中で、怒りの気持ちが増大している。
如何してそんな身体で動いているのだろうか。今は私と一緒にいた方が良いのに。このままでは本当に、彼女は連れて行かれてしまう。厭だ。それだけは、厭。
なかなか縮まらない距離に、激しくイライラする。私の身体はちっぽけで、いくら速く駆けても自分の限界は超えられない。
「何処行くの、琴理！」
力の限り叫ぶ。
でも、彼女は私の言葉が耳に入っていないのか、歩みを止めない。
ふらふらの身体を引きずるようにして、一步一步進んでいる。
私から遠ざかっていく。
逃げ出してみたいに。
上履きのまま校舎の外に飛び出す。靴に履き替える余裕なんてなかった。琴理の背中はずぐに見つかった。幸い、彼女の速度は遅かった。
良かった、追いつける。そう思った時だった。
ぞわり、と背中が震えた。悪寒が走るとはこういうことなのだろうか。
死神の気配だ。
まずい。
琴理、逃げて。
私から逃げるんじゃなくて、死神から逃げてよ。
腹の中で感情が爆発しそうだった。
憤怒、という言葉が今の私にはぴったりだった。
辺りを見回して、死神の姿を捜す。
琴理に追いつくよりも、根元を断つしかない。あの巫山戯た死神の姿を捜す。
でも、前に見た白いスーツ姿は何処にも見えず、校庭には沈み行く太陽の橙だけがあった。
何処だ。
何処だ、死神！
焦る気持ちを宥めながら走っていると、何処かで悲鳴が聞こえた。
何だろう。
ふと頭上を見上げてみた。
屋上。
夕日に照らされた屋上に人影が見えた。
三人分のシルエット。
転校生の神代闇。
屋上の縁に背を向けて立ち、今にも落ちそうな上城さん。
そして、純白のスーツに身を包んだ、死神。
死神の右手が、ぼんと上城さんの胸を押すのが見えた。神の見えざる手は、上城さんたちには感じられない。ただ訳も解らずに、後ろへと押されるだけだ。ふわっと宙に浮く、上城さんの身体。
必死に駆けて、手を伸ばす神代さん。でも、死神のいる位置が悪かった。彼女の身体は無意識に死神を避ける。その為、伸ばした腕は、上城さんには全然届かなかった。
やけに長い時間をかけて、上城さんの身体は宙を泳いだ。スローモーションに世界が動く。でも、終わりはすぐそこ

なのだ。彼女は屋上から地面まで、一直線に落ちていった。

気味の悪い音と共に、彼女の身体が地面にぶつかり、弾けた。上城さんは死んだ。

先ほどのことが脳裏にちらつく。謝っておけば良かった。今更後悔しても遅いけれど、もっと良い追い払い方だってあった筈なのだ。

上城さんが落ちたのは、ちょうど琴理の真横だった。死体の周りに広がる血溜まりを、琴理は感情のない目で見つめている。

やがて、何かを決心したようにふらふらと近づき、しゃがみこんだ。そして、琴理は服が汚れるのも気にせずに、地面を這う上城さんの血を、掬いにとって舐めた。

それはまるで、小学生の時に見た、カラスの群れだった。死体に群がる、黒い身体。黒を基調にした制服、ふたつに結った琴理の黒い髪。それが厭でもカラスを連想してしまう。琴理、あんたはカラスなんかじゃない……。あの死神じゃない、昔見た漆黒の群れでもない、私の友達じゃないか。なのに、如何して、こんな……。

頭の中がからっぽになった気分だ。何も考えられない。

如何したの、琴理。一体、如何しちゃったの？

震える足を叱咤して、私は駆けた。勿論、琴理を止める為に。私が行かなくちゃいけない。彼女を止められるのは、私しかないのだ。

後ろから琴理の身体を羽交い絞めにして、血の海から引き剥がす。

「琴理、琴理！ あんた、なにやってるのよ！？」

「離して、離してよっ！！」

暴れる琴理に、必死にしがみつく。

もう良いから。

もう良いんだよ、琴理。

もう止めてよ。

その訳の解らない行動が、私をいらつかせるの。だから、止めてよ。

「……亜月」

力の抜けた彼女の身体は、血まみれだった。顔も制服も、真っ赤だった。唇から垂れた血が、ぼろっと涙みたいに地面に落ちる。

「私、如何すれば良いんだろう……こんな身体、厭だよ……」

気がついたら琴理の目からはぼろぼろと涙が零れ落ちていた。

上城さんの死がショックだったのだろうか。いや、違うかも知れない。こんな身体、という言葉の意味が解らなかった。

彼女は少しだけ落ち着いたみたいだった。押さえていた腕を放してやる。琴理は滔々と語り出す。

「如何してだろうね……いっぱい、いっぱい我慢したのに……結局、私は駄目な子なんだよね……ごめんね、亜月い……ごめんね……」

遠くで救急車の音が聞こえる。

きっと上城さんの為のサイレンだ。

「私ね……吸血鬼なの……人間じゃないの」

どきん、とした。

心臓が跳ねたのだ。

吸血鬼なんてファンタジーの代物だ。でも、彼女が言うならそうなのかも知れない。

「うん。そっか」

ぼつり、とそれだけ言った。琴理が続ける。

「半年前にもね、血を吸ったの……亜月の、血を……こんな私じゃ、友達失格だよね……」

半年前……。保健室での出来事だろうか。

あの日、琴理は今日みたいに授業中に倒れた。当時、保健委員だった私は彼女を保健室に連れて行ったのだけれど、途中からの記憶が曖昧で、結局私は保健室のベッドで寝ていたのだ。家に帰ってお風呂に入った時に、自分の首の辺りにポチポチと二つの奇妙な点を見つけた。虫刺されかと思っていたのだけれど、それは琴理の噛み痕だったのか。

薄々そうなのかも、とは思っていた。でも、そんな話は小説の中だけだと思っていた。馬鹿らしい考えだと思っていた。それでも、琴理はきっと本当に吸血鬼なのだ。あの時、本当に血を吸われていたのだ。

友達だから、信じる。

琴理の両目からは大量の涙が溢れていく。

一気に想いの丈を言い放った彼女は、力なくしな垂れかかってくる。肩で息をする琴理を私はそっと抱きしめた。

保健室の薬品の匂いと、彼女の髪の毛の匂いがした。

きっと今まで彼女は辛い思いをしてきたのだ。

血を吸ってしまったことを、私に打ち明けられずに。

こんなに小さな身体で、必死に。ごめんはこちらの方だ。何かを隠している琴理に、私は一方的に苛立っていたのだから。

綺麗な涙を流す琴理。吸血鬼に涙は似合わない、と素直に思った。

そんな彼女が本当に愛しくて、抱きしめる腕に力をこめて、歌うように言った。

「琴理が何者かなんて、関係ないよ……吸血鬼でも、私の血を吸ってもさ……それでも琴理は、私の友達でしょ？ それだけで十分なもの」

琴理はその言葉を聞くと、また泣いてしまった。

こんなにも心の奥深くから言葉を言えたのは、とても久しぶりだ。いつもは素直になれずに、相手を苛立たせるようなことしか言えないのに。

琴理は友達以上なのだ、と思う。

きっと親友と呼んでも大丈夫。そうでしょう？

憤怒（５）

救急車のサイレンが遙か遠くに消えた頃、校内の騒がしさも殆ど消えていた。

結局、死神が命を運んだのは上城さんのものだったのだ。

それでもやはり辛いものは辛い。彼女の動作の鈍さは、私を苛立たせたけれど、それでも、嫌いじゃなかったんだよ。

汚れた服を着替える為、琴理は保健室に戻った。

当の私も彼女を抱きしめていた所為で、ところどころに血がついている。

先に行ってて、と言って琴理一人で向かわせた。まだ私にはやることが残っているから。

太陽が半分くらい沈み、空が群青と橙で彩られている中、私の目の前に真っ白な姿の死神がつっ立っている。

仕事を終えた白い死神と、上城さんの真っ赤な血のついた私。これならば逆の方が格好もつくというものだ。

「改めて謝罪を。貴女は私を憎んでいるでしょうね」

死神の言葉が風に乗って聞こえる。

私は何も答えない。

「貴女は私を恨んでいるでしょうね」

同じような意味の言葉を繰り返してくる。

「そうね」

だから、きっぱりと言ってやった。

心の奥で荒れ狂う感情を感じる。

「あんたなんか、大嫌いよ。とっとと帰って」

叫び声が、黄昏の空に響く。

辺りに人はいないから、存分に想いを吐き出せる。

「もう、顔も見たくない」

「そうですね、もう二度と逢うことはないと思いますが」

「もう用事は済んだんでしょう？ だったら、早く帰ってよ……それでもう二度と、私や琴理に近づかないで……！」

「解りました」

申し訳なさそうな顔の死神は、それでもいつものように不安定な笑顔をよこした。

なんでまだ笑えるの？

馬鹿みたい。

「馬鹿みたい」

「……」

「あんた、本当に馬鹿みたい」

死神に向けた“馬鹿みたい”もこれで最後だろう。

無言のまま、死神はくると踵を返した。そして、沈み行く太陽目掛けて、手を伸ばすと彼の目の前に大きな黒い扉が現れた。映画にでも出てきそうな古めかしい、扉だった。子供の頃に両親に連れられていったホテルに似たような扉があった気がする。

「それでは、本当にお別れです。短い間でしたけれど、案外楽しかったですよ、この世界は」

まだ言うか。

「早く、帰ってってば」

息が詰まる。

呼吸がし辛い。

酸素を必死に吸い込み、瞬きをすると、彼の姿は校庭から掻き消えていた。勿論、あの黒い扉も一緒に。忽然と姿を消していた。

やけにあっさりと。

本当に、消えたのだ。

辺りが薄暗くなっていく。闇が忍び寄る。光があるところには闇が必ずできるけれど、闇しかないところには光は存在しない。それがなんだか悲しかった。

夜を告げる風が吹いてきて、私の頬を撫でる。

いや、風以外のものも撫でていた。涙が出ていたのだ。

ぼろぼろと、止めようと思っても止まらない。

感情が溢てくる。

でもこれは、死神が消えて安堵したからではない。

琴理が死なずに済んで良かったと思っているからでもない。

上城光という一人の少女の死が悲しかったからでもない。

答えはもう出ている。

私は気がついていてるのだ。

結局、私は素直になれない。

言いたいことも、全然言えない。

如何してだろう？

琴理を相手にした時は、あんなにすんなり言えたのに……

死神に、私のこの荒れ狂う気持ちを伝えられなかった。

好き、って一言伝えれば、何か変わったのかな。

何も変わらなかったかも知れない。なにせあの性格だし。

如何して好きになったのか、自分でも解らない。ただ、居心地が良かったのだ。死神相手なら素直に怒れた気がするのだ。隠す必要なんてなかった。そんなこと、初めてだったから。

結局、本当の気持ちは隠したままなのだけれど。

でも、これで良いのかも知れない。あそこで彼に、帰らないで、とお願いしたら、もしかすると彼は残ってくれたかも知れない。単なる希望的観測なのだけども。もしそれが本当になったとしても、それは同時に私の周りでどんどん人が死ぬことを意味する。それが死神というものだから。

それはやっぱり厭だ。

人間と死神じゃあ、きつとつり合わないだろうし。

ああ、またイライラしてきた。

あの死神にではない。

きつと、この気持ちは自分に対しての怒り。

今までも私は、自分自身に腹を立てていたのかも知れない。

自分が嫌いだ。

溜息が出る。

「馬鹿みたい」

もう微かにしか見えていない太陽に向かって呟いてみた。

涙を制服で拭ってみても、まだまだ溢れてきた。上城さんの血と、琴理の涙と、私の涙で濡れた真っ黒な制服は、夜に溶けていきそう。溶けてしまえば楽なのだろうけど。

「本当に、馬鹿みたい」

誰に向けての“馬鹿みたい”なのかは、いちいち言わなくても解るでしょ。

彼女たちに『憤怒』了

あとがきに代えて

『私』

この世界には様々な想いや感情がある。

愛情や友情、嫉妬、怠惰、色欲、暴食、傲慢、強欲、憤怒。挙げればきりがなくらい、沢山の感情を私たち人間は持っている。

それは、全て私たちの内面で起こる事象なのだ。

例えば、何か厭なことが起こったとする。厭だ、という感情が引き起こされるのは、ひどく正常な心の働きだ。

でも、一度考えてみて欲しい。

私が「厭だ」と感じなければ目の前の厭なことは、厭なことではなくなるのではなかろうか。そもそも、私が「厭だ」と思うことで、目の前の事象を厭だと感じてしまうのならば、私が「厭だ」と思うのは完全に我が儘で身勝手な行為なのではなかろうか。何故って、私が「厭だ」と感じなければ、そもそも何も“厭”という状態ではないのだから。

私が“厭”の原因なのだ。そう思ってしまう私自身が。

ならば、そう思わなければ良い。

だから私は、何も思わないことにした。何も感じないことにした。そう決めた。

悪いのは全て私。「厭だ」「怖い」「痛い」と感じてしまう私の感情など存在しなければ、何も厭ではないし、恐くもないし、まして痛くもないのだ。本気でそう思った。溢れ出ようとする感情をひたすらに、がむしゃらに押し殺す日々が続いた。

そして、気がつくと私は、何も感じない人間になっていた。どんなことにも心が動かない。

喜びも、悲しみも、怒りも、全て解らなくなった。如何いう時に笑って、如何いう時に泣けば良いのか、全然解らなくなった。全て何処かに飛んでいってしまった。いや、飛んでいったのではない。殺したのだ。他でもない私が。

それが人間として良いことなのか、私にはもう本当に解らない。心にぽっかりと穴が開いていて、感情を溜めることができない。だから何も感じない。

一番困ったのは、周りの友達との会話だ。誰かが冗談を言うと、それにつられてみんなして一齐に笑い出す。げらげらと口を大きく開けて、笑うのだ。

私も置いていかれまい、と必死になって笑ってみる。笑顔を顔に貼り付けるだけだ。簡単だ。作り笑いくらい、容易だ。少し頬が痛むけれど。

ただ、みんなの笑いの理由が解らないのだった。

如何して？

如何してみんなは笑えるの？

私は無感情。

心が冷え切って、錆びついて、色褪せて、何も感じない。

生きているのが辛い、という感情すら消えていた。

死にたい、とも思えない。何も感じないのだから。

まるで生と死の間をゆらゆら揺れる海月みたいだ。

別にどちら側に転んだとしても、私は潔くその状況を受け入れるだろう。何故かは聞く意味すらない。生も死も、私にはなんら意味が感じられないから。死にたいとは思わないけれど、生きたいとは思わない。そんな気分だから。

長い息を吐くと共に、書き終えた原稿に目を通す。つつい昔のことを思い出してしまった。

私が無感情になったきっかけ。心を殺そう、と思った頃の記憶。

それはきっと、書き上げた物語の所為だと思う。たった今仕上がった作品群には、沢山の『私』が描かれている。性別は全て女だけれど、性格がばらばらの『私』たち。

感情のなくした私が唯一、安心できる場所。それが小説だった。

言葉と記号に支配された世界。

誰も邪魔なんかできない、私だけの世界。

私がキーボードを叩いて物語を紡ぐ時、私はその世界の神になる。全てが思いのまま。感情というものを表現できるのは、物語の中だけだった。

絶対に普段の生活では言えないような、考えもしないようなことも、文字にならすらすらと表せた。

だから私はまだ生きている。物語を書く為に。別に誰かに見せる訳でもないのに。私は文字を書くことに没頭していた。そんな時だけ、無気力で無感情な自分から少しだけ解き放たれる、そんな思いもした。

完成した話をざっと読み返してみる。

全部で九篇。

登場する『私』たちには並行世界を生きて貰った。それはもしかしたら、この現実世界の何処かに、彼女たちの存在する世界があるかも、などという私の馬鹿げた妄想からかも知れないのだけれど。

作品の中の少女たちは私とは決定的に違う。私は『私』にはなれない。解っている。

彼女たちはきちんと笑って、きちんと泣ける。そんな当たり前のこともできなくなった自分とは、大違いなのだ。

作品の中の『私』は、この私から生まれた存在。

沢山の『私』を書いたけれど、きっとその中で何処か私と重なる部分がある。

作中の『私』は、私を分解して一個一個のパーツに分けて、その中の一掴みを合わせたようなものだから。

だから、共感できる部分も出てくる。どきっとさせられる箇所が見つかる。

それは私に限らず、周りの友達や、何処か遠いまだ逢ったことのないような誰かも同じこと。

きっと誰もが、『私』の一部なのだ。物語は、だから面白い。

世の中には、それこそ数えきれないくらいの物語がある。その物語の中に出てくる『私』には、もしかすると自分なのでは、とさえ思ってしまうような人物もいるのかも知れない。

では、この私という存在は何なのだろうか？ ふとそんなことを考える。

無感情で、物語の中の世界にしか熱中できない、この私は。

私と『私』の関係図。

私は様々な『私』の集合であり、様々な『私』の一要素が私。

物語を読んだ人たち全てに存在する『私』と、今物事を必死に考えているこの私。それらは完全に一致はしないけれど、何処かで重なる部分が絶対にある。

何処の誰かも知らない人の『私』と、この私が何処かで少しでも良いから重なっている、という考えはなんだかとても素敵だと思う。

何も感じない筈の心が、微かに揺れた気がした。

なんだか気分が良い。如何してだろうか。

もう何も感じないと思っていたのに。私の世界はこの狭い部屋の中で完結してしまうものだと思っていたのに。

でき上がった作品の最後を読んでも、何かが足りない気がした。もどかしい感じ。

何だろう。

考えてみると、答えはすぐに見つかった。

物語内の彼女たちのことを、救いたい。そう思った。

でもそれはきっと無理だから。私はこの物語の世界の神のくせに、何もできない。現実世界の神様と一緒に。どうせ何もできない。

だから私は、最後に二文だけ付け加えることにした。

カタカタとキーを叩いて、文字が紡がれる。私の気持ちの具現化。

これでこの話はおしまい。

でも、私のこの下らない物語はまだまだ続く。

唐突に死が訪れるまで、私は生きていくしかないのだ。

辛い運命に立ち向かう彼女たちの為に付けた、最後の一節。

何処かで重なっていても、『私』と私とが違えば、せめてこれからも楽しく過ごしてくれるように。私は願いを込めて、筆を置く。

彼女たちに

祝福あれ。

あとがきに添えて

最後にもう一篇、どうぞ。

『満月』

「息を止める練習だよ。月には酸素がないからね」

錆の浮き出たブランコの支柱。薄い月明かりに照らされている。褪せた色が頭の中をぼんやりと通り過ぎていく。記憶に残らない程度の情報が、この世界には溢れている気がする。

息を止めるのをやめた月村が、これまたぼんやりと空を見つめている。

夕暮れの空にはぽっかりと穴が開いたような満月があった。薄く光っている。

呼吸を整えた月村がこちらに視線を送る。その瞳はそれでも何処か遠くを見ているみたいだった。

「息を止めるのと、月に酸素がないのって、関係あるのかな」

私の声が空気を震わす。その音はきちんと月村に伝わるだろうか。

言葉というのは、音を伝えるのと想いを伝えるのとを同時に行う。だから言葉はとても疲れやすい。たまには自分の仕事をサボりたくなることもあるんだ。だから私は不安になる。私の声が本当に相手に伝わるのかって。

「だって、息を止める訓練をしておけば月に行った時に困らないでしょ？」

平然と月村は告げる。バナナの皮の剥き方が解らない人にこうやるんだよ、とさらっと教えるみたいに。

たとえ月に行ったとしても、宇宙服を着るのだから酸素の心配はしなくても良いと思うのだけど。私がそのことを言うと、宇宙服じゃ駄目なのだと返された。

月村満という人間は月を直接感じたいのと言う。

自分の肌で、眼で、足で、耳で、鼻で、月を感じたい。そう言った。

突然、私の下の名前を呼ばれて驚く。

「私の名前、如何して……？」

「戸塚さんの下の名前にも『月』が入っているよね。だから憶えていたんだ」

『月』の文字が入った名前の人はずぐに目に留まるらしい。それほどまでに月が好きなのだろう。月村にも『月』が入っている。きっと嬉しい筈だ。

月村満という名前を続けて書くと、そこには『満月』という文字が浮かび上がる。ちょうど今、空に昇っている満月が私たちを薄く照らしている。

私の名前にも『月』が入っている。でも、なりそこないの月だ。それなのに月村はにこりと微笑んだ。

「いつか月に行くんだ。絶対に」

そう呟く月村は、何処か儚げで、いますぐにでもここからいなくなってしまうかに見えた。

それは二ヶ月も前の記憶だ。

月村はもういない。一週間前に、死んだ。

死因は窒息だったそうだ。不思議なことに首に絞められた跡もなく、鼻や口を塞がれた跡もなかったそうだ。まるで、自ら呼吸することをやめてしまったかのように。

きっと、彼は自分で呼吸することを拒んだのだ。息を止めて、そして、死んだ。

呼吸は無意識の動作だ。わざわざ息を吸って、吐く、吸って、吐く、という行動を意識する人なんてまずいない。寧ろ、意識をし始めたらそれはそれで辛い。無意識の行動を意識的にするのはなかなか疲れるものだ。

呼吸は生きる為の動作。体が無意識に生きようとする、大切な動作だ。

逆に月村が行っていたような、息を止めるなんてことは少しずつ死に歩み寄っていくことなのだ。

彼は死にたかったのだろうか。ぼんやりとそんなことを考える。

高校生になってみても、私には未だに死というものが何かを解っていない。この世から消えてなくなってしまうことだ

、と知識としてはある。でも、本当にそうなのだろうか。よく解らない。

中学生の頃、私は何も解ってなんかいなかった。誰かを喪う怖さに、ただ怯えていただけだ。あの頃必死になって伸ばしていた長い髪を高校入学の際にぱつぱりと切った。切り落としてみると、何をそんなに自棄になって髪を長くしていたのだろうかとかさえ思った。短くなった髪はとても軽くて、頬に当たって苛々することもなくなった。

でも。

内面をそう簡単に変えることなんかできない。

私は私だ。中学生の私の延長線上に、高校生の私がいる。結局、何も変わっていないのかな……。

月村満はいつも何処か遠くを見ていた。それは死後の世界かも知れないし、空に浮かんでいる月かも知れなかった。

結局、私は彼の月にはなれなかった。所詮、なりそこないの月な訳だし。

月は一人では輝けない。

月村と私ではどちらも輝ける筈がなかったのだ。

月村の訃報を聞いてからも私は一度も涙を流さなかった。それが如何してなのかは解らない。私にとって月村という人物がそれほど重要ではなかったということなのだろうか。

「おお、まだ残ってたんだ。亜月、早く帰ろう」

教室の戸を開けて、友達の名谷川琴理が私を呼んだ。琴理とは中学校からの付き合いだ。肩口で彼女の黒い髪が揺れた。

彼女は私が月村と接点があったことを知らないだろう。月村満は私と同じクラスだった、ということぐらいしか、琴理を含め殆どの生徒は認識していない。

私は帰りの公園で月村とよくブランコに座り、月を眺めた。

二人の会話はもう私しか知らない。私がいなくなったら永遠に失われる。

「今日は月を見て帰ろうと思って」

「月？」

琴理は首を傾げてしまう。それもそうだろう。わざわざ教室で月を見る必要なんかない。帰り道に空を見上げれば済むことだ。

「月村君、だっけ……その」

亡くなったの。

おずおずと琴理が訊いてくる。私は彼の机の上に置かれた花瓶に目をやり、頷いた。沈黙が降り積もっていく。私も琴理も無言で、窓の外に広がる藍色に染まる空を見た。

今夜は満月だ。ぽっかりと丸い白銀の月がこちらを見下ろしている。

月村は月に行けたのだろうか。あの満月に、月村はいるのだろうか。

月は酸素がないから息を止めていないと、駄目なのだ。

生きていては、駄目なのだ。

だから、彼は――

「亜月がススキを取ってきたの？」

花瓶にはススキが五本刺さっている。私が校庭から取ってきたものだ。窓からの風が、少しだけススキを揺らした。

月を見る為には、なんだか必要だと思った。だから手をススキで切りながらも取ってきたのだった。手に裂傷ができた時の痛みは、なんだか生きているということを実感させた。

ずっと琴理が近づいてきて私を抱きしめる。

「泣きたい時は泣いたら良いんだよ。我慢なんかする必要、ないんだよ」

その声は何よりも優しく私を包み込んだ。

傷のついた手で、私も琴理を抱きしめる。

風が吹いて、私たちを撫でた。秋の匂いがする。

ひんやりと頬が冷たく感じられて、そこで初めて自分が泣いているのだと気づいた。

月村満はもう帰ってこない。

特別仲が良かった訳ではない。教室内でも時折話す程度だった。帰り道に公園で逢ったのだって数える程しかない。それでも、私は月村に死んで欲しくなんかなかった。

涙で滲む視界に、空に浮かぶ満月が見える。

月村満がいるだろう、満月だ。

明日には少し欠けた月が平気な顔をして空に昇るのだろう。そうやって日に日に欠けていく。それはまるで、私の中にある月村との思い出が徐々に消えていってしまうようで、そのことを考えると不安で不安で堪らない。

時間が経てばまた月は満ち始めるだろう。欠けては満ちて、満ちては欠けての繰り返し。

それは人と人の関係に似ている。

近づいては離れて、離れては淋しくなってまた近づいて。それでもいつか何もかもを失くしてしまう日が来る。生きている以上、それは避けられない。でも、だからこそそれまでは精一杯生きていこうと、少しだけ思う。

いつか、月に行こう。

そして、宇宙服を脱ぎ捨てて、自分の口でありもしない酸素を思いっきり吸ってやろう。

息を止める練習なんてしなくたって、ちょっと苦しいだけで月を感じられるんだよって月村を笑ってやる為に。

いつか、絶対に。

だからそれまでは。

「忘れないよ」

それまでは、忘れてやるもんか。

絶対に。